

---

# tastic love

山田木理

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

t a s t i c l o v e

### 【Nコード】

N 5 9 0 4 E

### 【作者名】

山田木理

### 【あらすじ】

高校生である圭太は、彼女に優しいキスをした<sup>…</sup>。遠い昔、人魚テイステイックに呪いをかけられた男の悲しい物語です。\*\*\*t a s t i c l o  
veラヴの“ t a s t i c ” は、“ t a s t e ” から作った造語です\*

\*\*\*

## 第1話 t a s t i c k i s s

雨の匂いが残る町に静かに光が満ち、濡れたアスファルトが光を反射しキラキラと輝く。

分厚い雲の隙間から現れた太陽が容赦なく地上を照りつけ、町を乾かしていく。

濡れた塀の上を歩いていた一匹の猫が体を震わし、白い毛を濡らしていた雨水がピシャピシャと周りに飛び散った。

「お腹空いた〜」

「圭太君。ついさっきマックで二人分は食べてたよ」

曲がり道の向こうから聞こえてきた楽しげな会話に白い猫がピクリと耳をそばだてた。

近くの高校の制服を着たカップルが曲がり角から現れる。

「そんなに食べた？オレ」

自分の短く整えたサラサラな髪を掻き上げ、圭太は笑って隣の少女を見下ろした。

「食べてたよ」

僅か目線が下の少女は、そう言って圭太を覗き込み無邪気に微笑んだ。

「そうだったけ？」

「そっだよ」

少女はクスクスと微笑む。圭太は僅かに目線が下の少女に優しい瞳を向ける。

「ミキちゃんの家ってこの辺だよな」

「うん。この角曲がったところだよ。今日は送ってくれてありがとう」

少女は満足そうに圭太を振り返る。

圭太は繋いでいた手を離し、その手を少女の頬にゆっくりと添え

た。

サラリとした頬の温もり。

色素の薄い髪がフワリと圭太の手に掛かる。

少女は吸い込まれるように圭太の瞳をうっとり見つめてから、目を閉じた。

そして、軽いキス。

唇が離れる。

圭太は、少女の瞼が開いていく様を静かに見つめた。

睫毛が長いな…。

瞼は僅かに震え、緩やかに開く。

開かれた瞳に自分が浮かんでいる。

自分の顔はこんな顔だったか…。

開かれた瞳の意味。

光の行方。

全てを体を感じる事が出来る。

少女を柔らかに映し出す圭太の瞳が西日に鈍く光った。

僅かな沈黙。そして、少女は口を開いた。

「…ごめんなさい。圭太君」

唐突な彼女の謝罪。しかし、圭太は優しく頷く。

「うん。わかってる」

「本当に、ごめんなさい」

「うん。別れよう」

少女は申し訳なさそうに何度も後ろを振り返ってから圭太の前から立ち去った。

西から刺さる光に圭太は目を細める。

「ふう〜」

溜息が漏れる。

「人生はまだまだこれから…、なぐんて」  
などと一人で言つて一人で笑つた。  
『フラれたのに笑つてんじゃねえよ』  
不意に鼓膜に届いた声に対し、振り向きもせず圭太は軽く答えた。  
「いいんだよ」

終業のベルが校内に鳴り響き、放課後に向けて学生達がざわめき始める。

週番が黒板の数式を消し始め、圭太はシャープペンの速度を速めた。

数学の教師と入れ替えに担任が教室に入って何やら叫んでいる。

強い西日が窓際の圭太に容赦なく降り注ぐ。

窓の形が彼のノートにクッキリと鋭い影を落としている。

不意に大きな影が窓の形を壊し、耳慣れない声が出た。

「鈴木君で、真面目なのね」

圭太は顔を上げた。

開いた窓から入る生暖かい風に艶のある黒い髪がさらさらと揺れ、熟れた葡萄のような瞳が圭太を射抜いていた。

堀内杏子。

二年に進級し初めて同じクラスになったが、この二ヶ月間一度として言葉を交わした事はなかった。

勿論、クラスが同じになるまで圭太はその存在すら知らなかった。

始めて言葉を交わした。

そして、初めて目を合わせた。

黒い瞳は真っ直ぐに圭太を写し出している。

瞳の中に封じ込められたような錯覚が圭太を襲った。  
そして、耳に響く雑音。

この音は、雨…？

どこかで自分はこの雨の音を聴いたことがある。

激しい雨。

悲しい微笑み。

突き刺すような視線。

満たされた…。

「杏子。いるか」

圭太の思考回路は遮断された。

廊下から杏子を呼ぶ声はその彼氏のものだ。

彼女はそれ以上何も言わず男と出て行った。

耳には雨音の幻聴のみが残っている。

今のは…？

圭太は無理やり幻聴を思考の彼方におしやった。

そして、圭太はノートの続きを書こうと前に向き直ったが、すでに遅かった。

週番が全てを消した後だ。

「あゝあ…」

圭太は、がっくりと肩を落とす。

ノートを閉じると、担任が圭太を見下ろしていた。

「鈴木。確かお前のトコは今日でよかったな。三者面談」

担任の声に雨音はようやく遠ざかる。

「…すいません」

「いいんだよ。今日の五時だろ？進路相談室で待っているから！」

快活で健康で白い歯の似合う体育教師は、ドリンク剤のCMで口

ツククライミングをしていそうだった。

笑顔の担任が去ると、いつのも顔ぶれが圭太に近付いてきた。

松原と岸である。

「三者面談って確か来週からだろ？お前ん家今日か」

「うん。ウチって両親が、今、アメリカだから、叔母が来てくれるんだ。まあ、その叔母の都合でね」

「おお。アメリカか！もしかして圭太って帰国子女ってヤツ？」  
松原が眼鏡を外しウキウキと聞いてくる。

「うん。一歳までね」

「一歳か。道理で英語の成績が思わしくないわけだ。胎児教育っていうのは全くの嘘だと圭太は証明したようなモンだな。母親の胎内で一〇ヶ月とプラス一年間、英語を聞いて育ったにもかかわらず、過去完了形を理解してないからな」

「余計なお世話だ」

そう言つて圭太は松原を睨み返してみる。

「そんな事より、圭太って、堀内と知り合いなのか？さっきなんか話してたろ」

岸が興味津々で聞いてくる。圭太は首を横に振つて言う。

「いや。今日初めて声掛けられた」

「なんて？」

「鈴木君って真面目ねって」

「はあ？何だそりゃ？」

「オレは真面目だぞ」

「そうじゃなくて、あの堀内が何で圭太にわざわざそんな下らないこと話しかけるんだよ」

松原が納得しかねるように首を傾げる。

「知るかよ」

「まさかナンパ？」

的外れなことを言う岸に松原は即座に否定した。

「まさか。でも、堀内っていつも何考えてるか分からないよな。クラスでも浮きまくっているし、人を寄せ付けない雰囲気はバシバシ醸し出してるし」

「…だな」

今まで堀内杏子を意識して見たことが無かった圭太は曖昧に返事するしかなかった。

「でも、堀内ってめっちゃオレのタイプ」

岸が圭太の手前の机に座り呟く。

それに松原は水を差した。

「まあ、かわいいのは認めるけど、中学ん時ヤンキーだったってさ。ウリまでやってたって噂あるぜ。それより、圭太、お前、ミキちゃんにフラれたんだって？」

身乗り出して、松原が聞いてきた。

「嬉しそうに言うなよ」

情けない声を出した圭太に、岸が追い打ちかける。

「またか？四人目じゃないか？」

「五人目だよ」

頭を抱えて、圭太は大げさに落ち込んで見せた。

「圭太ってさ、何故かモテるくせに、いつもすぐフラれてない？」

「もしかして、オレってばメチャメチャ可哀相かも」

松原はにやりと笑った。

「今週の日曜日空けとけよ。C組の青木もえが…、俺の中学からの同級生だけど、友達二人連れてきてくれるわけ。休日を楽しく過ごしましょってワケ」

その言葉に圭太は目を輝かせ、しっかりと松原の手を握りしめた。「友達だよな。オレ達」

圭太は満面の笑みを浮かべた。

記憶にあるのは、鼓膜を打ち続ける激しい雨。雨に浮かぶ夜の湖。



それは、どこで見たものか。  
それは引力を持つ湖だった。

杏子の中にあり続ける得体の知れない不安は常に雨と共にあった。

「鈴木圭太とはどういう知り合い？」

長身の男は調子の良さそうな声で一年間持ち続けた疑問を、何気なく訊いてみた。

「…木津には関係ないと思うけど」

素っ気ない声は堀内杏子の物である。

杏子は木津が彼の名を知っていることに何の疑問も持つことなく返した。

木津は肩を竦め、わざとらしく落ち込んで見せた。

「傷ついちゃうなあ〜。オレ」

杏子はチラリと木津に目を向ける。

木津の耳にある直径1cm程の並んだ三つのリングが肩まで伸びた茶髪の間から輝いている。

「どうして、このぼくの熱い想いわかってくれないわけえ？」

杏子は呆れ顔で隣の惚けた友人の顔を眺めている。

木津と杏子は一年生の間は同じクラスだったが二年になり別のクラスに成ったのだ。

入学一週間目で告白され、即座に断ったにもかかわらず木津は飽きもせず杏子にくつついていた。

他の学生からは当然付き合っている物と思われ、特に否定しない杏子達は今や公然の仲と為っていた。

木津は杏子を見続けていたから気付いてしまった。

杏子の視線の先にはいつも鈴木圭太がいた。

鈴木圭太は童顔だが涼しい顔をしていて一部の女子には人気があった。

しかし、特に目だった人間ではなかった。成績は普通。部活は帰

宅部。

木津が秘かに仕入れた情報では杏子を引きつける要素など何一つ見当たらなかった。

「杏子オ、いつもと道違うけど?」

毎日、高校の近所に住む杏子を送って帰るのが木津の日課である。

「薬屋に寄って行くのよ」

「風邪でもひいたか?」

そんな風には見えないけど、と顔に描いて杏子を見る。

「母さんよ」

「ああ。血の繋がらない母の?」

言いにくい事を木津はサラリと言う。

心に壁を持つと言われる杏子であったが、木津だけは特別だった。勿論、最初からそうであった訳ではない。木津の一年間の努力の賜物である。

木津も1年を使い、徐々に杏子を理解した。

杏子の態度は、心に壁を作っているわけではない。

単純に、人間付き合いが単純に下手なのである。

もしかしたら、逆かもしれない。

誰もが杏子のまっすぐに見る強い瞳に、周りが耐えられないのではないだろうか。

壁を作っているのは、杏子の周囲の人間かも知れない。

でも、それならそれで、そのままがいい。

杏子を理解できるのは、自分だけでいい。

「そうよ。血の繋がらない私を一人でここまで育ててくれた母よ」  
母を語る時、杏子の顔は僅かに緩む。

木津は眩しそうに杏子を眺め、静かに細い肩に手を回す。

「調子に乗んじゃない」

鋭いつつこみと共に手が払い落とされた。

「え〜。圭太君の成績でしたら志望の国公立は、特に問題ないようですね。出席率にしろ授業態度にしろ圭太君は問題ないです」

常に笑顔を崩さない担任は白い歯を覗かせつつ、圭太の成績を記録されてあると思われる冊子をパラパラ捲っている。

特に優等生ではないが、問題を起こさず成績もそこそこな圭太は担任にとって最も楽な生徒だ。

圭太は隣の叔母をチラリと横目で見遣る。

（派手すぎだ…）

喉で溜息を殺している圭太の苦労も知らずに叔母は圭太の視線に気付きウィンクを投げてきた。

「で、今も国公立志望と言うことでよろしいですか？」

「ええ…」

ニッコリと微笑んだ叔母は赤い唇を開いた。シャネルのスーツは明るいついんくだった。

担任の目は自然に叔母の胸元に移る。スーツの胸元から見える谷間は、健康優良独身体育教師には刺激が強すぎるようだ。

「はあ〜」

決して長くはない三者面談にドツと疲れたように圭太は深い溜息を吐いた。

放課後の人気の少ない廊下にはグラウンドから聞こえてくる野球部かどこか知らない部員達のかけ声だけが響いてくる。

「どうしたの？ケイちゃん。溜息なんかついちゃって」

隣の派手な叔母を見てまた溜息が出る。

圭太はつくづく他の学生と日にちをずらしたことを正しいと悟っていた。

「カオルさん。派手すぎですよ〜」

「ひつど〜い。ケイちゃんのためにこのスーツ新調したんだから！」  
「…どうも、ありがとうございます」

「でも、私の叔母役も結構上手かったでしょ？こういうの一回やって見たかったのよね」

「はあ…」

『ええ』と『まあ』しか言わなかったくせに、と圭太は思ったが口には出さない。

それより、最後に自分の店の名刺を出しはしないかと冷や冷やしにくらいだ。

「それより、ケイちゃん。本当に進学するの？今、バイトしてるとこは続けるの？」

「実は、まだ決めてないんですよ」

「ふ〜ん。それにしても、ケイちゃんが高校生だなんて知らなかったな〜。叔母のふりしてくれて頼んできた時は何かと思っただわよ」

「あの、くれぐれも僕の店には内緒ですよ」

「分かってるって。それより、今度たっぷりサービスしてよね」

そう言っつて圭太にキスしようとした。

「ここは学校です」

「いいじゃない。誰もいないわ」

「僕、カオルさんの事、好きですよ」

カオルは子供のように頬を膨らませた。

「だから、キスはしたくないって言っつて言っつてしょ！いつもの口癖ね」

圭太は僅かに微笑んだ。

それを見たカオルはプイツと顔を反らせた。

「ケイちゃん見てると、意味もなく悲しくなっちゃうよ」

ハイヒールのために圭太を見下ろす格好になっていたカオルはキスの代わりに圭太のほっぺを二度軽く叩いた。

「今日は本当にありがとうございます」

圭太はニツコリ微笑むとカオルも笑った。

日曜日。

徐々にオレンジ色に染まる街に、冷たい風が吹き抜け、家へ向かう人々の足を速める。

「絶対、ユイちゃん、お前狙いだっ たよな」

三人の女の子の内一人が門限があると言い始め、カラオケのみで解散になってしまい岸は未だに機嫌が悪い。

「ユイちゃんって美脚のショートパンツの娘だよな。やっぱりな。オレもそう思ったんだ」

「チキショー。何で、お前ばかりもてるんだ？身長だってオレの方があるし、圭太、170ないだろ？」

「人間、身長じゃない」

「中身か？」

「勿論、顔だ」

キツパリ言い放って笑う圭太の涼やかに整った顔には、まだ幼さが漂っていた。

「チツ。一人で言ってるよ」

岸は圭太の頭を軽くどつくと橋の上で別れた。

岸の後ろ姿を見送り圭太も顔をほころばせ、足を翻す。

オレンジ色に輝く光の帯がキラキラと水面を流れている。

緩やかに流れる反射光の眩しさに圭太は目を細め、覚えてのカラオケの鼻歌と共に、川沿いの公園を歩き始めた。

通り道にある小さな公園は、徐々に闇に支配され寂しく静まり返っている。

「腹減ったなあ」

人気のない公園を横切ろうとしたところでいつもの口癖が出る。

「ちよつと待てよ」

自分を呼び止める声に圭太は足を止め、その相手を見つけたとこ

るで思わず笑みが漏れた。

「ああ。誰かと思えばアンタか。前に一度会ったよな。いつだったかな？確か…」

『アンタがキスしてフラれた時だよ』

「そう。そう。あの時の…」

思い出した嬉しさに思わず指差した先で、

『そうだよ。あの時の猫だよ』

白い猫が笑っていた。

杏子はスーパーの袋を手には家へ向かう。

母が眠った隙に買い物に出た帰りだ。

空を見上げ深呼吸をする。雲一つない空は、梅雨の合間の安らぎである。

杏子は雨が嫌いだった。

激しい雨は、一つの記憶を蘇らせる。

存在しない筈の記憶が杏子を不安に陥れる。いつか見た湖。

その日は確かに晴れていた。しかし、杏子の記憶に棲み続ける湖は、雨に濡れていた。

そして、夜だった。

チカチカと瞬く鮮やかなネオン。

賑やかな光の中でそこだけが異次元のブラックホールだった。

それは、引きずり込まれ二度と這い上がる事を許さない湖。

それでも、自ら足を向けてしまう不思議な魔力を供えた夜の湖。

杏子は確かにその湖を見た。

湖に溺れかけた母を追って…。

杏子は実母の顔を知らない。

物覚え付く頃には父しかいなかった。酒を飲んで殴られた。抵抗する術も知らず、杏子はただ耐えた。沈黙のみが彼女に許された抵抗だった。長距離のトラック運転手だった父は帰らない日が続くことが多かった。そんな時は伯父の家に預けられるのだが、ありありと迷惑顔の伯父夫婦を見たくないために杏子は常に俯き、それが彼等を一層イライラさせていた。時折、父は杏子を伯父夫婦に預けることを忘れ、そのまま仕事に出掛けることがあったが、杏子はその方が楽だとすら思った。一人で空腹に耐える方が、杏子にとっては安心できる時間だった。

しかし、父は気紛れに杏子に優しくかった。誕生日すら覚えていないくせに、ケーキを記念日だと言って買ってきてくれたり、仕事明けに杏子に抱えきれないほど大きな熊のぬいぐるみを与えたりした。その時は大概驚くほど優しい目をしていた。杏子はその瞳見たさに父の酒乱に耐えていたのかも知れなかった。

そして、ある時、父はとびきりの笑顔で最高のプレゼントをしてくれた。

お母さんだった。

父は酒を飲まなくなった。優しい義母は一日中、杏子に微笑んでくれた。そして、杏子は笑顔を覚えた。

ある日、父は新婚旅行だと言って、杏子と義母を北海道に連れていってくれた。右手に父、左手に母。両手を塞いでくれるのはとびきりの笑顔だった。

「綺麗ね……」

若い義母が摩周湖に見とれていった。

杏子は、その時泣き出したのを覚えている。摩周湖を食い入るように見ている義母が湖に引き込まれるんじゃないかと不安になったのだ。

底の見えない深い深い湖。

底には闇を沈めている。湖の中、闇はじっと待っている。一人は

淋しくて淋しくて、あまりにも悲しい。だから、じっと待っている。切ないほど悲しい湖に義母を取られるような気がした。その湖は引力を持っていたから…。

その新婚生活は、半年も持たなかった。父は杏子を養母に押し付け、知らない女と逃げるように去っていった。しかし、義母は困ったように微笑んだだけだった。そして、杏子を誰よりも愛した。杏子はその柔らかな愛を感じて育った。

公園にいるのは、猫と圭太。

その白い猫は、珍しげに圭太をしげしげを眺めた。

『ていうかさー、何で人間のアンタが猫と会話できるんだよっ』

「さあ、俺にもわからん」

圭太は嬉しそうに言った。

「最初は、まあ、感情ぐらいならわかってきたんだけど、徐々にそれらしい情報がわかるようになったんだ。でも、やっぱり、動物にもよるけどね。人間の脳って30パーセントしか使われてないんだけど、俺ってほら、年寄りだから、たぶん、今は70パーセントは使ってんじゃない。俺の予測ではね」

『年寄り？うーん。よくわからん…』

理解に苦しんでいる猫に圭太はくすくすと笑って聞いた。

「まあ、そんなにたいしたモンじゃねえよっ。それより、アンタの名前は？」

猫は少し溜息混じりに名を名乗る。

『シロだよ。センスの欠片もない主人だろ。で、アンタの名前は？』

「とりあえず、圭太」

『とりあえず圭太？』

真っ白な猫は、小さな眉間にしわを寄せたが、不意にピクリと耳を立てたと思ったら、遠くへその大きな目を向けた。

圭太もその視線を追う。圭太には視線の先に人影しか見えなかつ



だが、徐々にこちらに向かうその人物が見覚えのある人間だと気付いた。

「鈴木君？」

先にこちらの名を呼ぶその声は堀内杏子のモノである。

シロは取って付けたような猫撫で声を出しつつ杏子の足下に擦り寄る。

「堀内さんの猫だったんだ」

スーパールの袋を持ったまま、杏子は猫を抱き上げ、圭太を見つめる。

「私の、と言うより母が拾ったんだけど……。」

なあと甘い声で杏子の胸で鳴き、シロは大人しく抱かれた。白く細い指が白い猫の毛をそつと撫でる。

圭太は杏子に何故今日、自分に声を掛けたか訊きたかったが、訊けなかった。

初めて目を合わせたとき、不意に襲った雨の幻聴。

圭太にはそれが何か分からない。

しかし、圭太の本能の片隅で、杏子に対し危険なモノを感じ取っていた。

これも、普通の人間は使わない脳の働きなのだろうか。

浮いてる、近寄り難い、元ヤンキー、援助交際。そんな噂ばかりの堀内杏子であるが、圭太が感じる警報はそんなモノではない。

杏子の瞳の奥を覗いてしまった瞬間。

圭太の中で、何かぐにやりと揺らいだ。

雨の風景だ。

初めて教室で話しかけられた時より、鮮明に雨が見え、雨音が脳内に充満した。

続いて襲う空腹感。

そして、眩暈。

顔を顰める圭太を杏子は不安げな顔をした。

圭太は、その真っ直ぐな瞳から目を反らし、慌てて笑って言った。  
「堀内さん。センスないってさ」

「へ？」

「あ。うそ。何でもない。じゃあ、僕は急ぐから…。じゃあね」

杏子はモノ問いげな視線を投げたが、圭太は無視して足早にその場を去った。

深夜。

深い闇の世界の中の光の世界。ネオンがチカチカと行き交う人々を誘う。

「ありがとうございます」

圭太はニツコリと微笑み、分厚い化粧で飾った年増の女からの濃厚なキスを頬で受け止める。

「圭ちゃん。今日は楽しかったわ。また今度も指名するから」

お待ちしてますと、微笑し女を乗せた高級車を見送る。

「相変わらずモテモテやな」

後ろから声を掛けた関西人のバイト仲間にニツと笑って返した。

「喰う気はしないけどな」

それをどんな意味で取ったかどうかは知らないが関西弁の男はにやけた嗤いを浮かべていた。

圭太は男の反応をまるで無視し独り言のように呟く。

「愛は無添加無着色に限る。有機栽培であれば言う事なしだ」

「何言ってるねん。まあ、確かにあのおばはん、添加物ごてごての着色料まみれって感じじゃったけどな」

木津は友人から誘われた久しぶりのクラブに少し飽きていた。

「あゝ。木津う？久し振り〜」

壁にもたれ掛かっていた木津は、声が聞こえる方を向く。  
ショートパンツの似合う美脚の少女の名を暫く考える。

思い出そうとするそばからガンガン鳴りまくるヒップホップに邪魔される。

「ユイか？」

ようやく思い出したのは中学の同級生だった。

ユイは木津が飲んでいたコロナを横取りしてガブガブと飲み出す。

「うまい！」

「…おまえなあ」

虚しくライムのカスだけが残るビンを木津は眺めた。

ユイは気にせず聞いてくる。

「木津って北高だったよね」

「…だよ」

「鈴木圭太って知ってる？」

ピクリと木津の眉が動いた。

「こないださあ、紹介して貰ったんだあ。結構いい男だよな。気に入っちゃった」

「どこが？オレの方が全然いい男だと思うけど？」

「確かに木津の方がビジュアル的にはいいんだけどねえ。でも、彼って、真面目だし、純粹な感じだし、かわいいんだ〜」

「お前、趣味変わったな」

「木津も変わったよね。何か丸くなった」

「オレは、もともと優しい男なの」

「よく言うよオ〜。年少行きにならなかつたのが不思議なくらいなくせに。ニッポンの警察って本当に役に立たないよね。こんな危険人物を野放しにして…」

「おっ。かわいいじゃん。木津の友達？」

不意に二人の間に割ってきたのは木津をここに誘った悪友だった。彼等が木津を誘うときは、必ずナンパ目的だった。木津がいれば女

は向こうから寄ってくる。杏子に会うまで、木津にはどの女も同じに見えた。でも、それなりに楽しんでた。空々しい嘘を飾って、女の鼓膜を揺さぶるのは嫌いではなかった。嘘だと気付かない女は吐き気がするほど嫌いになれたが、それ以外の女は木津を楽しませてくれる。

しかし、それもこれも杏子に会うまでの話だ。杏子は決して木津を拒絶しない。

ただ、一線を引いた向こう側から杏子は気紛れに自分を見て微笑んでくれる。

あの、よく熟れた葡萄のような瞳で。

気紛れでも、自分を見てくれるようになるまで随分と時間をかけた。

杏子の視線の行方に気付いたのはいつだろうか。

自分が初めて手に入れたいと心から願った視線を当然のように得ているにもかかわらず、気付かない人間の存在をいつ知ったのだろうか。

鈴木圭太。

目立たない取り柄の欠片もないような人間。

少し顔がいいから多少モテるようだが、すぐ振られているのは、恐らくつまらない性格のせいだろう。

そんなつまらないと蔑む人間に激しい嫉妬心を抱く自分に木津は苛ついた。

「おい！木津ウ。どこ行くんだよ！」

「悪い。帰るわ」

木津は友人に背を向けて手をヒラヒラと振った。

地下から地上に出ると冷たい風が木津の頬をなぶった。

ビルの片隅に駐車したバイクに乗る気にもなれずポケットから煙草を取り出した。

ジッポのガスが切れていることに気付き、煙草を口にしたまま歩き出した。

煙草が吸いたかった。とにかくコンビニなり自販なりでライターを手に入れなければ、このイライラを収めようには出来なかった。

歩き慣れた街を歩き出そうとしたとき、視界に一人の男が入った。ホストクラブの前で、明るいスーツをそれなりに着こなした童顔の男だ。

鈴木圭太だった。

「嘘だろ……」

木津はホスト姿の鈴木圭太をしばらく茫然と見やった。

彼はかなり年増の女相手に、教室で見せるのと同じ笑顔振りまいている。

お酒と圭太に上機嫌な年増は圭太のスーツのポケットに数枚の福沢諭吉を押し詰め去っていった。

女を見送り、店に戻ろうとした圭太の視線が自分にあつた。その時、木津はジツと圭太を見ていたことに初めて気付いたのだった。

「高校生がこんな所で働いていいのかよ」

暫く木津を見ていた圭太が、さっきと同じ笑顔を見せ言った。

「…あの、どちら様でしたか？」

血が逆流したのではと思えるほど顔がカァーとなった。

鈴木圭太は自分を知らない。当然と言えば当然だった。自分達は一度も同じクラスになったことなどないし、面識もなかった。木津はそれなりに目立つた存在だったが、酷く自分が自意識過剰な人間に思えた。何も言えないまま恥ずかしさに目を反らした。

「あ。もしかして、堀内さんのカレシ？」

圭太は笑顔のまま聞いてきた。

「そう言えば、いつも堀内さんを迎えに来てたね。ゴメン。気付かなくて……」

ちよつと気まずそうに圭太は謝った。

木津は目を反らしたまま、同じ台詞を言った。

「イイのかよ。こんな所でバイトして…。見つかったら停学、下手したら退学だぞ」

「それは困るな…」

また、圭太は笑った。

「その為にこんな所でバイトしているのに、このせいで学校やめさせられたらバカみたいだ」

圭太は自分を見ない木津を覗き込んだ。

「もうあがるから、ちよつと待ってて、その後で話をしよう」

「え？ちよつと待て…」

圭太は木津を残したまま店に入っていった。

圭太は何のつもりで自分と話をしようとしているのか。少し考えてバカらしくなった。

口止めだろう。金でも脅し取られたと思ったか。

そんなつもりで声を掛けたつもりではなかったが、そう取られてもおかしくはない。

帰ろうかと思っただが、興味もあった。ホストと鈴木圭太。全く結びつきそうにもないのに、妙に似合っていた。堂に入っている。

「ゴメン。待った？」

圭太はこれから脅されるといった恐怖感やおどした態度とは無縁だった。

本当に友達を待たして謝っている少年だった。

「いや。別に…」

木津は三本目の煙草をアスファルトに投げつけ踏みつけた。

「まだ、バイト続ける気か？」

歩き出した圭太に促されるように木津は歩き出す。

随分、無言のまま歩いた。人気の少ない川沿いの公園に来ていた。

「あの…、すごく悪いんだけど…」

圭太が言いにくそうに目を川に向けたまま口を開いた。

木津は金を脅し取るつもりでここまで来たつもりはなかった。

「勘違いするなよ。別に鈴木のことを学校にチクろうなんて思っていない」

「あっ、そっか。うん。そうだよ。うん。ありがとう」  
間の抜けた答えをして圭太は木津を見返してきた。

そして、困ったように頭を掻いた。

「あの、名前なんていうのかな？」

「…」

木津は深い深い溜息を吐いた。

「ゴメン。悪気はないんだけど…。って自分で言ったら変か」と、やっぱり圭太は笑った。

「木津だよ。なあ、さっき自分で学費稼いでるようなこと言ってたよな。そこまでして高校いきたいのか」

「まあね」

「大学行きたいとか？」

「大学へは行かない」

「あそこは進学校だぞ。就職するなら…」

「金八先生だよ。アレに憧れて。いいよな。なんか、あれって」

木津は改めて圭太を見た。

理解しがたい存在になったような感覚に襲われていた。

学園ドラマに憧れて？

木津も見たことはあるが、今時それが理由で、ホストまでして高校生になるうとしたのか？

そこまで考えて木津は考えるのをやめた。

「鈴木。お前、杏子には以前会ったことがあるのか」

「堀内さん？いや、同じクラスになるまで知らなかったけど、そう言えば、この間、初めて声を掛けられた…」

「なんて？」

「鈴木君って真面目なのねって。いきなり…」

「それが、初めて？」

「そっだよ。なんで？」

不思議そうな圭太の目で返され木津は戸惑った。

杏子はお前をこの一年ずっと見ていた。とは絶対言いたくないし、そんな事に拘る自分もいやだった。

「別に…。悪かったな。仕事中に声掛けて…。ところで、もしさ、俺がお前を脅したらどうした？ホストネタで金とか脅し取ったら」

「払える額なら、払ってた」

「払えない額だったら？」

自分でも鋭い目つきをしていると思いつながら木津は圭太を見返していた。

「そうだなあ…」

圭太は川の流れをぼんやり見つめてから、振り返ってポツリと言った。

「殺しちやおっかな」

圭太はこちらを見て笑って、そして、決まり悪そうに言った。

「嘘だよ…。そんなにビビるなよ。冗談に決まっているだろう」

「え？」

慌てて自分を覗き込む圭太を見下ろし、木津は自分が余程怖がった顔をしていたのかと、暫し呆然とした。

確かに圭太は笑って軽く言っただけなのに…。

目だ。

大きくも小さくもないその目が木津を震え上がらせた。

だが、圭太の目が他人と、いつもと、どう違ったかと聞かれても木津には答えることなど出来なかったらう。

「木津は誰にも言わない。そうだろ？」

余裕で笑う圭太に木津は無様に目を反らせたままだった。

「言わねえよ。だから…」

杏子には近付く…。とも言えず木津は口を噤んだ。

圭太は特に杏子に興味を持っていない様子などなかった。なのに、それを言ってしまうばますます自分が惨めになる。

ポケットから圭太を待っている間に買った百円ライターを取りだ



し、煙草に手を伸ばす。最後の一本を摘んで、クシヤリと空箱を握り潰した。

「絶対、言わねえよ」

それだけ言つて、圭太に背を向け歩き出した。煙草の煙はゆらゆらと流れた。

圭太は木津の背を眺めていた。

『よつ。また会つたな』

圭太は白い猫を見下ろした。

「夜歩きか？御主人が心配するぞ」

『オレは半ノラだからな。理解あるんだよ。ウチの主人は』

「有閑マダムみたいなさ言うなよ」

圭太はベンチに座る。

『何だよ。元気ねえな』

「オレはお前と違ってナイーブなの。あゝあ、疲れたな。やっぱり、無理だったのかなあ」

『おい。おい。リストラされたオヤジみたいな事言うなよ』

「…そんなもんだな。何か、肩叩かれた気分だけ。はあ。結構大変だったんだぜ。高校に入学すんの。書類揃えたり、ありはしない戸籍整えたりさア」

『んな事、超能力とかでパパパーとやつちまえばいいだろ』

「百パーセント脳みそ使ったら出来るのかなあ？とりあえず、練習してみよつかなあ」

「冗談なのか本気なのか圭太はぼやいた。

「シロは頭がいいよな。人間に飼われた事のある動物はある程度理解できるが…。お前は面白いよ」

『お前みたいな人間って他にもいるのか？動物と会話出来るような』

「さあね。まあ、これはオレの特技。ちなみに、趣味はテレビ鑑賞。最近のマイブームは高校生」

シロは不思議な少年を見上げた。  
「そして、シロはオレの初めての親友」

圭太は四畳半の冷たい部屋に帰った。  
殺風景な部屋には小さな折り畳みテーブルとテレビがある。  
テレビのスイッチを付けると賑やかな光が溢れる。  
ぼんやりと深夜のテレビシヨツピングを眺める。  
部屋の隅に積み重ねられた教科書に目を反らし、ああ、宿題をし  
なければ、とその義務を愛しげに考えた。

杏子には、雨とともにある記憶があった。  
昔、住んでいた六畳一間の部屋に一人残された記憶。  
父だけでなく、義理の母にまで捨てられた記憶。  
激しい雨が古いアパートを叩き付ける。  
それは、在る筈のない記憶。  
そして、不安が杏子を絡め取る。

「ナイツシュー！」  
奥に閉じこめた記憶をなぞっていた杏子は、遠くから響いた声に  
現実へと引き戻された。

校庭でシュートを決めた圭太が友人達にガッツポーズを見せる。  
昼休み。  
圭太たちはサッカーを楽しんでいた。  
屋上のフェンス越しに杏子は圭太達を見下ろしていた。  
隣でカレーパンを頬張っていた木津はチラリと横目で杏子を見遣  
って、空を見上げる。

今にも落ちてきそうな重い雲がたち込めている。  
「降るな……」  
木津が呟いた時、不意に杏子が口を付いた。

「雨は嫌い。嫌な事を思い出す。」

木津のカレーパンが口元で止まった。

「今の母が、唯一私を裏切ったのも雨の日だった。私を残し出て行った」

「初耳だな……」

生暖かい風が杏子の髪を巻き上げた。

木津は不意に頬に冷たいモノを感じ手で頬を押さえる。

雨だ。

「出て行った母を雨の中必死で追いかけた。でも、それ、全部夢だった」

視線にボールと戯れる圭太を捉えた。

「夢の話か」

「そう、悪い夢……」

木津は、夢の話に気に留めなかった。

杏子の母は、今でも杏子のそばにいる。

「杏子。今日三者面談だろ？」

「……うん」

「杏子は進学希望だよな」

「そう。お母さんの希望だからね」

杏子は早く就職して、少しでも母親を楽しませたかったが、もともと成績のよかった杏子を大学まで行かせたいと母親が言い張ったのだ。

「木津は？今の成績で入れるの？」

「うっ……」

わざと傷ついた顔をして見せ、溜息混じりに言った。

「まあ、三年になったら勉強でもするかな？そんで、杏子と同じ大学に入るって」

「何バカ言ってるのよ。アンタ医者になるんでしょ」

「親がそう言ってるだけだよ。オレは別に興味ないし」

木津の家は、父親が検事。母親が医者。さらに長男が弁護士であ

り、現在、大学生の次男も司法試験に向けて勉強している。そんな、エリートの家庭に育っている。三男だけでも医者になってもらいたいというのは、特に母親の強い希望でもあった。しかし、木津はそれに反抗するように中学時代は荒れていた。

「雨、酷くなってきたね」

杏子は空を見上げ、立ち上がった。

それに釣られるように木津は立ち上がり、もう一度圭太を見下ろした。

雨に仕方なく校内に戻るクラスメイトに混じり圭太が走っていた。木津は、カレーパンが入っていた空袋をぎゅっと握りしめ、ゴミ箱に投げ入れた。

「圭太。お前、ユイちゃんとはどうなったんだ？」

放課後、圭太と同じ帰宅部である岸が、圭太の机にバッグを乗せ聞いてきた。

「聞きたい？」

ニツと笑った圭太に岸が顔を近付ける。

「アレから何かあったのかよ」

「今度の日曜日にデート」

「チキショー。なんでいつつも圭太なんだ」

「人徳。人徳」

「お前に徳なんかあるか。バーゲンってなら分かるけどね。お得天てやつ？」

「安っぽくて悪かったな」

そんな会話をしながら二人は帰ろうと歩き出した。

圭太が、下駄箱からスニーカーを取り出そうとした時、

「あつ。先生」

下駄箱の向こうから声が聞こえた。

この声は…

スニーカーを掴んだまま圭太は動けなくなった。  
耳が昔確かに知っている声を捕らえた。  
あれは、何年前だ？

十年前…

「えっと…。…です。…は、…ですか？」

この声…

「ああ、その教室は、階段を上がって…」

「…ですか。ありがとうございます」

こめかみがジンジンと痛み出した。

目の前にあるはずのないネオンがチカチカと光り出す。

四角く並んだ下駄箱がグニヤリと歪む。

酸素が欲しいと思った。水が欲しいと思った。

「圭太？おいつ」

岸の顔が慌てている。

膝が床に付く瞬間、圭太は、岸の腕を捕まえ、低く呟いた。

「…腹減った」

「お前なく。ビックリするだろ！」

圭太はようやく立ち上がった。

岸はまだ少し心配そうな顔を隠せないでいる。

「大丈夫だよ。ほら、オレってば、ナイーブだろ？」

「本当だよ。学校で餓死するヤツなんか圭太ぐらいだな。大食いなんだよ。その内胃拡張で死ぬぞ」

「ご忠告アリガトウ」

圭太は笑って歩き出す。

岸も溜息を吐いて歩き出した。

岸と橋の上で別れ圭太は携帯電話のナンバーを捜し始めた。  
公園のベンチに座り込み必死に探す。

見つけたのは、

《ユイ》

圭太は迷う事なく電話を掛ける。

鈍色の空を眺め、ユイが電話に出るのを待ち続けた。

速く。速く。

下駄箱の向こうから聞えたあの声は圭太の中枢神経を間違いなく

刺激した。

ブルルルル…

『もしもし？』

ユイの声だ。

「ユイちゃん？オレ、圭太」

『どうしたの？…日曜日のこと？』

甘い声だった。常に何らかの刺激を欲しがっている想像力豊かな少女だ。

「今すぐ会いたいんだ。ダメ？」

もっと、もっと愛して。

もっと、もっと、欲しがって。

「ユイ」

『どうしたの？』

少女の声に熱が籠った。

「会いたい」

鼓膜の奥から雨の音が聞こえる…

切ないほど、その愛が食べたい…

喉が渴く…

永遠と続く飢え。

何十何万何千何百何十何日目の喰欲。

後頭部に鈍痛が走り、木津は生臭い匂いを鼻孔一杯に吸い込んだ。

血の臭いだ。

知らないヤツに殴られた。

「…おい。木津。大丈夫か」

友達だと思っていたヤツが今更ながらに近付いてきた。体中がギシギシと痛んでいる。

目の前の男がオロオロしながら木津の腕を取ろうとした。

「っ痛」

取られた腕があまりにも痛んだから、その手を振り払った。

「木津。お前変だぞ。急に知らないヤツにケンカふっかけるなんて…」

自分から仕掛けたかどうかも定かではないケンカだった。

でも、コイツがそう言うなら自分が悪いんだらうと痛んだ頭で考えた。

立ち上がるとネオンがチカチカ回った。

心配顔の友人もネオンと一緒にグルグル回る。

「お前。ヤバイよ。…クサは止めたんだろ？」

クサ？大麻のことか？あんなモンは随分ご無沙汰だ。

じゃあ、何が自分を狂わしている？

「おい…」

ネオンの中に友人が埋まって、消えた。

歩き出した自分が彼から去ったのか、彼が自分から去って行ったのかも分からなかった。

人が自分を振り返る。目を反らし過ぎていく。

酔っぱらったサラリーマン。煩いだけの大学生達。足の太い女子校生。ネオンの中に現れては消える。

ドサツと肩に何かがぶつかった。

足下がふらついてアスファルトに転がった。

「すみません」

見覚えのある女が慌てた顔で覗き込んでいる。

「コイ？」

「木津？」

一瞬、木津の顔を驚いた風に見たが、すぐにその場を去ろうとし

た。

「ゴメン。急いでるの」

走り去ろうとしたユイの腕を木津は掴んでいた。

「鈴木圭太とは別れる」

ユイは目を見開き、怒鳴った。

「アンタには関係ないでしょ!」

「本気なのか? アイツは止める」

「関係ないって言うてるでしょう! それどころじゃないの! 彼が会いたいて...。行かなくちゃ...。彼のところへ...」

自分の手を振り解こうとしたユイの腕をさらに木津は強く掴んだ。しかし、さらに強い力で振り解かれた。

「彼が好きなのよ! 放つといてよ」

そして、ユイもネオンに吸い込まれていった。

木津はぼんやりとその消える様を見ていた。喉から渴いた唾いが漏れた。

鈴木圭太とは別れる?

何故、そう言ったのか理解できなかった。ユイは自分を危険人物だと笑った。

だが、危険なのは鈴木圭太の方だ。何が何故もない。アイツはダメだ。

あいつの目は全てを吸い尽くす。

アレは、底のない湖の目だ。

「圭太君!」

先週、出会ったばかりの女が近づいてくる。

ユイという名の女。

圭太には名前などどうでもいい事だ。

「どうしたの? 圭太君。何があつたの?」

心配そうな瞳で圭太を見上げる。

その瞳に宿る熱し始めた愛を確認する。



何も言わず、グイツとユイの頬を両手に挟みこんだ。

「圭……」

キスした。

吸血鬼が血を舐め生き長らえるように圭太は愛を喰らい生きてきた。

ひたすら甘い愛、苦みの利いた愛、毒を含んだ愛。呑み込んでしまえばそこに、もはや愛はない。

そんなモノは一瞬である。放っておけばやがて腐敗していく。ならばその前に一番美味なる頃合いを見計らい食い尽くしてしまえばいい。

『じゃあ、彼方の想いはどうなるの？可哀相な人』

昔、秘密を知った中国人娼婦が淋しい瞳を向けた。

『彼方は永遠に愛する人に愛される事もなく彷徨い続けるのね。その瞳に獲物が掛かるのを待ち何度となく虚しい食事を続けるのね』  
その女の愛は、酷く塩辛い悲しい味だった。

満たされた空腹感の後に残るモノは唯虚しい満腹感。

それでもこの苦痛に満ちた空腹を満たさずにはいられない。

一つ所に落ち着くも叶わず喰う為だけに、この地上を這い回る。

これは、罰。

求めれば求める程、相手の全てを食い尽くす。

自分を愛した記憶だけでなく存在した記憶も、時には相手の精神すら破壊しかねない。

今は、少しずつ仄かな愛を嚼り空腹を紛らわす。

グラグラする頭を抱え、木津はポケットを弄る。タバコだ。タバコが欲しい。

しかし、取り出したのは、携帯だった。

無意識だった。無意識ににそのメモリを見ている。

《杏子》

思考力を失ったまま、かけていた。

『もしもし？木津？何？』

耳から流れてくる、愛しい声。相変わらずの素っ気無さに笑いが漏れてくる。

「なあ。杏子。教えてくれよ」

『はあ？何を？』

「だからさあ、鈴木圭太だよ。何なんだよ。アイツは。何でだよ」

『どうしたの？急に？』

「俺、知ってんだよ。ずつ〜と、杏子がアイツを見ていた事をサ」

『…木津が考えているような事じゃないの』

「俺が考えてる事って？」

『…変だよ。木津』

「教えるよ」

『…お昼に少し話したよね。悪い夢の話』

「夢？」

『そう、義母に捨てられる夢。アレは…』

アレは、小学校に上がって間もない頃。

父に捨てられ、それでも義理の母と平穏な生活を送っていた。

でも、その日は、古びたアパートの屋根を叩き付けるように激しい雨が降っていた。

そして、残された自分。

母のいない六畳間。

耳に木霊する母の言葉。

…ゴメンね。杏子。

何の事だろう？何も分からないまま、杏子はテーブルに残された自分の好物を、眺め続けた。

オムライスの黄色にケチャップの赤がよく生えていた。

持っていたスプーンが自分を逆さまに写し出す。

ゴメンね？

カタンとさらにスプーンを投げ出し、母が今さっき出て行ったドアを開け放っていた。

捨てられる。捨てられる。捨てられる。

幼い杏子は無我夢中で走っていた。雨が激しく行く手を阻む。

捨てないで。捨てないで。イイ子にするから。捨てないで。

どのくらい走っただろうか。

杏子はネオンが派手に光る街に来ていた。

雨にぼやけて見えるネオンがとても綺麗に見えた。

黄色とか赤とか青とか紫。

派手に着飾った女の人達が不思議そうに杏子を振り返る。

体を打ち続ける雨は痛くて、体に浸みる雨は冷たかった。

目に浸みる雨は、それが雨なのか涙なのかも杏子には解らない。

グルグルと光が回り始める。

体中の体温が上昇し始める。熱いのか冷たいのか分からないまま

彷徨った。

そして、杏子はいつか父と母とで見た懐かしい湖を見つけてしまった。

深い湖を宿した瞳を持つ男。

湖の深淵から母を見つめる瞳。

深い深い闇を深い深い底に沈めた悲しい湖を。

湖はやっぱり悲しくて淋しくて。

お母さんを連れて行くんだ…。

熱に浮かされた杏子はぼんやりと考えた。

義母の瞳は、あの時と同じ目をしていた。

…綺麗ね。

と言ったときと同じ目だ。

引力には逆らうことは出来ない。

義母は少し悲しい瞳で、その若い男と一緒に微笑んでいた。

男もまた少し悲しそうな瞳で笑っている。

義母の手にあるのはポストンバッグ。  
その日、ネオンの洪水に杏子は溺れた。

『私はそのまま気を失って、気付いたら家の中で母が看病してくれていたわ。恐る恐る、出て行かないの？って訊いたら笑って怖い夢でも見たのねって言った。私も母の裏切りを夢だと思って、忘れかけてた。彼を見るまでは…』

「鈴木圭太がその男に似ているって事？」

笑うしかなかった。

昔、最愛の母を連れて行こうとした男に似ていた。

それも、夢の話。

それだけの事だった。

『ちよつと、木津。どうしたの？大丈夫』

「ごめん。ちよつとしたヤキモチ。ほら。オレってば、愛しちやってるから」

『何言ってるのよ。切るからね』

ツーツー

「本当に切ったよ…」

切られた携帯電話を見ながら、また、笑った。バカバカしい。

「なあゝにが、危険な男だよ」

自分の勘も鈍っている。不意に頬に冷たい感覚が触る。

「雨が…」

静かに雨が降り出した。

雨の中、一人の女が濡れるのを厭わずにぼんやりと歩いていた。

「ユイ？」

熱に浮かれたように一人の男を求めて走っていった女だ。

「木津？何してるの？びしょ濡れじゃない」

「何って…。お前こそ、どうしたんだよ」

初めて雨に気付いたようにユイは自分を抱きしめた。

「うわ。寒っ」

「フラれたのか？」

鈴木圭太に会う為に、ほんの少し前に走って行った。しかし、ユイはキョトンとした目で木津を見た。

「はぁ？私が？誰に？」

「誰って。鈴木圭太だよ」

「誰よ。そのスズキケイタって？」

「お前、さっき、その鈴木に会う為に走っていったら？」

「何言ってるの？木津。訳わかんない」

「訳わかんないのは、お前だよ。だったら、なんで、ここにいますだよ」

「何でって…あれ？私、なんでここにいます？」

自分の腕を寒そうに摩りながら、ユイはぼんやりと首を傾げる。

足らない。

ユイが消えた街を圭太はうろついた。

ユイの中の自分の記憶まで喰い尽くしたのに、満たされない。十年前に恋してしまった、喰らってしまった愛を忘れたかった。

あの声…、学校でほんの少しだけ聞こえたあの声は、思い出させた。

あの激しい飢えを。

愛は飢えに比例する。

自分が愛すれば愛するほど飢える。

自分が愛した女の愛ほど飢えが満たされる。

「チクシヨウ。腹減った」

携帯のメモリで圭太は女を物色し始めた。

徐々に雨は激しさを増し、圭太を濡らしていく。

鼓膜を振るわず激しい雨音は、十年前の記憶を揺さぶる。

十年前も雨の日だった。

『大丈夫？』

空腹に膝を抱え座り込んだ圭太に声を掛けたのは、笑顔の優しい女性だった。

その綺麗などこか懐かしい瞳に引き込まれたのは間違いなく圭太の方が先だった。

圭太は過去の雨音に引きずられ、現実から溺れるように記憶を遡った。

雨音が次第に薄れ、女の言葉が記憶の中で蘇る。

『圭太の瞳は、夜の湖ね』

圭太を見つめる甘い視線は、会う毎に熱くなる。

空腹感に苦しみながらも、何故か彼女の愛を喰らう事を躊躇った。中国で出会った女の言葉が圭太を嘲笑う。

しかし、あの激しい雨の日、圭太の想いは小さな黒い瞳に貫かれた。

そして、雨の中、唇に感じた味…。

小さな黒い瞳…

思い出したのだ。彼女に子供がいたことを、彼女が子供を愛している事を。

だから、別れる為に愛を喰らった。

あの時、本当は、そうしなくなかった。ずっと、愛されていたかったから。

圭太にとって、愛は育む種類のモノではない。空腹を満たすモノだ。

貫かれた心が圭太にそう囁く。

身勝手な愛だ。でも、それでも、愛してしまう。繰り返し、繰り返し。それは、圭太にとっては、ミスだ。単なる誤りだ。

携帯を閉じた。

そして、歯止めが利かずに自らの記憶までも喰い尽くしたユイの事を考えた。

早まってしまったかもしれない。

辻褄が合わなくなるだろう。

彼女を紹介してくれた松原の友人は不審に思うに違いない。

高校三年間、何とか無事に過ごそうと細心の注意を払ってきたが、そろそろ限界がきている。

成るようにはしか成らないだろう。

昼休み。

購買でパンを買い、教室に戻ってくると、圭太は松原に手招きされた。

「圭太。お前、ユイちゃんの事、フットだつて？」

「なにに？」

丁度戻ってきた岸が会話に加わり、圭太の前の椅子に腰を下ろした。

「ユイちゃんがフットたんでなくて。圭太からフットたのか？」

松原が頷く。

「青木が言ってた」

ユイを紹介した松原の女友達だ。何気なく圭太は聞いた。

「どんな風に言ってた？」

「青木が言うには、鈴木圭太なんか知らないってユイちゃんが言ってるんだつてさ。ユイちゃんつて、ほら、可愛いだろ？男にフラれることなんて滅多にないんだつてさ。だから、相当プライドが傷ついたんじゃないのかつて」

なるほど。

圭太は思いがけない考え方に妙に感心した。

そんな風に捉えることも可能なのか。岸は納得できないように話に割ってくる。

「本当なのか？圭太。お前がユイちゃんをつつたのか？」

「うん。まあね」

「なんでだよ。超可愛いじゃん」

「話してみたら、イメージしたのと違ってたんだよ」

話を合わせた。

圭太は今更ながら心の中で笑った。

人とはそんなもんだ。非科学的な事が起こっても、何とか理屈をつけて解決してくれるのだ。

圭太にとっては有難い事だった。

誰も自分の存在など納得できない。

それでいいのだ。

いつものように杏子と昼食を共にするべく圭太のクラスに来ていた木津は、廊下でその会話を聞いた。

バカな…

ユイのあの顔は、フラれた女の顔ではなかった。

振られた相手を忘れた振りをしていた顔ではなく、本当に存在自体を忘れた顔をしていた。

間違いない記憶喪失だ。

それも、一人の男だけを綺麗に忘れていた。

だが、そんなことはありえない。

だとしたら、本当にあの夜、ユイは鈴木にフラれたのか？

「どうしたの？木津」

廊下で黙り込んでいる木津に杏子が近づいた。

「いや。なんでもない…」

この夜ばかりは、音楽が煩わしかった。

木津は、先日ユイと会ったクラブにいた。

ユイを探していたのだ。

友人を見つけて耳元で大声で言った。



「ユイ。見なかったか？」

どうしても、鈴木圭太の事が気になった。あの夜何があったのか。  
「ユイってどのユイだよ」

苗字など覚えていない。

「脚が細い女で、まあまあかわいいヤツだよ」

「そんなヤツ、一杯いるし。いちいち覚えてねえよ」

どいつもこいつも同じ答えだ。昔は楽しめたはずの音楽が脳みそをガンガン叩き、木津は店を出た。

暫く夜の街をふらつき、暗く狭い路地に入ったときだった。

突然、視界がスパークした。

木津は地面に倒れこんだ。

後ろから頭部を固い棒で殴られたのだ。

「よつ。こないだはドーモオー」

殴られた頭に手をやりながら、顔を上げた。

五人、いや六人いる。自分と年齢の変わらない奴らが取り囲んでいた。

「こないだあ？覚えてねえよ。てめえらなんか」

本当に覚えてなかった。

目の前にいた男が木津の胸倉を掴み、ニヤニヤ笑いながら、拳で木津の顔面を殴りつける。

口の中を切った。鉄の臭いが口内に溢れた。

「あゝあ。そうかよ。こないだ、オレの連れを二人も病院送りにしてくれて覚えてくれてないんだ」

その時、何となく思い出した。

杏子に会ってから、喧嘩など滅多にした事はなかったが、つい最近、鈴木圭太の事でむしゃくしゃして誰かにケンカを吹っ掛けたよ  
うな気がした。

尤も相手の顔など覚えてないが。

右から鉄パイプが振り下ろされた。木津はそれを右手で掴むと、

そのまま相手を薙ぎ払う。

目の前にいた男に掴みかかり、力任せに顔を殴ると、後ろから羽交い絞めにされた。

口から流れた血を手の甲で拭いた男が眼光を鋭くし、動けない木津を殴る。

武器を持った六人では所詮勝負が見えていた。

顔面から腹部にかけて、六人がかりで殴られ放題になった。

「痛っ〜」

グラグラ視界が揺れる。ネオンがチカチカ輝く。

死ぬかも。

他人事のように木津は考えていた。

突然、目の前の男が横に吹き飛んだ。

「誰だ！」

他の男が叫んだ時、ユラユラ揺れている視界に、鈴木圭太が鉄パイプなんか持って立っていた。

パチ。パチ。

「痛え〜」

凄まじく痛い頬を、軽く叩かれ、木津は大声をあげた。

目の前に、鈴木圭太の顔がある。

そして、涼しそうな顔で聞いてきた。

「救急車呼ぶ？」

気を失っていたことに今更気づく。

「冗談」

一言言い放つと起き上がり、公園を見渡した。

ベンチにはカップル。隅には浮浪者。奴らはいない。

「あいつ等は？」

「逃げた」

そう言っつて、圭太は微笑んだ。

学校の友人にも、客のオバサンにも見せる同じ笑顔で。

どこにも殴られた跡はない。

「これで、貸しはなしだ。バイトのこと、秘密にしてくれたから。それから、コレはサービス」

そう言っつて、小さなペットボトルの水を差し出した。

飲むと傷が痛んで、すぐに吐き出した。

「ケンカ強いんだな……」

木津はそんなことではもう驚かなかった。

それも在りえる。どこかで納得してしまえる自分がいた。

「別に……。病院送りにはしてない。後が面倒だから」

そんなことをさりりと言っつてのけられる高校生は、そうはいない。

「……ユイっつて知っつてるよな」

木津がその名を出したとき、圭太の顔から笑みが消えた。

けれども、すぐに、いつもの笑顔に戻る。

「知っつてるの？彼女の事」

「昔の遊び仲間だった。ユイをフったのか？」

松原と同じ質問。

圭太は木津の目を覗き込んだ。

木津は目を逸らした。

圭太の目が苦手だった。

いつも顔は微笑んで優しそうなのに、目が笑っていない。

ようやく、木津はそれに気がついた。だから、恐いんだ。木津に

は圭太が恐かった。

「似てる……」

質問には答えず、圭太は呟いた。

圭太は、地面にその鋭い視線を落とした。

その横顔に微笑みが僅かに浮かぶ。

懐かしそうな優しい微笑みだ。

いつもと一緒なような、違うような微笑みだった。

恐怖が徐々に和らいでいくのを木津は感じた。

「誰に似てるって？」

「昔の友達。よくつるんだ。すっげえ。悪いヤツでさ。みんなから恐がられていた。でも、ソイツが言うんだ。オレが恐いって」

圭太にとっては、遠い遠い昔の話だ。

もう、顔も覚えていないのに、何故か木津を見てみると、その男を思い出した。

「オレは別にお前の事恐いなんて思ってないけど」

自信なさ気に木津は言い返した。

「なら、いいけど」

何もかも見透かされているような錯覚に木津は襲われる。

再び静かに、雨が降り出す。

「雨が…」

「梅雨だからな」

何気ない会話をやり取りし、圭太は公園を去っていった。

そして、翌日、いつもの日常に戻る。

ひしひしと感じる日常の破綻。嘘の破綻。それでも、圭太は高校生生活を送りつづける。

「彼女欲しい」

放課後、圭太が呟いた一言に岸は、その頭をどついた。

「ユイちゃんをフっておきながら何てこと言うんだ」

友人の言葉も、徐々に遠い幻に聞える。

「今度、ナンパでも行くか？」

三人でつるんで、ナンパ目的でよく出歩いていた。

そんな時は、女よりも、ただ、友達との何気ない会話を楽しんでいたような気がする。

ささやかな日常の「コマ」を紡ぐように、平和で幸福な高校生を演じていた。

終焉の幕がいずれ引かれるだろう。

そう遠くない未来の日常のどこかで。

そして、その日も、雨が降っていた。

学食の窓に叩き付ける雨が酷く煩い。

木津は目の前の杏子を見ながら、鈴木圭太の事を考える。

杏子を思うとき、陰のように鈴木圭太の存在が付きまとう。

「木津。今日、三者面談だったよね。母親が来るの？」

「急患が入らない限りね」

「息子の面接よりも、仕事を取るの？木津の母親って」

面白そうに杏子は笑った。つられて木津も笑う。

「まあね。三者面談は明日でもいいが、患者は明日には出来ないって。そんな母親です」

おどけた調子で木津は言った。

「ふうん。何か結構尊敬しちゃうな。私のお母さんは、いつも私の事優先してくれるの」

そして、窓に叩く雨を見ながら、付け加える。

「あの雨の夜以外は…」

木津は、すぐにその意味を悟る。

あの雨の夜とは、杏子にとっては単なる夢の夜。母親が杏子を捨て、若い男に走った夜。雨の夜。

「夢だったんだろう？」

黙って杏子は頷く。

杏子はその夢の後にさらに何度も夢の続きを見続けた。

寂しくて悲しくて切ない夢に何度も杏子はうなされた。

底なしの湖に溺れた母を追い、自らも足をすくわれ、落ちていく夢を。

確かに夢だった。夢として杏子の中に存在していたはずだった。

高校に入学するまで、鈴木圭太に出会うまでは。

夢の中でしか会った事のない男、深い深い湖を沈めた瞳を、現実のモノとして見るまでは。

「…杏子。その夢が、仮に現実だとして、杏子の母親が、嘘をついているとしても、それが…」

「鈴木圭太じゃない事はわかってるよ。私もそんなバカじゃないよ。その時、六歳の男が母をさらうわけないし」

わかっている。わかっているのに、気付いたら、彼の姿を追ってしまう。

気付いたら、その視線を追ってしまう。

顔なんて覚えてない。

ただ、その瞳を覚えているだけ。

放課後、木津は教室の窓から傘を差して帰っていく杏子を見送り、母親を待っていた。

人を好きになるきっかけなんて、他愛の無い事だ。

杏子に惹かれたのもありふれた事だった。入学試験のとき消しゴムを忘れた木津に自分の消しゴムを半分に割ってくれたのだ。何も言わず、無表情に。

県下でも有数の名門と言われる高校だけに入学試験はピリピリしていた。

そんな中で、木津は浮いていた。内申書は恐らく酷いだろうし、高校に行っても行かなくてもどうでもよかった。

大きな葡萄のように熟れた瞳で杏子が消しゴムを木津に手渡す瞬間までは。

もう一度会いたい。

真面目に答案用紙に書き込み、合格した時は嬉しかった。

杏子が鈴木圭太に視線を送るのは、夢のせいではなく、いや、夢のせいで、鈴木に惹かれているのではないか。

「木津君」

若い女性の担任が木津に呼びかけた。

「今、お母様から学校にお電話が入って、三者面談を延ばして欲しいって。急患が入ったらしいわ」

雨は風を伴い激しさを増した。

「本当に、ありがとうございます。」

老女は深々と圭太に礼をし、ビニール傘を差し雨の中を歩いて行った。

愛想笑いを浮かべた圭太は、老女が見えなくなった所で大きく息を吐く。

家、近いから大丈夫ですよ、と言ってバスから降りてきた老女に、傘を差しだしてしまっただが、雨が酷すぎる。

確かに圭太のアパートは走れば10分もしない。

しかし、この雨の中走る気にはなれず、バス停横、閉店した商店のシャッターに、圭太は背をあずけ、膝を抱えた。

風向きのおかげで、雨宿りのスペースにはそれ程雨が吹き込まない。

鼓膜を振るわず激しい雨音は、十年前の記憶を揺さぶる。

「大丈夫？」

十年前、空腹に膝を抱え座り込んだ圭太に声を掛けたのは、笑顔の優しい女性だった。

どこか懐かしいその笑顔は、戦時中に恋した笑顔に似ていた。だから、付いて行ってしまったのかもしれない。

その面影に圭太は、普段は決してしないプライベートな詮索をしてしまった。

名前は？出身地は？両親はどんな人？

そして、彼女に血の繋がらない子供がいることを知った。

それでも、彼女を求める事が止められなかった。

「大丈夫？」

その声と共に、雨音が圭太の鼓膜を激しく揺さぶった。

唐突に現実引き戻されたのだ。

見上げると堀内杏子が傘を差し圭太を覗き込んでいる。

「顔色悪いけど…。もしかして傘持っていないの？私の家すぐそこだから寄ってく？」

無表情で名の知れた堀内杏子の顔は圭太を気遣う心配に満ちた顔だ。

本来彼女はこんな表情が出来る女で、唯感情を表に現すのが下手なだけかもしれない。

圭太は思わずジツと彼女の黒い瞳を見つめた。

初めて教室で声を掛けられた時に響いた雨音が、現実には耳元で響く雨音と重なった。

自分はどこかでこの黒い瞳を見た？

杏子は見つめられ少し困ったような表情を見せた。

「私の家、ここから歩いて2、3分なの。そろそろ母が帰ってくる頃だけど」

行ってはいけない。圭太の本能が圭太に忠告し始める。しかし、

「ありがとう。行かせて貰うよ」

十年前と同じ返事をしてしまった。

「助かったよ。思ったより、雨が酷くなって…」

何故彼女が危険なのだ。

圭太は己の本能に問いかけが返ってくる答えは在る筈もない。

圭太が微笑みながら立ち上がると、杏子はホツとしたように傘を差しだした。

「まだ、母さん帰ってないみたい。」

杏子は電気の消えている窓に視線を遣り鍵を回す。

居間に圭太を案内し、タオルを圭太に差し出した。

「母さん、病み上がりなのに、無理しないといいんだけど…」

杏子の溜息に沈黙が流れた。

杏子のアパートは2DKの古い作りだった。



ドアを開けると、すぐにキッチンがあり、そこを通り、奥の居間に続くようになっていた。

圭太は受け取ったタオルを被り会話を捜した。

「…そう言えば、木津は？」

毎日、木津が杏子を送っているはずである。

「三者面談。えっと、…お茶いれてくるから、テレビでも見ててテレビのスイッチを付け、杏子は隣のキッチンに向かった。

コンロにやかんを掛け、時計をチラリと見遣る。

母さん、そろそろ帰る頃だよな…。

杏子は表情が固まっている自分に気付いた。

鈴木圭太によく似た十年前の男。想像した。

母が、深い夜の湖が放つ不思議な魔力を持つ瞳を見る瞬間を。

自分だけが見た悪夢であるはず。

悪い夢の続きが十年過ぎた今になり蘇る。

母が見ている筈がないのに、確かめたいと、圭太を家に入れた瞬間に考えてしまった。

あれが、夢か、現実か。

杏子の心拍数が次第に上がり始めた。

しかし、その緊張は呆気なくリビングから聞こえた声に遮られる。

「懐かしい。このドラマ。好きだったんだ。これ見て高校生に憧れたんだ」

小学生の頃、杏子も憧れていた学園ドラマの再放送を、熱心に見入る圭太の声に気付き杏子は自分を笑った。

「バカみたい。私、何考えてたのかしら」

杏子はマグカップをキッチンに二つ並べて置いた。

それと同時にドアが開く音が、杏子の耳に届く。

「ただいま。杏子。帰っているの？」

杏子の母親はまだ若々しい声で部屋に入ってくる。  
ドラマの再放送を熱心に視ていた圭太の全神経がぴたりと止まっ  
た。

圭太の頭にはタオルがかかったままだ。  
キッチンを通り、軽い足音がピタリと止まる。

「あら。杏子のお友達？」

キッチンから沸騰を知らせる高い音が鳴り響く。

顔に掛かったタオルを握りしめたまま圭太の体中の細胞が騒ぎ出  
す。

酷い眩暈を感じる。

「珍しいわね。木津君以外の友達なんて」

テレビからの愉しげな会話がやけに遠くに聞こえる。

手は圭太の意識とは無関係に力を失い、だらりと下がる。

それに伴いタオルははらりと床に沈む。

永遠と続く飢え。

何十何万何千何百何十何日目の喰欲。

求める。彷徨う。喰らう。求める。彷徨う。喰らう。求める。

何十何万何千何百何十何回と繰り返される。

永遠に満ちる事などない……………

高級住宅街の一角に木津の家がある。

「ただいまあゝ」

広い家に木津の声がだらしなく響いた。

その声に返事するのは、祖母だけだった。

「おかえり」

二人の兄は一人暮らしをし、両親ともに忙しく家にいることはあ  
まりない。

半年前、山形で暮らしていた祖母を、祖父が亡くなったことをき

っ かけに母は家に呼んだ。

まだまだ元気な祖母は、今では一家の家事を全てこなしている。

「早かったね。今日は三者面談でしょう？」

祖母は山形に嫁いだが、元々が東京育ちの為に訛りはなかった。

「急患だつてさ」

「本当にしょうがない子だねえ。大事な息子の将来を決める相談だつて言うのに」

実の娘に対して溜息混じりに言う。

「別に、そんなのいつでもいいんだよ」

リビングのソファにドサリと座った。祖母が熱いお茶と饅頭を持ってきた。

まるで子供扱いする祖母が木津にはくすぐったかった。

祖母の話は聞いているだろうが、木津が荒れていた中学時代を直接は知らない。

木津の向かいのソファに腰を下ろして祖母が孫の目を見て真剣に言った。

「あの子は、医者にさせるって言うてるけど、別に自分のしたいことがあるなら、無理にならなくてもいいんだよ」

「…したい事があるわけじゃないんだ」

木津は祖母に対して素直に言った。

「だから、別に医者になれって言うなら、それならそれでいいんだけど、こんな医者がいたら、患者が迷惑だろう？」

孫の瑞々しい戸惑いに祖母は微笑んだ。

「あの子が医者に拘るのは、私のせいなんだよ」

「ばあちゃんのこと？」

「私の父が医者だったのよ。お前の母さんが生まれた頃には、もう死んでいなかったけど、よく、話していたからね」

木津にとつては曾祖父に当たる人だ。

「戦争中、お金を取らずに貧しい人ばかり診ていたのよ。父には私しか子供がいなかったから、跡を継ぐ人はいなかったのよ。だから、

自分が医者になるって言ってるねえ」

「そのばあちゃんのお父さん、えっと、俺の曾じいちゃんは、戦争で死んだの？」

「いいえ。医者の不養生よ。結核ね。あの頃は、結核は不治の病だったの」

昔を悲しむように祖母の顔が翳った。

祖母の左側の額には古い火傷の痕があった。僅かに凹凸が残っている。

「あの頃の事は、今でも鮮明に覚えているのに、父の死に際だけがよく思い出せないの。ただ死に顔は覚えているわ。安らかだった。空襲の最中に死んだのに、その死に顔は、眠るようだったわ。夫：死んだおじいさんが言うには、炎の中、父を助けてくれた人がいるの。でもね、私はその人の事を思い出せないの」

「知らない人だったんじゃないの？」

生きた年の分刻まれた皺が緩む。

「いいえ。父を助けたのは、私の兄なのよ」

「でも、ばあちゃんは一人っ子だったんだろ？」

「真治」

祖父の葬式よりも悲しい顔で、木津は自分の名を呼ばれた。

「この名前はね。お母さんが付けたの。私の義理の兄の名前なんだよ」

「父は死ぬ一年前に、真治という名の人を養子に貰っているのよ。ちゃんと戸籍にも入っていたわ」

「でも、ばあちゃん、さつき、思い出せないって」

「そうなの。私の夫、つまり、真治のおじいさんが言うには、私はその血の繋がらない兄と一年間、一緒に暮らしているのよ。父はその義理の兄に助けられたけど、結局は病気で亡くなってしまって、その義理の兄も行方不明になったわ。きっと、それがあまりにも辛いことだったから、忘れたんだろっておじいさんが言ってくれたわ。私はすぐにおじいさんの実家の山形に移ったから、彼を知るの

はおじいさんだけなのよ。そのおじいさんも亡くなってしまつて……」  
一人の人間をそんなに綺麗に忘れる事が出来るのか？

木津は同じ疑問を抱いた事がある。

「娘は、真治のお母さんはね。きつと父が跡取が欲しくて養子にしたんだろつて。だから、真治にその名をつけて、医者にさせたがつたんだよ」

祖母の声が耳を素通りしていく。

そんなことは、よくあることなのか？

痴呆症でもないのに、一人の人間だけを綺麗に忘れ去る事ができるのか？

「どうしたんだい？ 気に障つた？」

「あつ。うつん」

木津は首を振つた。

「ばあちゃんは、その義理のお兄さんを全く思い出せないの？」

「私が思い出せるのは、その兄を兄とも知らずに別れた瞬間だけ。変でしょう」

「え？ 待つて。顔は覚えてないのに？」

祖母のいう意味が理解できない。

「実はね。写真があるの。家は空襲で焼けたし、私自身も諦めていたんだけど、家の裏庭に掘つた防空壕に写真を入れた金属製の箱が出てきたのよ。たぶん、父が入れたんだと思うけど」

そう言いながら、祖母は自分の部屋から写真の束を持ってきた。束といっても十枚もないが。

古いセピア色の写真はぼやけてハッキリしない。

「その写真を見て、ああ、あの時のあの人が兄だつたんだつて思つたわ」

木津は一枚一枚ゆつくりと写真を見てゆく。

一枚目は祖父らしき人が軍服を着た写真だつた。

そして、五枚目あたりで木津の目が止まつた。

それは、人物のない写真。木製の看板に書かれている文字。

『鈴木診療所』

「ばあちゃんの旧姓って、鈴木だったんだ…」

「そうよ。鈴木雪子」

木津は一枚一枚写真を捲っていく。

「父は、鈴木圭吾朗」

ピタリと手が止まった。

「鈴木圭吾朗？」

「土が二つに、数字の五の下に口で・・・」

祖母の説明を聞きながら、次の写真を捲ったところで木津の全身が総毛だった。

ゴクリと自分の生唾を飲む音が聞えた。

祖母が木津の手に持つ写真に気付いて言った。

「ああ、これがその私の義理の兄だった。鈴木真治よ。覚えてないけどね」

ピーーーーー

杏子はガスを切り、薬缶の高音を止めた。

圭太にはもはやそんな音は聞えてなかった。

キッチンのテーブルに置いてあった携帯が鳴り、杏子は携帯に出た。

「もしもし？木津？どうしたの？」

『あのさ。杏子の夢の話だ。どうしてなんだ？』

突然の質問に杏子は眉を顰めた。

「何？意味がわからない」

『だから、どうやって杏子の母親から記憶を消したんだ？』

「意味わかんない。切るよ」

杏子は繰り返した。

リビングに入っていった母親の後姿を見ながら、杏子は木津からの意味不明の電話に戸惑っていた。

『待つて。だから、ごめん。えっと、その』  
木津も自分で何が聞きたいのかわかっていないらしく、言葉にな  
っていない。

『だから、十年前の雨の夜。鈴木圭太は、君の母親に何かしなかつ  
たか？』

杏子の脳裏に十年前の夜の雨が降りしきる。

ネオンの中、鈴木圭太が母に微笑みかける。

母は吸い込まれるように相手の瞳を見上げ…

「キス…した」

『キス…』

「ちよつと待つてよ。あれは、鈴木君じゃないよ。それに、今、彼  
家にいるわよ。その母さんも一緒にね。もう、ホントに切るね」

容赦なく杏子は電話を切り、リビングを見る。

圭太の顔を隠していたタオルがはらりと落ち、その顔が現れた。

圭太の鼓動が早まる。

タオルに遮られていた視界が広がる。

目の前に現れたのは、二度と会うはずのない恋しい人。

恋するたびに自分の本能がその恋を引き裂く。

繰り返し、繰り返し。だから、恋するのは圭太にとっては、手痛

いミス。

それでも、してしまう。

「初めまして、杏子の母です」

優しい微笑みは、娘の友人用である。

杏子はいつもの母の声を聞いた。

いつもと何も変わらない日常の母の声。

やっぱり、あれは、私だけの悪い夢。

母は関係ない…

マグカップを手に取り、杏子は台所から居間に戻った。

そこには時間を忘れ呆然と固まる圭太がいた。

「…鈴木君？」

激しい雨音が耳を打つ。

「…ごめん」

震える圭太の声は、窓を叩き付ける雨音に吞まれた。

圭太は立ち上がると顔を背け家を飛び出した。

「どうしたの？」

突然、そう言って娘の友人が飛び出し、母親は心配そうに娘を見たが、娘もそのあとを追いかけ飛び出していった。

激しい雨は一瞬で圭太を中まで浸食する。

眩暈を伴う空腹が圭太を襲う。十年前の叶わぬ想いが激しい雨に蘇る。

「待って。どうして？」

後ろから杏子の叫び声が頭に木霊する。

どうして、どうして…。

圭太の足が止まる。

杏子は、雨で顔にまとわり付いた髪を手で払い、圭太の腕を後ろから掴む。

「どうして？」

黒い澄んだ瞳が圭太を捉える。

圭太は力尽きたように濡れたアスファルトに膝を落とす。雨は激しく二人を撃ち浸ける。

「君だったんだね…」

低い圭太の声が雨に混じる。雨に濡れた圭太の瞳は、不思議な力を持つ。

十年前、杏子は夜の湖に魅了された母を取り戻したくて必死に母を追った。

「あの時の黒い瞳は君のモノだったんだね」

杏子が母を追った先に見たモノは、底の見えない深い瞳。

そこで、溺れたのは母だったのか。

それとも…。



「好きだったんだ。君の母さんが大好きだったんだ」  
両手で顔を覆い、苦痛な告白の響き。  
「どんなに好きでも…。忘れられるんだ」

永遠と続く飢え。

何十何万何千何百何十何日目の喰欲。

求める。彷徨う。喰らう。求める。彷徨う。喰らう。求める。

何十何万何千何百何十何回と繰り返される。

永遠に満ちる事などない。

「オレは忘れられる…」

激しく叩きつける雨に消え入りそうな圭太の声。

木津が突然電話で聞いてきた。

どうやって記憶を消したんだ？

記憶を消す？

有り得る筈のない現実。

杏子は、雨の重さに耐え切れないように座り込み、目の前の圭太の瞳を覗き込んだ。

杏子の濡れた瞳から涙とも雨とも判別しかねる滴が次々と零れ落ちる。

それは溢れ出してしまった想い。止める事の出来ない激しい想い。  
あの時の、10年も前の、悲しい湖。

湖の瞳を持つ、あの人は、あなただったの？

そんなことありえない。

でも、何故か納得してしまう。

だって、こんなにも惹かれてしまった。

ずっとずっと忘れられなかった。

「私は忘れないよ！絶対、忘れない！」

本当に得たい物は永遠の想い。

細い杏子の指が圭太の両肩を掴む。

雨に重みを持った黒い髪がはらりと、俯いた圭太の視界の隙間に滑り込む。

圭太の指が髪に絡み付く。

「あつ」

深い夜の湖、湖の深淵に眠る淋しい瞳。

杏子の髪を絡ませた指は力を帯び、杏子の顔は圭太に吸い付けられる。

圭太の唇から自分の唇に伝わる底知れない不思議な哀しみ。

そして今、その瞳に漂うのは私自身。

十年前、湖に溺れてしまったのは、

私自身…

夢の中の小さな幻の初恋。

雨はさらに激しさを帯び雨音のみが、唯ひたすら鼓膜に鳴り響いていた。

「杏子！」

耳慣れた声が自分を呼んだ。

「木津？何でここにいるの？」

塗れ細った杏子は自分が濡れている事すら気付かないように、突然現れた友人を見ている。

「杏子。どうしたんだ？鈴木圭太に何かされたのか？」

キョトンとした目は、ユイと同じ目だった。

だから、木津にはわかってしまった。

「誰よ。それ」

整った杏子の顔を涙か雨が区別のつかない雫が幾筋も滴り落ちていく。

木津はそれ以上、何も言わない。

「早く、家に帰れ。風邪ひくから…」

それだけ言うと、木津は杏子をその場に置き去りにして走り出した。

まだ、近くにいたはずだ。

雨は急速に夜を呼ぶ。

その激しさはそのままに、ただひたすらに冷たさを増しつつ雨は降り続く。

どれだけ、探したろうか。

公園が目に入った。

昨日、来た公園。

そして、雨の中、ブランコが揺れていた。

小さい割には多すぎる木々で囲まれた公園は、周りの世界を拒絶するよう、

…そこに一人佇む男を孤立させるように存在していた。

激しい雨の中、微かに聞えるブランコの擦れる摩擦音。

どこか、虚ろな男が一人、ブランコに揺られながら泣いている。

涙かどうかは、雨に濡れているから、わからない。

ただ、木津には、泣いて見えた。

切なくなるほど、激しい雨の中であただ一人。

周りを全て拒絶している男が一人。

何も言わずに木津は、その男に近づいた。

地面に落としていた視線がゆっくりと持ち上がり、木津を見上げた。

「やあ…」

微笑む顔は、やはりいつもの鈴木圭太。

ただ、雨に濡れているだけ。

「…杏子に何をしたんだ？」

「何って？」

「杏子にキスしたろ…」

木津を見上げるその顔は、その瞳は、ただ、雨を受け止めるように、全てを受け入れるように深くて…苦しい。

どうしようもなく不安になる。

切ないのは、何故？

「見てたのか？」

見てないけど、木津は頷いた。

「そっか。木津の彼女だもんな。でも、安心しなよ。すっかり、嫌われて…。思い出すのも嫌なほど…」

「誤魔化すな。違うだろう」

「何を…言って…」

「アンタのキスは違うだろう？ そうだろう？ 鈴木真治！」

グワア〜ン

圭太の中で、激しい耳鳴りがした。

赤い空が目の前に広がり、焼夷弾が雨のように降り注ぐ。炎が熱さを持って脳内を駆け巡る。

何故だ。

何故その名が木津の口から出てくるんだ。

何故、オレに向かって…

不自然なほどに圭太は首を横に激しく振り、唸った。

「違う…」

「オレのばあちゃんの名前は、柏木雪子。旧姓は、鈴木雪子なんだ」

雪ちゃん…

彼女の微笑がついさつき見た杏子の母親微笑みと重なり、フワリと浮かんだ。

違うと言ひ張れば、この男は信じるだろうか？

バカじゃないのか？と笑えば、この男も笑うのか？

そんな事、在り得ないだろうと…

木津は、自分の考えがいかにかに現実離れしているかを知っていた。

だけでも、それ以外に、今見下ろしている男を説明するものがないように思えた。

「それから、曾じいさんは、鈴木圭吾郎。…鈴木圭太。その名前は、単なる偶然なのか？」

いや。これは日常の終焉だ。

圭太は目を瞑り、顔にかかる激しい雨を感じた。

木津は話を続けた。

「オレの下の名前、知らないだろ？真治って言うんだ。お前から取ったんだよ。」

ゆつくりと圭太の臉が開いた。

木津はぎくりとした。

その瞳。

引きづり込まれる。

この男の目を見ると、いつも得たいの知れない恐怖を感じた。

今は恐怖は感じない。

ただ瞳から溢れ出してくる感情に引きづり込まれそうだった。

狂気に近い悲しみと切なさど苦しさが渦を巻いて、深い深い闇が広がる湖底に沈み込まれる錯覚。

杏子が幼い頃、溺れた湖にオレも溺れさせようとするのか？

木津は、そうさせまいと目を細めた。

「…だから？」

雨よりも冷たい声が男の口から漏れる。

全てを認めて、それでも訊く。

「だから、何？誰かに迷惑かけたか？」

「違う！オレが訊きたいのは、記憶を消す必要がどこにあるんだって事だ。キスしたら記憶が消えるんだろう？でも、わからないんだ。何故記憶を消すんだ？お前の秘密を知られたからって訳でもなさそうだし、なんで、そんなこと……」

そんな事して、寂しくないのか？

悲しくないのか？

ずっと圭太が立ち上がった。

視線は木津より少し下だ。

上目遣いで木津の目を覗き込む。

「喰うんだよ。想いをさ」

口元に弧を描き、圭太は木津の目に視線を据えたまま、指を木津の頬に滑らした。

「なっ！」

電気が走ったように木津が飛び退いた瞬間、雨にぬかるんだ地面に足が滑り、激しく背を打った。

素早く圭太が木津の上に乗し、その両手を首に回した。少しずつ力を込める。

「うっっ……」

苦しそうな呻き声が木津の口から漏れた。それでも、木津は目を開いて圭太の瞳を睨みつけた。

「……オレが、秘密知って……邪魔……になっ……たのか」

「煩いな」

冷たい声で言われ、冷たい瞳で見下ろされている。

それでも、木津はその目から視線を外さない。

「……どういう……意味………想い、を………食べるって……」

首を絞められたまま、目の前に、圭太の顔が突き出し、その瞳が

漂っている。

木津の頬に雫が滴り落ちる。

湖から溢れ出したように、雨と共に幾つも幾つも落ちてくるのは、熱い雫だ。

「教えてやるよ。その意味を」

そう言って近づく顔。

その意味は。

「やめろ!!!」

渾身の力で圭太を突き飛ばした。

息を切らしながら、飛ばされたまま座り込んでいる男を泣きそうな顔で睨んだ。

「何だよ!」

「お前は、一体、オレの何を知りたい?」

静かに問われれば、木津自身がわからなくなる。

いや、聞きたいことは在りすぎる。

鈴木真治は、何故年を取らない。

何故、記憶を消す。

何故……

「寂しくないのか?」

悲しくないのか?辛くないのか?その心は痛まないのか?

「何十年も年を取らずに、誰にもその存在を知られる事なく一人で生きて……」

「何十年だと?」

雨の中、圭太は笑った。

「千四百年だ。それに、オレには腐るほど、名があった。鈴木真治なんて、その中のひとつに過ぎない」

「千……そんな……」

言葉を失った。小さな公園で雨に濡れる高校生が、酷く遠くに見

えた。

「…想いを食べるって？記憶を消す為なのか」

「違う。腹が減るからだ。飢えてるんだ。ただひたすら餓えているんだ。想いは、餓えを満たしてくれる」

「千年近くも、そうやって生きてきたっていうのか？それじゃあ、誰もお前の事、想ってくれる人間は残らないじゃないか？そんな残酷な事…」

濡れた瞳を木津は見つめ続けた。

だから、湖なんだ。

流れる事のない。果てしなく棲んだ底の見えない湖に、その瞳が重なるんだ。沈殿されていく想いは、決して満たされる事なく、さらに、想いを求める。

「これで、いいか？満足したか？」

立ち上がり圭太は、木津の傍にしゃがみ込む。そして、木津の瞳を覗き込む。

その奥知れない暗い瞳で。

「オレの記憶を無くす意味は、オレの気持ち喰う意味はないだろう？」

しかし、圭太は微笑みながら、その手で木津の首を掴む。

「痛っ」

顔を歪め、それでも圭太の手を払おうとした。しかし、逆に腕を掴まれる。

それでも、立ち上がり、逃げようとした。

しかし、力づくで握りこまれた腕は離れない。

体つきに似合わず、圭太の腕力は並ではない。掴まれた腕がジンジンと痛んだ。

「オレを覚えておく必要はない。大人しくキスさせるよ。それとも、殺されたいか」

子供のように木津は首を振り続けた。

「イヤだ！オレは生きて、お前を覚えておく。お前にとつたら、た



った何十年かもしれない。でも、お前が生きて苦しんで悲しんでいること知っているやつが一人ぐらいいてもいいだろう？じゃないと、お前が可哀想じゃないか」

木津は怒鳴った。

『私は忘れないよ！絶対、忘れない！』

それは、杏子の台詞。

でも、忘れた。自分を忘れた。自分が忘れさせた。

それでいい。

同情は、とても塩辛くて、苦い。

でも、その中に込められた気持ちが本物なら自分を満たしてくれる。

目の前にある気持ちを味わってみたい。

「さよなら…」

喉が渴く…

永遠と続く飢え。何億何万何千何百何十何日目へとさらに続く喰欲。

喰欲に支配された中枢神経には逆らえない。求め、彷徨い、喰らい、そして、また、求めて、彷徨って、喰らって、求め続ける。

何億何万何千何百何十何回と繰り返される愛の囁きと別れの言葉。永遠の終わりを待ち焦がれる。

「杏子。起きろよ」

木津の声。

「珍しいな。授業中に眠るなんて。もう、昼休みだ。弁当食おう  
今朝飲んだ風邪薬で眠ったのだろうか。」

「私、どうして風邪なんか引いたのかな？」

「大丈夫か？」

杏子の視界に窓際の空席が入る。耳に松原と岸の会話が聞こえる。

「圭太も酷いよな。急に転校するなんてさ」

「昨日もそんな事一言も聞いてなかったよ。友達だと思っていたのに」

二人は本当に怒っているようだった。

「携帯も繋がらないし」

ぼんやりと杏子は二人の会話に小首を傾げる。

「あの席に誰かいたかしら？」

「おい。おい。杏子。お前のクラスメートだろ。誰だか知んねえけど、可哀想なヤツ」

梅雨の明けた空は透き通るように天に伸びている。

窓からは眩しい光が降り注ぎ、その眩しさに杏子は目を細める。

青い空に薄い雲が流れ、優しい風が夏の到来を知らせる。

あれから、何年目の夏だろうか。

「どうした？杏子」

杏子を覗き込む見慣れた顔。白いタキシードが今一似合わない。

「シロが…。何でもない。木津には関係ないでしょ」

「傷つくなあ。知ってる？今日、結婚式なんだけど。ちなみに僕と君のね」

杏子はクスツと笑い木津の腕に手を絡ませる。

暖かい日差しがウエディングドレスを華やかに照らす。

「新婚旅行、まだ決めてなかったね。私ね、湖を見たいな…」

『久しぶり。相変わらずだな』

圭太は白い猫を見下ろす。

6年前と変わらない圭太の微笑みが、太陽の逆光で翳る。

「シロは老けたな。6年ぶりか？」

白い猫は緑の林の中僅かに見える教会に目を向けた。

一組のカップルが結婚式を挙げ終わったのだらう。

人々の祝福を受けつつ出てくる。

圭太の瞳が幸せの形を写し出す。

カップルを祝福する数人の顔に見覚えがある。

だが、誰一人自分を覚えている人間はいない。

「不思議な味だったな」

突然、頭上から響いた意味不明の言葉に白い猫が見上げると、既に圭太の姿は消えていた。

生暖かい風だけが白い猫を撫でる。

「どこの湖？」

木津は、優しく杏子に問いかけた。

「どこ、かなあ。わからないわ……」

「……そうだな。湖か」

自分は杏子が見たがる湖を知っている。

何故か知っている。

その湖は確かに日本のどこかにあるはずなのに、どこにあるのかは、知らない。

教会の鐘が鳴る中、風が遠く昔から知る湖の匂いを幸せな二人に運ぶ。

「杏子？」

木津の驚いた顔に今度は杏子が驚いた。

次々と溢れる涙が、無意識に杏子の頬を流れている。

そして、杏子の涙に反応したように木津の瞳からも涙が溢れ出した。

零れる涙は、あまりにも悲しくて美しい湖に魅せられたせい。

あまりにも美しく手が届かなかった。

ただ、湖に惹かれるこの想いだけは永遠に消えることはないだらう。



## 第2話 赤い空

空襲警報が鳴り響いた。

蒼い空を見上げれば、B29が八機並んで西から東に向かう。残るのは、のどかな飛行機雲と遠くに鳴り響く凄まじい爆音。

防空壕に急ぐ人々はどこか慣れた様子で一瞬だけ顔を歪め、爆音が響く方向に自分の親しい人がいたかどうか思索し、自分の家に真っ赤な不幸が落ちてこないように祈る事しか出来ない。

昭和二十年二月末。

去年から始まった米軍の空襲は日に日に増すばかりである。ラジオから軍艦マーチと共に流れるニュースは実情よりはまだまだシにもかかわらず、徐々に人々の不安を募らせるだけである。

「何してるの?! 真治さん!!」

道の真ん中でぼんやりと飛行機雲を眺めていた真治は後ろから、グイッと腕を掴まれ、引つ張られた。

「空襲警報はまだ解除されてないわよ!」

防空頭巾を被り、上はセーラー服、下は薄汚れた鷲色のもんぺを穿いた雪子が、細い体には似つかわしくないほどの力で真治を引っ張る。真治は国防色の上着を着ている。

「痛たたたたつ。わかったよ。行くから」

用水路脇の小さな診療所の裏にある防空壕に二人は向かう。もつと春の陽気を楽しみたそうな真治に、雪子は苛々した。

この時代、雪子の神経の方が真っ当であった。死と隣り合わせに春など楽しめるわけがない。

「あつ」

その真治の声と共に雪子の手が振り払われた。

ザッブーン

雪子が振り返ったときに見たのは水飛沫だった。

突然、真治が用水路に飛び込んだのだ。

用水路は幅こそ五メートル程のものだが、かなり深く、なにより流れが速いのだ。

しかも、工業排水やら生活排水が混ざり合って、不可思議な色合いをしている。

魚などは棲まず、たまに鼠などの動物の死骸が流れているような川だ。

「真治さん!？」

汚濁した川面から現れた真治の顔はキョロキョロと辺りを見回している。

その時、雪子は始めて気付いた。

真治より下流に小さな子供が流されているのだ。

「真治さん。あっちよ!」

真治の顔が飛沫を上げ、川面から消える。

最初は僅かに動きを見せていた子供が徐々に水に引き込まれていく。

空襲警報を気にしながらも雪子は用水路の土手沿いを走る。

真治の右手がようやく子供の肩に触れた。

何とか土手に子供を引き上げたが、子供はぐったりとしている。

上流から雪子が走ってきた土手沿いを母親らしき女が半狂乱で走りよってきた。

真治は自分の頬を子供の口元にソツと近づける。

我を忘れた母親が子供の肩を揺さぶろうとした。

「触るな!」

鋭い一言を女に投げかけた真治はそつと子供の顎を引き、もう一

度呼吸を確認する。

それから、鼻を摘み、人工呼吸を始めた。静かにゆっくりと。五回繰り返したところで、子供の体がビクンと震え、口から水が吹き出てきた。

激しい咳とともに子供の息が戻った。

丁度その時、激しい爆音とともに、東の空が真っ赤に燃え上がった。

遙か遠くに雨のように降り注ぐ爆弾と焼夷弾が、赤い炎とともに幾人の命を奪ったのかは真治には知る由も無かった。

空襲警報が未だに解除されない為、真治と雪子は橋の下でじっと腰を下ろしていた。

「こつちの方に来ないといいね」

不安そうに雪子は真治を見つめた。橋に爆弾を落とされたら、そう考えただけで雪子は身震いした。

何も言わず、真治は雪子から目を逸らし、川の上流を眺めた。

上流から焼けた木材が幾つか流れてきたと思ったら、その中に黒く焼け煤けた死体が一つ二つ混ざっている。

熱さに耐えられずに川に飛び込んだのだろう。

「無意味だったのかな……」

助けた子供を思いながら、真治は肩を落とし、呟いた。

一人助けている間に、何人死んでいくのだろう。

「そんな事ない！」

その言葉の意味を察した雪子は断然と言い切った。

そして、次々に流れてくる死体に目を背けながら、そんな事ないと、小さな声で何度も呟いた。

「そうだね。鈴木先生もいつも言ってるモンね」

穏やかな優しい声で真治は、雪子に微笑みかけた。

雪子の体内に蔓延していた不安や恐怖と入れ替わるように入り込んだ熱い塊が、心臓をドンドンと叩き始め、頬の温度を急激に熱く

する。

「お、お父さんの言う事なんて、その、何て言うか……あまり聞かないほうがいいよ」

「どうして？」

「恐ろしい事言うのよ。戦争を始めて国民を殺してるのは日本政府だつて。もう、私、誰が聞いてるかわかんないのに、そんなこと言ったら、非国民扱いされて特高に捕まっちゃうって怒鳴りつけちゃったわよ。日本人を殺しているのはアメリカ人なのに、お父さん、最近、益々、可らしいのよね」

「鈴木先生は、正しいよ」

相変わらず優しい声で、雪子にとっては全く信じられない事を言う真治に雪子は戸惑いを隠せない。

「やめてよ。真治さんはお父さんに悪い影響を受けちゃったんだわ。私だつて戦争は嫌いよ。でもね、日本が戦争をしなければ、日本人も、全てのアジア人もみんな欧米諸国の奴隷にされちゃうのよ。日本政府は日本国民を守っているのよ」

奴隷にされるくらいなら、死んだ方がマシかどうか、真治にはわからなかった。

ただ、日本国民は日本が勝つか、もしくは日本人が絶えて滅びるまで戦争は続くだろうと信じて疑わなかった。

真治もぼんやりとそうかも知れないと思った。

ただ、自分を除いては。

自分も日本と共に滅び逝く事が出来れば、どんなに楽だろうかと、自分の頭上で爆弾が爆発すれば、さすがに自分も消えるのだろうか、遠くの赤い空を眺めながら考えていた。

「徹兄さんだつて、私達を守っているのよ」

雪子の話には、彼の名前がたびたび出てくる。

兄さんと言っても隣に住んでいた学生である。

一年前からこの町に住むようになった真治には面識はなく、現在は徴兵されガダルカナル島にいるらしい。



安否は全くわかっていない。  
ほぼ絶望的だろうと人々は噂してるが、戦死の報告すらきていない。

空襲警報が解除され、鈴木圭吾郎は近所の国民学校の医務室を出た。

国民学校には近所の人々が避難し、怪我をした数人が医務室で手当てされている。

内科医である鈴木にはさほど、出来る事がないように思われたが、実際、薬品不足から外科医がいても、結果は同じだった。

重症の患者は近くの病院に搬送されるのだ。

オレンジ色の光が無精髭を生やした鈴木目の目に染まる。

既に家を焼き、人を焼いた光は消え、オレンジの光は夕焼けだと確かめると、僅かばかり安堵のため息を吐いた。

帝都医大の内科医だった鈴木が妻と幼い娘を連れ、ただ出世の為に満州の病院に移ったのは六年前である。一年も経たずに、妻が病気を患った為に娘と共に先に日本に帰した。

そして、日本が徐々に戦争へと傾いていく中、軍医として出征して行ったまだ若い後輩達の戦死の報を受け取るたびに、一人満州に残った鈴木の出世欲が薄れていった。

人の命を扱う仕事だと自負していた頃もあった。しかし、実際、命を扱うのは医師ではなく、得体の知れない大きな力が、将棋の駒のように人の生き死にを動かしているのだと悟らずにはいられなかった。

差し詰め、巨大なダムが堰を切ったとき、成す術もなく、ただ流れに身を任せる他に方法がないように時代に人が動かされている。

無意味な職を天職だと思ったもんだ。

そんな時、満州で真治に会ったのだった。

病院からの帰り道、貧しい中国人街を鈴木を乗せた自動車が走り抜けて行く。

運転手の運転は酷いものだった。整備が今だされていない道路をクラクションを鳴らしつつ走っていく。

以前は運転手にスピードを落とすように行ったが、聞き入れてもらえず、結局、雑な運転に鈴木の方が慣らされてしまったのだ。そして、とうとう激突した。

轢いた相手が中国人だと言って、運転手がエンジンを掛けなおし、走り去ろうとするのを鈴木は止めた。

男が倒れ、中国人の若い女が鈴木に向かい、片言の日本語で助けを求めたのだ。

「タスケテ。タスケテ。オネガイ」

しかし、手遅れだった。

脈はなく、瞳孔も開いていた。

頭蓋骨にほんの僅かに陥没が見られる。

出血は少ないが、内出血を起こしてる事に間違いはないだろう。じきに体温が奪われ、死斑が現れ、硬直が始まるのはわかった。た。

実際、体温の低下は始まっている。

運転手は、悪びれる様子もなく、ドアに寄りかかり、タバコを吸い始めた。

相手が中国人だからだ。

しかし、鈴木は申し訳ない気持ちで一杯だった。

息があるなら病院に連れて行けるが、もはや手遅れだ。

女は壊れたレコードのように同じ日本語を繰り返している。

「タスケテ。タスケテ。タスケテ」

まだ少年のようなあどけなさが残る男と、やや年上の女の関係などに興味は無かった。

しかし、女の取り乱しようから、ごく近い身内、弟だろうかと鈴木は勝手に想像した。

女の肩に手をおき、厳しい顔で首を横に振ってやった。

言葉は通じなくてもその意味することはわかるはずである。

お金を少し握らせるべきだろうか、そんな方法しか鈴木には思い当たらない。

しかし、その時、鈴木には信じられない事が起こったのだ。

動かないはずの死体の腕がピクリと反応したのだ。

急いで男の脈を取ると、しっかりと脈が打っている。そして、男は薄く瞼を開き、自分を見下ろしている女を見る。

口元には微笑みさえ湛えて。

女の瞳から溢れる涙を見て、男が口を開いた。

「シャオミン。ツエンマラ？ニイウェイシエンマクウラ？」

中国語だ。

何を言っているのか鈴木にはわからなかったが、確かに死んだと思った男が言葉を話している。

一方、女の顔には安堵の表情が浮かぶ。

男が鈴木に気付き、女に何かを聞いた。

「ターシーシユイ？」

「リーベンレン」

「日本人？」

日本人らしい日本語が男の口から飛び出し、鈴木は初めてこの男が日本人だと知った。

なおも心配そうに男を見遣る女に対し、男は優しい口調で話し掛ける。

「シャオミン。シイジエンブウツアラ。ニイツイハオツオ。ミンテ

エン。ツアンメンイーチイツアイバ」

表情を曇らせた女から男を思いやる言葉が口を吐いた。

「メイウィンティーマ？」

大丈夫？と言う意味だ。

鈴木はそれだけがわかったが、後の言葉はやはりわからなかった。男は上体を起こし、腹をさする。

「ウオドウツイエラ」

笑みを漏らしながら囁いた言葉に女は微小で答え、呆気なく去っていった。

「最後に何て言ったんだい？」

男は笑って答えた。

「お腹が空いたって言いました」

男は真治と名乗った。

病院で検査を受ける事を勧めたが、真治はお金がないからと断った。

「お金は勿論私が負担するよ」

「いえ。大した事はありません」

そう言つて、真治は立ち上がった。

その瞬間、僅かによるめき、鈴木は慌てて手を貸そうとした。

しかし、真治はさりげなく、その手を辞退するように身を引いた。

「大丈夫です」

涼しい顔で微笑む。

「せめて、家に送ろう。家族はいるんだろう？」

その問いにも真治は首を振る。

「幼い頃、両親に連れられ、開拓団の一員として満州にきました。

ですが、流行り病で一家全滅です。同じ開拓民として来た村の人々は親切でしたが、決して裕福では在りません。迷惑を掛けたくなくて村を出ました。それから、食うや食わずで街を彷徨っていると親切な中国人に助けられました」

「君は今年でいくつになるのかね？」

「…十六ですが」

「日本に帰りたいか？」

心の中の真治の答えは否だった。

しかし、そう答えるのは不自然だった。

だから、鈴木 of 期待通りの答えを出した。

「…そうですね。ですが、日本に帰っても僕には身内はいないんですよ。だから、中国で暮らしていこうと思ってます」

しかし、真治の予期せぬ言葉が四十前後の日本人の男の口から出てきた。

「では、一緒に日本に帰らないか？君を私の養子として迎えよう」

そして、鈴木としても自分の言った言葉に驚いていた。

養子云々よりも日本に帰るといふ言葉を鈴木自身初めて使ったのだ。

それは、病院を辞めるといふ決意だった。

ずっと、迷っていたのだ。

「鈴木 of 父は開業医だった。」

その跡を継ぐべく、鈴木は医者になったのだが、結局、鈴木は父の残した診療所を閉め、病院に勤務していた。病院の柵から抜け出し、心のどこかにずっとあった一開業医も悪くないのではという想いが、ここにきてぐっと現実味を帯びてきた。

しかし、真治はまたもや首を横に振る。

「有難いお話ですが、僕にはそこまでしてもらおう理由がありません」「私には娘が一人しかおらん。家内も病弱でもう子供は諦めているのだよ。君が息子になってくれたら…」

会って数分の男を相手に何を言っているのか。

心の中で鈴木は自嘲したが、この思いつきに徐々に興奮していった。

その後、鈴木はこの真治と名乗る相手に何度も会い説得しつつ、ようやく真治を日本に連れ帰ったのだ。

前もって妻には手紙で真治の事を伝えた。

真治と妻が初めて会ったのは、病院のベッドだった。

その後、間もなく妻は亡くなった。

娘の雪子は始めのうちこそ見知らぬ年も変らぬ少年に戸惑ったものの、持ち前の明るさと活発さで真治を受け入れた。

あれから、一年。

勉強させてやるうと真治を中学校に入れたものの、学生生活のほとんどもを学徒動員の為、軍需工場で過ごしている。戦争は新聞やラジオの中から飛び出し、国民生活に深い陰を落として続けている。

深夜、幼い子供を抱えた母親が鈴木診療所のドアを叩いた。

既に熱は四十度を超え、呼吸困難に陥っていた。

「真治！パビナール持ってこい！」

聴診器をはずし、鈴木は怒鳴った。

「ありません！」

酸素吸入の準備をしながら、真治も怒鳴っていた。

薬棚には使えるような薬品は何一つ残ってなかった。

「くそ！」

馴染みの氷屋の叩き起こして、氷を抱えた雪子が帰り、氷嚢を作りはじめた。

製薬会社からは一切薬品は入ってこず、大病院に勤める友人から内緒で薬を分けてもらっていたが、ここ数ヶ月はそれすらも入ってこなかった。仕方なく、診療所は閉め、僅かな往診のみとしていたが、病院にかかるお金のない人々が偶にこうしてやってくる。

出来た氷嚢を子供の頭に添えた。しかし、汗はダラダラと流れ、体は痙攣し、瞳は焦点を失っていく。

「確か、引出しの奥にコカインが少しあっただろ！それ持ってこい」

「それも、先日、使ったじゃないですか」

益々激しい呼吸を繰り返し、ついに子供は吐血した。

「先生。血、血が！け、結核なんですか？」

涙混じりに母親は訊いてくる。

結核に特效薬はない。安静と栄養が唯一の処方である。

「……心拍停止です」

沈痛な面持ちで真治は言った。

「カンフルは…」

「……」

訊かなくても鈴木はわかっていた。

無駄だと知りつつ、心臓マッサージをし始めたが、それは口から血を溢れさせただけだった。

死亡診断書と冷たくなった幼い我が子を抱いた母親を見送った後、鈴木は拳で激しく机を叩いた。

悔しそうなそんな父親の顔を雪子は、この数ヶ月の間、何度となく見てきた。

「雪ちゃん。もう、寝たら？後片付けは、僕がしておくから。明日も動員だろう？」

黙って雪子は頷いた。

こんな日は眠れないが、これ以上父の震える背中を見るのが雪子には辛かった。

雪子が自分の部屋に帰るのを見届けてから、真治は診療室を片付け始めた。

両手で頭を抱え机に伏している鈴木がボソリと呟いくのを真治はきいた。

「問題は薬じゃない…」

真治は黙って仕事を続けた。

「いや。勿論薬は必要だ。だけど、薬より米だ。さっきの子ももっとマトモに食べれていたら違った結果になっていただろう」

食料から衣類に渡るまで全てが配給制度になり、その量は日に日に少なくなっていく。

米が貰える日は徐々に減り、大豆の粉や玉蜀黍粉入りのパンが一家に僅かに入ってくるようになっていく。

しかし、大体はそれでは足りず、家のものを農家に売って食べ物と交換したり、闇市で手に入れて何とか飢えを凌いでいるのが実情

だった。

しかし、売るものがないような貧しい家では、空襲による怪我以前に極端な栄養失調による病気への抵抗力の低下が直接死亡の原因になっているのだ。

「でも、先生。結核には安静が一番です」

「そんなこと、わかっておる……」

頭を上げずに鈴木は力なく呟いた。

「では、何故安静にされないんですか？」

ピクリと鈴木の中が揺れた。

「先生は以前、自分は運がいいから、絶対赤紙は来ないと笑っておられましたよね。でも、それは、違いますよね」

「何が言いたい？」

「ここに来て、そろそろ一年になります。見ていれば、わかりますよ。先生が結核だと言う事ぐらい。雪ちゃんは気付いていないようにだけ」

ようやく鈴木は顔を上げ、真治の目を見た。

「わかってます。先生はここで人の命を少しでもいいから助けたいのでしょうか？僕はそれには何も言いません。僕はそんな先生を……父を尊敬していますから」

「じゃあ、何故、府立一中を受けなかった？お前なら、受かっていただろう」

名門の学校である。今度は真治が黙った。

「それとも、お前はそんな所に行かなくても医学部に受かる自信があるのか？」

勉強は好きだった。医者にもなりたいたと思った。しかし、

「戦争が終わったら、大学を受けて、……医者になります」

「ばかばかしい。戦争が終わったらだと？その頃には、患者はいない。死体だけだ」

「だったら、大学に行く事すら、無駄じゃないですか」

鈴木は自分の矛盾に嘲った。



真治の言う通りだ。

日本が戦争に勝つなど鈴木はもはや信じていない。

なのに、真治に大学で医学を勉強しろと言っているのだ。

一体何のために勉強するのだ。

未来など、希望など、この日本に残されていないのに。

「先生。僕の話は止めましょう。それよりも、雪ちゃんの事です。結核が感染する事は先生もわかっていていでしょう？ですから、雪ちゃんを疎開させたら、どうですか？確か先生の奥さんの遠縁に当たる人が信州にいるとお伺いしましたが」

「ああ、オレもそれを考えたが、アイツがどういっかな？で、真治はどうするんだ？」

「僕の事は気にしないで下さい。それに、中学の学徒動員は義務ですから」

鈴木は深い溜息を吐いた。

強引に真治を日本に連れてきたのは正しかったのだろうか。

戦局が厳しいものになるに連れ、鈴木はこの少年の未来を簡単に買ってしまったことに申し訳なさでいっばいになる。

そして、帰国して間もなく発病した肺結核がさらに鈴木を悩ました。

自分が死ぬ前にせめて真治を大学に入れ、卒業させたかった。

「いやよ。絶対いや」

当たり前のように雪子は、自分一人が疎開することを反対した。

鈴木は深く溜息を吐いた。

徐々に激しさを増す空襲に多くの人々が家を失い、疎開準備に焼け残った家具を道端で売っている。

汽車の切符を手に入れることも、今ではかなり難しくなっている。それでも、駅で長時間並べば手に入る事もある。

配給はますます貧相になり、空襲警報が鳴り皆が防空壕に入っている隙に、泥棒を働くものも少なくない。

東京はますます危険になっている。

一刻も早く娘を疎開させたい。

しかし、娘は父親似の頑固者だった。

「お父さんと真治さんが一緒ならいいわ」

「それは、ダメだ」

「なんでよ。真治さんの軍需工場も焼けちゃったし、三月で中学校も終わりでしょう。行くなら、家族皆で行きましょうよ」

「ダメだ」

そう言っている間に、サイレンが鳴り出す。

乱暴に玄関の引き戸を閉め、鈴木は国民学校へと向かった。

雪子は防空頭巾を被り外に出た。

家の裏に掘った緊急の防空壕は、役に立たないと聞かされ、町内会で造った消防署の裏のコンクリで固められた防空壕へと避難した。

その頃、真治は焼けた軍需工場にいた。

焼け残った工作機械をトラックに積み込む作業をしている最中に空襲警報がなったのだ。

工場裏の防空壕に学生達が雪崩れ込むように入っていく。

真治はその中には紛れず、一人外に出た。

紅蓮の炎が街の空で踊り狂い、全てのものを飲み込んでいく。

火の粉が熱風と共に運ばれ真治の頬を掠めていく。

赤と黒の織り成す舞台に、絶え間なく鳴り響く爆音、低空飛行するたびに空気を劈くB29の轟音、そして、泣き叫ぶ子供と大人。

悲鳴は抜群の効果音となってこの地獄絵図を完璧に描いていく。

逃げ惑う人々と逆らうようにゆったりと歩き、家に着いた。

家は残っていた。

爆音と共に振動する畳の上に寝転がった。

自分は何故日本に戻ってきたのだろうか。  
何故鈴木に付いて来たのだろうか。  
真治はぼんやりと考えた。

自分は日本に縛り付けられる自縛霊なのかもしれない。  
逃げ出そうとしても必ず引き戻されるのかもしれない。  
繰り返される呪いは決して真治を楽にせず、ひたすら苦しめる為  
に、そこにある。

全てが焼け、灰になっても、それは在りつづけるのだろうか。  
死にたいと言う思いと死にたくないという思いが交錯するように  
心に渦巻く限りは、人間でいられるような気がする。

時間と共に徐々に部屋は暗くなる。  
灯火管制のため、光のない世界に入っていく。  
障子に揺れる淡い赤い光は、遠くはない燃える炎。  
いつの間にかサイレンが鳴り止んでいる。  
玄関の引き戸が引く音がした。

「真治さん？帰ってるの？」

頬を煤で染めた雪子の顔が真治を見下ろした。  
口をぎゅっと結んでいるのが、暗闇に慣れた真治の目にわかる。

「どうして、防空壕に避難していないの？」  
立ち上がって真治は雪子に微笑みかける。

「いつも笑ってないで、何とか答えてよ！」  
その瞳から涙が溢れでた。

毎日絶え間なく届く死の知らせ。  
明日は、もしかしたら、自分の大切な人の死の知らせかもしれない。  
い。

次々と溢れ出る涙が雪子の頬の隅を洗い流していく。  
そして、ぶつかるように身を真治に投げた。

「一人で疎開しろなんて言わないで。ずっと、私たち一緒だから。  
私とお父さんと真治さん。ずっとずっと一緒だから。ずっと一緒に

生きていくんだから」

雪子の肩を抱くべきか思案するように真治の両手が宙を彷徨う。  
「ずっとずっと死ぬまで一緒なんだから」

彷徨った両手が雪子の肩を掴んで、真治から雪子を切り離れた。  
涙に濡れた雪子の顔を見られず、顔を背ける。

顔を背けた真治に、雪子はたまらず、叫んでいた。

「どうして？真治さんは私の事、嫌いななの？」

雪子は唐突に溢れ出た感情を抑えることができなかった。

「私は、ずっと好きだったわ！」

「…雪ちゃん」

暗闇の中、雪子の濡れた瞳がキラキラと輝いて見えた。真治は唾を飲み込んだ。

喉が渴く。

永遠と続く飢え。何十何万何千何百何十何日目の喰欲。

普通の人間とは決して共通しない飢えが真治の体内で渦巻く。

誘惑に勝てない。

真治はゆつくりと自分の唇を雪子のソレへと運ぼうとしたとき、  
玄関の戸を引く音が激しく鳴った。

「雪ちゃん！大変よ。お父さんが倒れたわ」

ピタリと二人は止まった。

玄関に急ぐと衛生兵と近所の人にリヤカーで担がれてきた鈴木が  
そこに横たわっていた。

国民学校で怪我をした人々の処置をしているときに倒れたのだ。

幸い別の軍医がいたために命を取り留めたものの、相当量の血を  
吐いたと衛生兵が二人に告げた。

絶対安静を言い渡し、それらの人々は去っていった。

すぐに寝床を用意して、鈴木を横にした。

頭が真っ白になった雪子はただ立ち尽くし、真治がてきぱきと準備するのを見ているしかなかった。

一段落し、真治が鈴木の本もとに座ったとき、雪子もその横に腰を下ろした。

「まさか、結核じゃないよね」

祈るように真治に聞いた。

今まで多くの結核患者が内科医の鈴木を尋ねてきた。その多くが貧しい患者で手遅れの者が多かったが。

診療所でそれらの患者を見て、それなりの知識を持っていると思いついて入っていた雪子だったが、何故か自分の父親が結核だとは夢にも思わなかったのだ。

入院を勧めても鈴木はそれを受け入れなかった。

大病院の多くは焼け、残った病院はベッド数が足らず、廊下に患者がはみ出ている有様だ。

それがわかつていただけに、真治も鈴木の入院を諦めた。

絶対安静のため、疎開も出来ない鈴木は、家の畳の上で寝たきりとなった。

空襲警報のたびに家の狭い庭に作った防空壕に避難させるのが、真治に出来る全てだった。

雪子は何も出来ずにただ唇を噛み締め、父の看病をしていた。配給の食糧と元患者の家族が代わる代わるに自分達の少ない食料の中から豆や玉蜀黍などを分けてくれ、それで飢えを凌いだ。

珍しく空襲のない晴れた日に一人の客が鈴木家に訪れた。

「ごめんください」

その声に真治が玄関に行くと、軍服姿の若者がそこに立っていた。

真治には見覚えのない人だ。

「どちら様ですか？」

そう訊いたのは、その若者の方だった。

「この家のものですが…」

「え？ここは鈴木圭吾朗さんの家ですよね」

「そうですが、あなたは？」

若者は日に焼けた顔から白い歯を見せて、失礼と謝って名を名乗った。

「柏木徹です。隣に住む…」

真治はピンと来た。

よく雪子が話していた徹兄さんだ。

「徹兄さん！」

その声を聞いたのか、雪子が短い廊下を走ってきた。

真治の横で止まり、暫くまじまじと徹兄さんを見ていたと思ったら、ボロボロと泣き出した。

「生きていたのね。生きていたのね。よかった。よかった。よかった。よかった…」

そのまま、床に座り込み、泣き出してしまったのだ。

徹はそんな雪子を驚いたように見ている。

「雪ちゃん？本当にあの小さかった雪ちゃんなの？」

日に焼けた顔が困惑したように雪子を見下ろしていた。

「とりあえず、上がってください」

真治は徹を促して、卓袱台が置かれた狭い居間に通した。

柏木徹は、太平洋の島に派遣されて間もなく、右足を負傷したのだ。

歩く事さえ出来なかった徹だが、運良く、日本行きの船に乗ることが出来、佐世保に辿り着いたのが半年前。しかし、そこで赤痢に掛かり、そのまま九州の病院に入院したのだ。生死を彷徨ったが、もともと健康だったのと、入院した病院に薬品が残っていた為、無事に回復できたのだ。

柏木一家が山形の実家に疎開していることを知らずに、何度も家に電報を送ったが、返事がなく心配していたらしい。柏木の両親は

何の連絡もなく、南方の戦況を知り、息子はお国に捧げたものと諦め、疎開していったのだ。

「よかった。とりあえず、家族の無事がわかったただけでも、わざわざ東京に来た甲斐があったよ」

一人で歩けるようになったとはいえ、日本全国空襲されている中、九州から東京までくるのは時間と労力がかなり要った事だろうと真治は思った。

「でも、東京は聞いていたより、酷いね。箱根の方から、ずっと歩いてきたんだけど、どこも焼け野原だよ。それにしても、まさか、鈴木先生がご病気とは……」

三人の間に暗い空気が流れた。

「徹さんは、では、山形の方に行かれるのですか？」

「ええ。まあ。この足じゃあ、兵隊に戻れないからね」

ちらりと徹は雪子に眩しそくに目を向ける。

雪子の顔にはもう涙の跡は無かった。

真治は久しぶりに雪子の笑顔を見た気がした。

「徹兄さんが生きてて本当によかったわ。最近、人が死んだ話題ばかり。近所の人も友達も沢山死んじゃったの。もう誰も死んで欲しくないのに……生きてて本当によかった」

父親の遠くない死を予感しながら、それでも身近な人の命を雪子は有難く思った。しかし、徹は恥ずかしそうに小声で言った。

「あんまり、よかったって言わないで……お国の為に何の役にも立たずにのこのこ戻ってきたんだから、今でも沢山の同朋が日本の為に命を捧げているっていうのに……」

「いいの。よかったはよかったんだから」

雪子が笑顔を見せると、徹もつられたように微笑んだ。

「雪ちゃん、中身は昔のままだね」

「どつという意味よ」

ちよつと怒る振りをした雪子もまた可愛く見えた。

「徹兄さんも、顔が真っ黒になったけど、中身は全然変わらないわ」  
二人が共有し、一緒に育ってきた年月に真治は勝てないと思った。  
二人が目を合わせ、微笑んでいる姿に真治の心臓がギリギリと痛む。  
「あつ。そつだ。徹兄さん。食べるもの無いでしょ。昨日、前田さん  
んがくれた芋があるから、ちよつと待つてて」

言い切る前に雪子が立ち上がり、台所に走つていった。

「相変わらず、せつかちだな」

そう言つて笑つた徹が、不意に真治に躊躇いがちに尋ねた。

「その、君は養子つて言つていたけど、その、雪ちゃんの、婿養子  
になるのかな…？」

「え？」

「あつ。その。なんて言うか。僕は雪ちゃんに会うのは四年ぶりな  
んだよ。びっくりした。あんなに綺麗になるなんて…」

雪子が消えた台所の方を目を細めて眺めながら徹は溜息混じりに  
言つた。

真治には徹の気持ちが見た時点でわかつていた。

だから、遠まわしな言い方はしなかつた。

「安心してください。違いますよ。僕にはそんな資格ありませんか  
ら」

「え？資格？」

訊き返したところで、芋を抱えた雪子が帰つてきたために会話は  
途切れた。

三月十日。

紅蓮の炎が街の夜空で踊り狂い、全てのものを飲み込んでいく。

火の粉が熱風と共に運ばれ真治の頬を掠めていく。

赤と黒の織り成す舞台に、絶え間なく鳴り響く爆音、低空飛行す



るたびに空気を劈くB29の轟音、そして、泣き叫ぶ子供と大人。悲鳴は抜群の効果音となってこの地獄絵図を完璧に描いていく。雪のようにパラパラと焼夷弾を落としながらB29が東京の赤い空を舞っている。

頼りないサーチライトの光の線がその行方を追い尽くせずに赤い闇の中で交差していた。

「真治は先に逃げる！」

背に負ぶって逃げようと真治は説得するが、素直に従ってこない鈴木を無理やり担ごうとした。

火は隣まで焼け尽くしている。

「本当に頑固者の親子だ！」

父親と一緒に行くと言い張った雪子を、徹に無理やり引っ張って行ってもらったのだ。

後は鈴木を避難させる事が真治の仕事だ。

「オレはどうせすぐに死ぬんだ！だから、オレを負ぶって真治の足手まといになりたくない。お前を死なせるわけには行かない」

熱い煙が家の中に流れ込んできた。

「お願いです。僕と一緒に来てください。死なないで下さい。少しでも生きてください」

少しでも一緒にいたかった。それは真治の心からの願いだった。

「僕には今まで一度も父と呼べる人がいなかった。だから、本当は、僕は、あの時、嬉しかったんだ」

そうだ。

僕は嬉しかった。

だから、日本に来たんだ。

養子になってくれといったこの養父を死なせたくはない。

「一緒に生きていたいんだ」

無理だとはわかっていても。

この家族ごっこを続けていたかった。

「お父さん。お父さん。お父さん」

普段は先生としか呼ばない真治は、その言葉を繰り返した。皺が増え、病気で落ち窪んだ鈴木の目から涙が溢れた。この少年を日本に連れてきたのは間違いではなかった。この少年を息子にしたのは間違いではなかった。

「わかった。一緒に逃げよう……」

しかし、鈴木をおんぶして逃げようと襖を開けた瞬間、黒煙が二人を襲い、畳に倒れこんだ。

そして、真治の目に赤い柱が倒れこんできた。

隣に倒れた鈴木を庇おうと、真治はその体の上に覆い被さった。真治の背に衝撃が走り、悲鳴を上げた。

雪子は徹と共に墓石が並ぶ寺の裏に来ていた。

避難してきた人が身を寄せ合うように爆音を聞き、赤い炎を見ている。

すすり泣く声があちこちから聞える。

「私。やっぱり、心配だね。家を見てくる」

「だめだよ。行ったら。大丈夫だ。鈴木先生には真治君が付いているよ」

立ち上がった雪子を止めようと手を伸ばしたが、その手を乱暴に振り払らわれた。

「行くわ！」

炎に向かい走る雪子を徹は追った。

しかし、足が思うように動かず、雪子は益々遠のく。逃げ惑う人々。

泣き叫ぶ子供の声。

「お母あちゃ〜ん」

軍靴を鳴らし走り去る兵士達。

「お母あちゃん〜ん」

川に群がる焼けた死体。

女の死体。男の死体。老人の死体。子供の死体。子を抱く母親の死体。

死体。

風が赤く染まり、街を焼き尽くす。

変わり果てた町並みに雪子は道に迷った。

道を聞いても人々はそれ所ではない。

唸りを上げ戦闘機が雪子の頭上を飛び去る。

炎のついた破片が激しい風に揺すぶられ、雪子の足元に落ちる。

徹は、ようやく足を引きずりながら雪子の家にたどり着いた。

「お父さん！真治さん！」

そして、燃え盛る家の目の前で必死で叫んでいる雪子を見つけた。

「雪ちゃん！だめよ！」

結核で子供を失った若い母親が必死で雪子を引き留めていた。

「二人がまだ中にいるの！！！」

雪子の目から流れる涙が煤に染まった顔に白い跡を残していく。

二人の後ろに建っていた木製の電柱が火柱を上げ、まさしく二人に向かい倒れていく。

「雪ちゃん！危ない！！！」

その声に雪子は後ろを向いた。雪子の顔が赤い炎に照らし出された。

ボン！！！！！！！！！！

一瞬、遠いどこかで雪子の声が聞こえたような気がした。

空襲警報。爆音。人が行きかう怒号。泣き叫ぶ声。子を、親を、

家族を呼ぶ声がごちゃまぜに聞こえてくる。

「真治……」

遠い悲鳴の聞こえる中、掠れた声で鈴木は呼んだ。

背を焼かれながらも、真治は鈴木を引っ張り、家の狭い庭まで来たのだが、そこで力尽きたのだ。

地面の上で背についた炎を何とか消したが、今は動けなかった。同じく立ち上がることの出来ない鈴木は真治の横で仰向けになった。

「すみません。先生。もう少しだけ時間を下さい。必ず助けます。

もう少しだけ……」

「もういいよ。十分だ……」

「もう少しだけ。待ってください。そしたら、立ってます。先生は喋らないで下さい。体力を消耗しますから」

「……」

薄っすらと明るい夜空を見上げ、鈴木はこの少年との出会いを思い出していた。

鈴木は少年の瞳に惹かれたのだと、その時初めて悟った。

最初から少年の瞳には不可思議な深い悲しみが宿っていた。病院で多くの死を看取っていくうちに忘れ去った悲しみだ。医者になった頃は、患者が死ぬたびに深い悲しみを抱いた。

しかし、徐々に悲しみは深い虚無感として鈴木に沈殿していった。だが、この少年は、人の死の悲しみを悲しみとして奥深くに沈殿させている。

それは、鈴木の気のせいかもしれない。

ただ、なんとなくそんな気がしたただけかもしれない。

「真治。お前は何者なんだ？」

ずっと疑問に思っていたことをようやく口にしてしまった。

「……喋らないで下さい」

「俺はお前を養子にする時に教えてくれた出身地と名前で戸籍を調べたんだよ」

「…何かありましたか？」

「わかつておるくせに…。どこにもお前の戸籍はなかったよ。お前は何者なんだ？お前の目は十六歳の目じゃない」

顔を歪めて真治は上体を起こす。

服が焼け剥き出しになった背中が鈴木目の目に止まった。

「お前に最初に会ったとき。お前は死んでおった。その時は、仮死状態にでもなっていたのかと思っただよ。でも、違うな…」

掠れた鈴木言葉が真治の鼓膜から入り、爆音よりも重い言葉が、爆弾よりも衝撃を持って心を揺さぶる。

足を投げ出し、両手をついて真治は空を睨みつけた。

徐々に治っていく真治の背を鈴木は遠い出来事のように見ていた。

「…先生。命ってなんですか？」

見上げた空には、もう戦闘機の姿は無かった。

家を燃やしつづけた炎は徐々に収まっていく。

鈴木は同じ空を見上げ、静かに言った。

「…わからないよ。きっと誰にもわからないさ。…でも、人類が滅亡するときには分かるかもしれない」

空を見上げていた真治はようやく鈴木を見下ろし微笑んで言った。

「その瞬間には、僕も死ぬ事が出来るのしょうか？」

ただ深く悲しい真治の瞳に、鈴木はただ固く目を瞑った。

今日、幾つの命が消えたのだろうか。

そして、幾つの命が生まれ、また、消えるのだろうか。

朝の太陽が何事も無かったように東の空を光で満たし始めた。

鈴木の瞼は、その後開く事はなかった。

焼け跡に真治は一人立った。

黒く焼け残った柱が地面から無秩序に斜めに突き出している。

地面に蓄積した灰を踏むと未だに熱さを残していた。

「真治君！」

徹の声に真治は振り返った。

「…無事だったんだね。先生は？」

足元に視線を落とし、首を横に振る。

そして、庭だった片隅で眠った鈴木を徹は痛ましげに見遣った。

雪子がいないうちに真治は気付いた。

「あの。雪ちゃんは？」

「それが、…申し訳ない」

真治が鋭い目で徹を睨んだ。

「怪我したんだ…。今は学校の医務室にいる。大した事ないんだけど…」

「どうして、貴方がついていながら…」

そこまで、言つて真治は言葉を止めた。

病気とは言え鈴木を死なせてしまった自分に何も言う資格がないように思えたからだ。

「すまない」

徹はもう一度謝つて、言葉を続けた。

「怪我は大した事ないんだ。ただ…」

「ただ…何ですか？」

「怪我をしたのが、顔なんだ。医者から額から左眼にかけて火傷の跡が残ると言われたよ。薬もないし…。傷よりも雪子ちゃんの心の傷の方が僕には心配だよ。女の子だからね。僕が持っていた睡眠薬で今は眠っているけど、起きて自分の顔を見たら、ショックだと思つよ」

「顔に…」

雪子は美人と言う部類には入らないが、目が大きく、ふっくらした頬に表れる笑窪が可愛い少女だった。

そして、真治はそんな彼女に追い討ちを掛けるように父親の死を伝えなければならぬ。

「徹さん。…それでも、顔に消えない傷を負っても雪ちゃんのこと好きですか？結婚したいと思えますか？」

突然の質問だったが、徹に迷いは無かった。

「勿論だよ。彼女が望むならね。僕が山形に帰らず、ここにいるのは、やはり彼女が心配だからだよ」

「彼女を幸せにしてくれますか？できれば、山形に連れて行ってあげてください」

「彼女が承諾してくれれば、すぐにでもそうするつもりだ。真治君も一緒に来ないか？どの道、君も一緒じゃないと、雪ちゃんは動いてくれないんじゃないかな？」

「彼女を幸せにしてください。…僕はこれから雪ちゃんに会って、父親の死と、別れを告げてきます」

「別れて…？どういう意味？」

真治は徹に微笑みかけた。

男の徹がはつとするくらい綺麗な笑みだった。

「徹さん。暫く先生を見てくれますか？すぐに戻ります。雪ちゃんに見せてあげてから茶毘に付します」

国民学校は、益々人で溢れ返っていた。

家を焼け出された人が教室で丸くなり。

怪我をした人は衛生兵に手当てを受けている。

学校に入った途端、悪臭が立ち込めた。

死臭とも言うべき臭いだ。

大怪我をおい、ここまで来たが、治療も受けずに亡くなった人や、治療しても助からなくなった人が廊下のあちこちに倒れている。

それでも少しづつ衛生兵がそれらの死体を校舎から運び出して、校庭で焼いている姿が見える。

そんな彼らの間を通り抜け、医務室に向かう途中で真治は雪子を

見つけた。人気を避け、裏庭の片隅で蹲っていたのだ。

「雪ちゃん……」

真治の声に雪子は肩を震わし、両手で顔を隠して叫んだ。

「来ないで!!」

その声を無視して真治は進んでいく。

「イヤ!お願い。見ないで。こんな見苦しい顔を見ないで。お願いだから」

真治は構わずに雪子の両手首を掴み、顔を開かせた。顔の左半分に包帯が巻かれているが、斑に赤く焼け爛れた肌がはみだしている。

「先生が死んだよ」

右目が大きく見開いた。

「ごめん。助けてあげられなかった……」

「仕方ないわ。みんな死ぬのよ……」

そう言いながら、右目からポロポロと涙が流れる。

「もう、死にたい……」

「雪ちゃん……」

「もう、生きていく意味なんかない」

命の意味は?

「死んじやいたいよ……」

死の意味は?

細い腕を握り締めれば、熱い感情が溢れていく。

意味などない。

ただ在るのは、感情だけ。

ただ在るのは、想いだけ。

「雪ちゃん。好きだよ。僕と一緒にずっと生きていこう。だめかな?」

雪子の右目が益々大きく見開かれて、翳る。

「嘘よ。同情してくれるのね。私がこんなだから。誰も醜い私の事なんて好きになりはしないわ」



真治は掴んでいた腕を放し、雪子の左側を隠していた包帯を不意に取り外した。雪子は驚き叫んだ。

「イヤ！」

一生懸命、左の生々しい爛れた傷を隠そうとする雪子の両手を力ずくで剥がし、両手首を握り締めたまま、雪子の顔を覗き込んだ。

左の額から頬に掛けて焼けていた。頭部は広範囲にわたって治療の為に短く髪が切り刻まれている。左眼はかろうじて開いているが、醜く変形していた。

「止めて。見ないで」

左の目からも涙が溢れ出している。

真治は痛いくらいに雪子の両手を握り締め、雪子の両手首が赤くなっている事に気付かなかった。

守りたい。

ずっと、彼女を守っていききたい。

ずっと、一緒に生きていきたい。

真治は雪子を抱きしめていた。

「真治さん……」

力任せに抱きしめられた雪子は、絶望からフワリと不思議に心が軽く舞い上がった。

「真治さん……。愛してるわ」

「僕も……」

「嬉しい……」

雪子もギョウツと力をこめて真治を抱きしめた。

一年前に出会い、知らない内に惹かれあっていた。

真治は抱きしめていた力を抜いて、雪子を見下ろした。

雪子は真治を見上げた。

そして、二人の唇が重なり合う。

唇から流れてくる想いを喰らい続けて、生き続けて、何の意味が

あるのか。

命の意味なんてない。

消えていく命の意味なんてない。

自分がそこにある意味など何一つない。

でも、生きたい。

逝きたくない。

愛したい。

愛されたい。

忘れられたくない。

ずっとずっと抱きしめられてキスされていたい。

ずっとずっと一緒に生きていきたい。

ずっと……

暖かい想いが唇から喉を暖め胃に入り血管を流れ、体中を暖める。  
飢えを満たされた充実感。

そして、

愛する人の戸惑い。

もう、わかっていているから、体内が悲鳴を上げて外へと向かう事はない。

「誰？」

雪子は目の前にいる少年を見上げ、首を傾げる。

優しい瞳の少年だと思った。

「どうして、ここに？…痛っ！」

突然、思い出したように顔が痛んだ。

「大丈夫？君は顔を怪我したんだ。だけど、大丈夫。すぐに治るよ」

「お父さんは？お父さんはどこにいるの？」

「…死んだよ」

そうだった。父は死んだのだ。

知っている。

知っているのに、頭が混乱した。

目の前に表れた見知らぬ少年。

思い出せる断片は、炎から逃げている自分。

誰と逃げてた？

男の人だった。そう。あれは、徹兄さん。

父さんが心配で家に戻った。

でも、家は燃えていた。

後ろから燃えた電柱が倒れてきた。

下敷きにはならなかったが、大きな火の塊が自分に目掛けてぶつかったのだ。

自分は、何故父を置いて逃げたの？

父は結核だった。

覚えている。

自分は父と二人でずっと暮らしていた。

自分は一人で父を看病していた。

では、何故、今一緒に病気なはずの父といないのだ。

何故、父を置いて逃げたのだ？

混乱して、頭が割れるように痛んだ。

「大丈夫だよ」

頭上から降り注ぐ優しい声。

自分と年の変わらない見知らぬ少年。

「大丈夫だよ」

繰り返された呪文。

大丈夫……・なんだ。

不意に心が軽くなり、目の前の少年の瞳に目を奪われた。

綺麗な瞳。

そう思った途端、少年は心を見透かすように視線を逸らす。

そして、言った。

「君のお父さんが待っている」

そつだ。お父さんにお別れをしなければ。

「恋人も待つっている」

「恋人？」

「そつ。君の恋人だよ。徹さんだよ」

「徹兄さんが？」

混乱しそつになる頭は、この少年の

「大丈夫」

という笑顔に騙される。

徹さんは私の恋人。

そつかも、だから、一緒に逃げていたんだ。

でも、

「あなたは誰なの？」

優しい声と優しい瞳を持ったあなたは誰？

「僕？君の父さんに世話になつた者だよ。さあ、君の家の前で恋人

が待つっているよ。生きて。生きるんだ」

「あなたはどつするの？」

「僕とは、ここでお別れだよ」

さよなら、と微笑を残し、風のように少年は雪子の前から消えた。

焼けた街に風が吹いて灰が舞い上がった。

雪子はその少年をもつ一度見る事はなかつた。

そして、五月二十五日の午後十時過ぎ空襲警報が鳴り響いた。

壊れていく。

死んでいく。

深い意味などないまま、命は消えていく。

流された血も涙も熱い炎に焼かれ、命の意味すらわからないまま

消えていく。

熱い。

痛い。

苦しい。

生きたい。

生きたい。

生きたい。

生きたい。

生きたい。

生きたい。

生きたい。

生きて！

多くの祈りの中で真治は赤い炎の舞う街に立ち尽くす。

この身を焼き尽くして欲しい。

体が粉々になれば、この想いも粉々に砕け散るのか？

真治は空に向かい両手を広げた。

見上げる夜空は、赤かった。

### 第3話 湖底に棲む鬼

夕は、鬼を見た。

風が鳴き、木々が叫び、森が狂う。

嵐の夜だった。

ヒタツ

鬼が夕に近づく。

夕の実に二倍はあろう背丈、その全身は生々しい赤に染め上げられている。

鬼の全身を濡らす赤が、赤い湖に滴り落ちる。

そして、その赤い湖面を鬼は滑るように足を進めた。

鬼は、赤く染まった斧を握りしめ、長い髪を振り乱し、禍々しい赤い眼で夕を見据える。

夕は、ぎゅっと目を瞑った。

そして……

風が鳴き、木々が叫び、森が狂う。

そんな嵐の夜だった。

『夕、決して森に近付いてはいけないよ。森の中の湖には、鬼が棲む』

それは、遠い昔のお父ちゃん言葉だったような気がする。

「それで、夕ちゃんは鬼から逃げる事が出来たの？」

「森に逃げたわ」

「森？でも、森には湖があつたんだろう？鬼から逃げるのに鬼の棲む湖に逃げたの？」

夕は清吉郎の言葉に真剣に記憶を呼び起こそうと眉間に皺を刻んだが、すぐに諦めた。

「やっぱり夢だったのかなあ。三つぐらいの頃だったし。お父ちゃんはその知らないって笑うし」

しかし、刻み込まれた恐怖は、現のように夕に脳裏に刻み込まれている。

森に逃げた。

そんな記憶があるような気がする。

でも、思い出せない。

それは、きつと夢なのだろう。

夕は顔を上げ、木々に囲まれた鏡のごとく棲んだ湖に目を馳せた。こんなにも美しい湖と恐怖の感覚はどこまでいつても結びつくことはない。

もっとも、ここは夕の生まれ故郷ではないが。

穏やかに波打つ湖面は、日を反射しキラキラと輝いている。

「…夕ちゃん」

遠い景色に見とれていた夕は、清吉郎に名を呼ばれ現実に引き戻された。

「こ、これ、夕ちゃんに…」

顔を真っ赤にして、懐から出したのは朱色の櫛だった。

今日はわざわざこれを夕に贈るために呼び出したのだろうか。

夕はそれを知ってか知らずか、話をはぐらかしまくっていたのだ。

夕は、暫く朱色の櫛をジッと見ていた。

正確に言えば、櫛を持つ清吉郎の手を見ていた。

ごつごつとした黒く汚れた指は、鍛冶屋のモノだった。

清吉郎は鍛冶屋町に住む鍛冶屋の息子で、今は修行中の身である。貧しい市女の夕にとって清吉郎に想われることは、何よりも素晴

らしいことなのかも知れなかった。

清吉郎の嫁になれば、少なくとも今よりは裕福な暮らしが出来るだろう。

何より清吉郎は、誠実だった。

「絶対、お夕ちゃんに不自由な思いはさせない。職人としてもようやく一人前と認められたんだ。だ、だから・・・」

いつまでも櫛を受け取らない夕に清吉郎は必死になって訴えた。夕も清吉郎の言うことが嘘だと思っているわけではない。

鍛冶屋は、特に刀鍛冶は、今の戦の世の中にとっては需要の高い稼業である。

清吉郎は戦の終わった死体から追い剥ぎのように奪い取られた刀や槍を買い取り、それを打ち直し、また売る、それを仕事にしていたのだ。

戦は、夕が生まれる前から当たり前のようになり続け、それは台風や地震と同じように生活の一部だった。

「親父さんの事？」

清吉郎から零れた言葉に、櫛に触れかけた夕の指がピタリと止まった。

「お夕ちゃんが唯一の肉親である親父さんの事、気に掛けるのは分かるよ。いろいろ心配だとは思うけど。その、町でも結構噂されているし。でも、あの人のアレは病気みたいなモノだし…。僕にはよく分からないけど、その、酒乱みたいなのかな…。いや、僕は、その」

夕の額に血管が浮き出しているのを、清吉郎は発見してしまった。どうやら、触れてはならない部分に触れてしまったようだ。

「ほんつとに、どうしようもない人よ。女のケツばかり追いかけて回して。何度ふられても、懲りないんだから。この土地に来て五年になるけど、これで何人目かも忘れた。両手の指でも数え切れないのよー!」

普段は大人しい夕も、父親のことになると人が変わる。



十歳の頃、この土地に落ち着いた夕達親子であるが、夕の父親の女好きは、町ではかなり有名である。

もともと夕が幼い頃から彼は女好きだった。

『お父ちゃんは、夕だけのモノだい』

そう言つて、何度泣いただろつか。泣いて膝にすがる夕を父親は、困つたように宥めていた。

「お夕ちゃんの親父さんは、色男だから」

夕の機嫌を直そうと清吉郎は、取り繕うに言つてみた。が、

「単なる若作りなだけよ。童顔つてヤツ」

「でも、本当に若く見えるよね。お夕ちゃん達を初めて見たときも兄妹にしか見えなかつたよ」

夕は毎日見ているから逆に気付かないが、夕の父親は時間を忘れたように変わらない姿でいる。夕が一人で大人になつていく。清吉郎が思い出したように呟いた。

「鬼……」

「え？」

「お夕ちゃんの親父さんは鬼だつて、家のばあちゃんが言つてた」

笑いながら清吉郎は言つた。

「うちのばあちゃんつて信心深いって言うかさ。今流行の宗教、何だっけ？ナンマンダブだっけ？そう唱えてたら、浄土とかに行けるつて信じてるような人だから」

ははは……と、人懐こい笑顔で必死に取り繕う清吉郎を見ている内に、何となく気の抜けていく夕であつた。

（はあ、鬼なんて形容詞、あの人には一番似合わない。鬼に失礼かも。軽薄極まりないあの人に使うのは）

「そう言えば、さつき楓さんといたなあ」

「楓さんつて、あのやまがた屋の楓さん？」

「そうだけ……」

綺麗な人だ。美人で聡明でやまがた屋の女主人である。一年前、婿養子である夫を亡くし今は未亡人である。その響きさえ彼女を輝

かしく特別にしているように感じた。  
俯いた先には、湖が広がっている。ゆらゆらと揺れる湖面に自分を見つめ、夕は目を反らした。

「アン。ダメよ。髪が崩れちゃうわ」

艶やかな声が、静かな森に紛れる。

力仕事など生まれて一度もしていないようなしなやかな白い指が、男の手を遮った。

「大丈夫だよ。誰も見てない」

男の涼やかな声を耳に、女はウツトリと男の瞳を覗き込む。

「あら、私は誰に見られても困らないけど」

華やかな朱を塗った唇が弧を描く。

「本当に？夫に先立たれ一年も経ってないのに他の男と逢い引きしてるの見つかったら、やばくない」

「言いたいヤツらには言わせておけばいいのよ。私は全然気にしないわ」

「さすがやまがた屋の楓さん。恐いモノ無しって？」

「そんな事ないわ。最近、不景気なのよ。ほら、あの流通自由化のせいで。今の殿様って信長公の言いなりじゃない。おかげでこっちが必死になって作った特権を全く無駄にしてくれちゃって。こっちもただで特権を手に入れた訳じゃないのよ。色々手回しとか大変なんだから」

言っている内容とは裏腹に楓は微笑んでいる。楓にとって、それは町が煩くなつて商売をし辛くなつたぐらいで大して影響は受けてないようだ。

「オレは嬉しいけど。町に入りやすくなった。前までは、港からここまで何度止められて荷物開かされてかね取られたか。オレみたいな非力な運び屋には有り難いことだ」

男の仕事は、港に降ろされた荷を町に運ぶ運び屋だった。

「あら、アナタが有り難いのは商売がしやすくなったからじゃない。女の子に会いやすくなったからじゃない。その見栄えのいい顔で何人口説いたのかしら」

「楓さんには敵わないなあ」

今度こそ、と楓の肩に手を回し、唇を近付けたが、あと一寸の所で白い掌に阻まれる。

「ダメ。接吻はイヤ」

「それ以外ならイイの？」

男は楓の首筋にフツと息を掛ける。楓は僅かに身じろぎ、今度は自分から腕を男に巻き付けた。そして、深紅の唇を彼の耳に当て息を吹き込むように呟いた。

「アナタの接吻は、魔法の、…魔法を解いてしまっ接吻だから…」

男は一瞬、目を見開いた。が、すぐにクスクスと笑いだした。

「楓さんは面白い人だね。どうして、そう思うの？」

「アナタと付き合った女の人に訊いたの。接吻された途端興味が無くなったって。まるで魔法が切れたみたい」

「彼女たちは恋する過程を楽しんでいたんだよ。だから、オレが自分のモノになった途端つまらなくなっただろう」

「そうかしら。…そうでもいいわ。だったら私にも恋する過程を楽しまして。もう少し、あなたの夢を見させて」

楓は、ウツトリと男の瞳を見つめた。

吸い込まれるほど澄んだ瞳だ。

「それって、今はお預けって意味？」

「そうね。その瞳に、もう少しだけ酔わせて欲しいの」

夕は、足を止めた。清吉郎と湖で別れ、林を抜けた所である。

父親がいつも逢い引きに使う小さな宮の裏。

二人の声が聞こえる。

お父ちゃんとやまがた屋の楓さんの声だ。

宮の裏手で、夕はグツと掌を握りしめた。

『お父ちゃんを盗らないで!』  
幼い頃は平気で叫べたのに。  
どうして、今は言えないんだろう。

「お夕ちゃんのお母さんもこんな風に口説いたの?」

宮の裏に聞いた楓の言葉に夕はハッと顔を上げた。

夕は母親を知らなかった。

「うーん。忘れちゃった」

呆気ない父の言葉に夕はガツクリと肩を落とした。

「そう言えば、私、あなたの名前知らなかったわ。夕ちゃんのお父さん。名は何て言うの?それも忘れたわけじゃないでしょう?」

「忘れた。楓さんが付けて、オレの名前」

夕は、ピクリと肩を震わした。

『…が、付けて、オレの名前』

既視感。

どこかで聞いた台詞。しかし、それは一瞬で泡沫のように夕の思考から消えた。楓の声が続く。

「いいわ。そうねえ、モモタロウ。キンタロウ。ウラシマ…」

「…『草助』だよ。昔の女が付けた」

「つまらない名前ね」

「楓さん…。オレ。もしかして、遊ばれてる?」

ふうと溜息を吐き、草助は空を見上げた。

「嵐が来る」

「こんなにいい天気なのにな?」

楓は草助につられるように空を見上げた。

西にうつすらと黒い雲が見られる。空を覆い隠そうとしている不気味な雲から、カラスが群れをなして逃げるように東へと移動していた。

「ほら。カラスが騒いでるよ。嵐だぞ〜って」

草助はそう言って、楓におどけて見せた。

冷たい風が楓の頬をなぞる。

「アナタはカラスともお友達なのね。…あら。本当に嵐が来るわ」

空から視線を外した楓は、意味深にクスクスと笑い出し草助から離れた。

そして目で草助の視線を促した。

「ゲ！夕じゃないか」

木陰に立つ夕を草助はゲンナリと見た。

夕はチクリと胸に突き刺さったモノが何かを考える前に足を進ませた。

顔は、既に子供のイタズラを見つけた母親の顔に変わっている。

「お父ちゃん。こんな所で、何油売ってるの！楓さんも、こんな男に付き合っていたら名が落ちますよ」

矛先が自分に向かい、楓はワザと大袈裟に驚いて見せ草助にウインクした。

「邪魔者は消えろとするわ」

絹の華やかな着物を身に纏い、今風に髪を縫い上げた楓を眩しそうに見送った後、夕は草助を振り返った。額には血管が浮いている。草助は、頬を引きつらせ、呟いた。

「あ、嵐が来る…」

「仕事しなさい！！仕事！家は貧乏なんだから〜〜！！」

重い雲が徐々に広がり始め、嵐がゆっくりと二人を覆い尽くそうとしていた。

風が鳴き、木々が叫び、森が狂う。

夜という名の闇の中、幾千もの漆黒の大蛇が、家々の隙間を縦横無尽に暴れ狂っている。

粗末な家は既に倒壊し、屋根から剥がされた瓦が木の葉のように

舞い上がっている。

カシヤン

「楓さん！もう危険です！」

足下に叩き付けられた瓦を睨み付け、楓は舌打ちした。

楓の父である亡き先代が先頭に立って作り上げた城下町が粉々に崩されるのを楓は黙ってみていられなかった。

敵の襲撃に備え天然の川を引いた外堀が増水し、今にも町を飲み込もうとしているのだ。

楓はそれを聞きつけ、何とか川の氾濫を防ごうと、町の若い衆を集めそこに向かっていく。

丈夫な蓑を纏っていたがこの滝のように叩き付ける豪雨の中では役に立っていない。

それでも楓の心の内は冷静だった。

港に先日届いたはずの荷の被害状況を予測し、荷の経由地点にある橋の崩壊がもたらす時間的損害を考えている。

楓は顔に叩き付ける雨に負けずキツと目を開く。

嵐によってもたらされた町の修繕は、御上からやまがた屋に依頼される。

楓の頭は、修繕に必要な物資、人員の数を計算し始めていた。

やまがた屋の主人とは、この城下町の実質的な主人であった。

町の若者は雨の中、目に見えぬ大蛇に戦いを挑むような楓の姿に、鬼の姿を重ねていたかも知れない。

「楓さん！」

楓は後ろから呼び止められ足を止めた。

振り向いた先には、同じくびしょ濡れの清吉郎が息を切らしていた。

「鍛冶屋の清吉郎じゃないか。アンタも来るかい」

清吉郎は頭を横に振った。

「お夕ちゃんが……。お夕ちゃんが……」

「お夕ちゃんがどうしたっての？」

「お夕ちゃんがどこにもいないんです！彼女の家が流されたんです。親父さんもいません」

考えられることではあった。

夕の家は川岸のあばら屋である。

この嵐では一溜まりもないであろう。

「どうしよう……。どうしよう……」

ぶるぶると震えだし、今にも泣き出しそうな清吉郎を、楓は一睨みし、怒鳴りつけた。

「情けない！そんなだから女一人口説けないのよ。こんな所でぐずぐずしている暇があったら、川を泳いで助けに行ったらどうだい！」

「いやはや、全く呆気ないモンだ」

丘の上の洞窟から、川に沈んだ我が家を、正確には、あった場所を眺め、他人事のように草助は言った。

「呑気に言っている場合？お夕ちゃんが寝ぼけてるから何一つ持ち出せなかったじゃない。これからどうするの？食べ物も何一つ無いんだから！」

ずぶ濡れの夕は肩で息しながら、同じくずぶ濡れの草助を睨み付けた。

「オレのせいってか？そりゃ無いよ。夕。お前だって慌てまくってそんなものしか持ってこなかったくせに」

と、草助が指差した先には底の抜けた桶が転がっている。

夕はムツとしたが、諦めたように洞窟の側面に背を預け座り込んだ。

「あゝあ。仕方ないわね。また、さすらいの親子に逆戻りかア」

この土地に居着く五年前までは、二人は様々な土地を巡り歩いて

いた。まともに食べる物もなかったが、不思議と夕は草助がいると安心した。この物事を深刻に考えない父親といると、楽天的な考え方が移ってしまうのだろうと夕は結論づけた。

お父ちゃんといれば、大丈夫。怖くない。

と、自分を安心させるかのように草助に視線を戻した夕は息を止めた。

そこには、夕を安心させる楽天家の姿がなかった。

いたのは、今まで見せた事ないような真剣な目つきで夕を睨む草助だった。

「お父ちゃん？」

不安に駆られ夕は草助を覗き込んだ。

「夕。お前は清吉郎ンコト嫁に行け」

夕は言われたことが理解できなかった。

「お前は普通の幸せを手に入れるんだ。清吉郎は心底お前に惚れている」

「何言ってるの？お父ちゃんは、どうするの？」

「父親が、娘にくっついて一緒に嫁に行けるわけがないだろう？…

それに、もう、限界だ」

「何が限界なの？」

「…お前は、オレの年を追い越しちゃう」

草助の言っている意味が何一つ理解できなかった。

ただ一つ、理解できたのは、もう、一緒にはいられない。

ただ、それだけだった。

「十二年も無理を通した。もう、止めよう」

草助の言葉が意味を為さないまま夕の耳を通り過ぎる。

もう、一緒にはいられない？

夕の冷たく濡れた頬に熱い滴が伝わり、口で言葉を紡ぎ出すより体が動いていた。



「夕!？」

夕は体全体で草助を必死で掴んでいた。

「イヤだ。絶対イヤ。嫁に行かない。夕はずっとお父ちゃんと一緒にいる」

子供のように草助の胸に顔を押し付け叫んでいた。

でも、子供の頃と同じじゃなかった。

気持ちは子供の頃と同じ純粋なままではいらなかった。

今の自分の顔を見られたくない一心で夕は顔を草助の胸に押し付けた。

暫く続いた沈黙の後、夕は暖かい掌を頭に感じた。

子供の頃、怖い夢を見た後、草助が必ずそうしたように柔らかく髪を撫でられた。

…時なんか止まってしまえばイイのに。

優しく撫でていた手がピタリと止んだ。

「清吉郎…」

戸惑ったような草助の声に、夕は顔を上げ洞窟の入口に立ちつくす清吉郎を見た。

鬼だった。

そこには、鬼の形相をした清吉郎がいた。

夕は清吉郎の顔に鬼を見た。

眉間に皺を寄せ、清吉郎の震える手には、森を抜けるために用意した斧が握りしめられていた。

「貴様。自分の娘にまで。何てコトを…」

この状況を誤解するのも無理なことだった。

そして、清吉郎の精神状態は、嵐の中で限界に近かった。

いつも人懐こく穏和な彼とも思えないような凄まじい形相で睨み付けてくる。

夕は恐怖のあまり声も出ない。

しかし、草助は肯定するでもなく否定するでもなく静かな瞳で清吉郎を真正面から見つめ返していた。

無表情なその顔からは、彼の真意は何一つ読みとれなかった。

夕は固まっていたまま、嫉妬を顕わにした清吉郎を見ていた。

夕の安否を気遣い、ただ夕の事を思い、この狂った嵐の森を必死で掻き分けてきたのだろう。

清吉郎は、否定しない草助を狂気に近い憎悪で睨み付け、夕を押しつけた。

「違つ、誤解よ！」

清吉郎の気迫を押しつけ叫んだが、遅かった。

斧は草助の肩にめり込み、血飛沫が上がる。その真つ赤な血を、草助の血を、夕は頭から被った。

草助は、その場でぐったりと倒れ込んだ。

夕は全てを否定するように何度も頭を振った。

震える手を伸ばし草助を揺さぶったが動く気配はなく、ただ血ばかりが流れ出していく。

口に手を当て呼吸を確かめる。

心臓に耳を当て鼓動を確かめる。

僅かの動きも感じられない。

ポトリと清吉郎の手から斧が落ちた。

「ああ……あ……」

その時ようやく正気に戻った清吉郎は口を何度か開きかけたが、自分のした事への恐怖のため弾かれたようにその場を走り去った。

夕は、動かない草助を横たえ、暖かな血に染まった体で立ち上がる。

それは、どこかで見た赤い狂気。

夕の赤い瞳に、血に染まった赤い斧が光る。

「許さない……」

夕の赤く濡れた指が、斧を握る。

草助から流れる血は、静かに赤い湖となる。

「許さない」

その瞳には、赤い湖だけが漂う。

夕は洞窟を出た。

赤く染まった夕の瞳は、激しく呪う相手に向かう。

遠い昔。

その湖の深淵に棲む鬼は、赤い眼をしていた。

そして、鬼は、幼い夕に言った。

「死のう。…一緒に」

と、その真っ赤な手を延ばした。

辺りには、真っ赤な湖が広がっていた。

「草助！」

楓は真っ青になって洞窟の中の草助に近付いた。

草助や夕の安否が気に掛かり、外堀の方が一段落すると同時に、大急ぎで捜したのだ。

洞窟の中は、血の匂いで充満している。

そして、その血の海の中、草助が一人真っ赤になって倒れているのだ。

楓は状況を理解できないまま、草助の名を呼び草助を揺さぶった。僅かに草助の臉が動いた。死んではいないようだ。

「楓さん？…オレ、生き返ったのか？」

「何があったの？それより医者……」

立ち上がりかけた楓の腕を草助が引いた。

「必要ない」

「必要ないわけないでしょ！」

「接吻して。そしたら直る」

楓の腕をぎゅっと握りしめた。

「冗談言ってる場合？」

楓は、雨に濡れた髪を振り乱して、激しく言った。

そんな楓を草助はじっと見つめ、むっくりと起き上った。

「ああ、そうだな。ああ、そうだ。夕を、夕を止めなくては。楓さん。頼む。…オレを夕の所に連れていってくれ」

清吉郎は追いつめられていた。

稲妻が走り爆音と共に夕の顔が瞬間、闇に浮かんだ。

湖は増水し、周辺一帯が水に浸かっている。

嵐で押し広げられた湖を夕は歩いた。

憎しみだけが夕を歩かせた。

稲光により白く照らされた湖に夕が写っては消えた。

「清吉郎が？」

楓は信じられないと言うように草助の話を聞いた。

瀕死の体にも関わらず夕の元に行くと言って訊かない草助に、楓は仕方なく肩を貸してやっている。

「オレが悪いんだ。十二年も夕を縛り付けていた」

怪訝な顔をした楓に、草助は答えた。

「…夕は、オレの子じゃない。三歳の時にアイツを拾った。…いや、拾われたのかな」

戦国時代。

戦は、嵐の如く吹き荒れている。

多くの雑兵達にとって、敵の陣地に立ち並ぶ家々への略奪が戦利品だった。

貧しい農家ですら見逃されない。

大切に蓄えてあつた穀物を根こそぎ持っていかれ、抵抗すれば殺された。

十二年前、幼い夕の家にも戦の嵐は襲ってきた。

長引く干ばつのため明日食べる物すらない夕の家で、略奪者は母親に目を付けた。

抵抗した父親は殺された。

夕は土間の隅で固く目を瞑り嵐が去るのを、ジッと待った。

何が起こっているのか、よく分からない。

ただひたすら、恐ろしかった。

この悪夢から覚めれば、母に抱きしめられ、父が優しく頭を撫でてくれると信じていた。

しかし、夕が目を開くと、父はおらず、母は血の湖で男に揺すられていた。

夕は父を目で捜した。どこにもいなかった。

ただ、血の湖に男が一人俯せに浮いていた。

夕が僅かに身じろぎした時、血が目の前で弾けた。

さつきまで母を揺すっていた男が、呻き声を上げ血に埋まった。

そして、夕は鬼を見た。

その鬼は赤い湖を歩き夕に言った。

「死のう。もう、生きては行けない」と。

真つ赤な手には、真つ赤な血を滴り落とす斧が握られていた。

草助の鼻は、激しい雨の中、血の臭いを追っていた。

「わかるような気がする…」

草助と夕が親子ではない。

楓には、それが全く不思議ではなかった。

「アイツも、オレも一人だったんだ。一緒にいてはダメだと思いつつ、アイツに甘えてた。そろそろ解放しなきゃな」

激しい雨に掻き消えそうな声だ。

「…楓さん。夕を頼む。楓さんは、強くて優しい人だ。」

「…知ってるんでしょ？夕ちゃんの気持ち。だったら、どうして別れるの？夕ちゃんが嫌いなもの？それとも、娘にしか見られない？」

楓はチラリと草助を見遣る。

相変わらず無表情だ。しかも、驚いたことにさっきまで瀕死だったにもかかわらず、徐々に足下がしつかりとし顔色が戻っている。

いくら丈夫とはいえ尋常ならざる回復力だ。

草助は楓にかけていた腕を外した。

「オレにはこうするしかないんだ」

「どうして？わからないわ。二人に血の繋がりがなければ…」

「オレは人じゃない。鬼だ」

足場の悪い中、草助は歩調を緩めず楓の先を歩く。

「…ただ生きることしかできない臆病な鬼だ。人を殺すことも出来ず、ただ、たまに人から生気を奪う。甘くて切ない生気を唇から少しだけ」

楓は目を見開き、普通では考えられないことを淡々と語る草助の背を見た。

草助のふざけた性格は、深い闇を隠すためだった。

このあまりにも深く暗い草助の闇は、不可思議で現実離れしていた。

楓にとってお伽話や迷信は冗談にしたり、利用する物である。

そんな現実の中で生きてきた楓であるが、草助の不可思議な話は妙に納得してしまう。

逆に謎が解けたようにすら思えた。

草助と接吻キスをすると想いが消えるのは、草助がその想いを口から吸い取ったからだ。

草助は言葉が続けた。

「人は、接吻キスを交わしても想いは消えない。しかし、消えるときは何もしなくても消える儚い物だ。人の想いというのは」

「親子なら消えないって思ったの？」

思いがけない楓の切り返しに、草助は苦い微笑で振り返った。

「…そうかもな」

永遠と続く飢え。

何十何万何千何百何十何日目の喰欲。

「オレは、相手の想いを喰らって生き続ける餓えた鬼だ。激しい餓えに、相手の中のおれの全てを食い尽してしまう事もある。オレは、オレの飢餓に勝てない…」

最後に残るのは、虚しい満腹感と、行き場のない自分の想い、忘れられない想いだけ。

草助は初めて苦しげに眉を寄せた。

求める。彷徨う。喰らう。求める。彷徨う。喰らう。求める。

何十何万何千何百何十何回と繰り返される。

「…じゃあ、私との接吻キスは一生お預けね」

雨で洗われた楓の素顔は美しく強かった。

夕に岩へと追いつめられ清吉郎は恐怖で膝から崩れた。

虚ろな夕の瞳に、雨で洗われた刃が光る。

「ひい〜…」

清吉郎は、ぎゅっと目を閉じた。

「夕。止めるんだ。オレは生きている」

ハッと、夕は振り返り、一人でしっかりと立っている草助の姿を認めた。

夕の手から斧が滑り落ちた。

「お父ちゃん…」

怖い夢からようやく覚めた子供のような安堵が夕の顔から溢れ出した。

夕は安らぎを求め大好きな胸に駆け寄ろうとした。

その時、草助と楓が目を瞠った。

夕に恐怖を見た清吉郎にとっては、夕は鬼だ。

狂気と狂気が交錯する。

清吉郎が夕の落とした斧を拾い上げ、夕を斬りつけようと飛びかかった。

草助は、斧の刃を自らの背で受け止めた。

再び、血飛沫が上がる。

「またかよ…」

草助は夕の膝に倒れ込んだ。

同時に清吉郎は、嵐の中へ飛び出して行った。

夕は、悪夢へ一気に引き戻される。

「お父ちゃん！お父ちゃん！」

泣き叫ぶ夕に草助は手を差し伸べ、夕の頬を撫でた。

「…夕。お前も、やっぱり忘れるのか」

「何言ってるの？お父ちゃんは死なない！」

「…そうだな。接吻<sup>キス</sup>してくれたら治るかもね」

夕は目を見開いた。

そして、弱々しく微笑む草助の額から頭をゆっくりと撫でた。

かつて草助が夕にしたように、優しく包み込むように限らない愛しさを込めて。

そして、ゆっくりと上から、唇を深く重ねた。



永遠と続く飢え。

何億何万何千何百何十何日目の喰欲。

眩しすぎる太陽。

喰欲に支配された中枢神経。

求める。彷徨う。喰らう。求める。彷徨う。喰らう。求める。

何億何万何千何百何十何回と繰り返される。

永遠に満ちる事などない。

嵐は、いつの間にか止んでいた。

数ヶ月後。

「お夕ちゃん。またここにいたの？」

楓は、ゆっくりと夕に近づく。

「あっ。お義母さん。…ここに来たら何か思い出せるような気がする。嵐の日の事とか」

そう言っつて、夕と楓は太陽にキラキラと輝く湖面を眺めた。

夕の瞳には、湖から照り返される光が溢れている。

「酷い話ですよ。洪水で溺れた私を助けて、死んでしまった父親の事を忘れるなんて」

あの後、草助は姿を消した。

夕は熱にうなされ、目が覚めた時には何も覚えていなかった。

だから、楓は嘘を教えた。

そして、夕を養女として引き取ったのだ。

夕の中の自分を全て食べ尽くし、あの鬼はそれで満足したのだろうか？

餓えを満たす事は出来たのだろうか？

楓は湖面に草助の悲しい瞳を重ねた。

「…でも、ほんの少しだけ、覚えていることがあるんです。鬼の事…」  
美しい湖の底には鬼が棲む。

だから、決して奥深く覗いてはいけない。

深い深い闇に棲む鬼は、人を喰らい、人を人でなくしてしまうから。

人の心の深淵に、鬼はひっそり身を隠している

・・・アレは、父が言った言葉だった？

それとも、お父ちゃんが？

夕は目を細め、微笑した。

「笑わないでくださいね。私、小さい頃、鬼に会った事があるんです。すごく変な鬼で、全然怖くないんです。アレを鬼と呼んだら本物に失礼かも知れないくらい、何だか、笑えちゃ…てっ…」

瞳から、唐突に涙が溢れ出した。

想いだけが溢れ出る。

草助は、十二年という大きすぎる夕の想いを喰らい切れなかったのだろうか。

「鬼から逃げる為に入った森で、鬼に会ったんです。何か変ですよね」

無くした十二年分の記憶の代償にほんの少しだけ、幼い時分の記憶が夕に蘇った。

戦の嵐が、幼い夕を襲ったあの時の記憶が。

真っ赤な鬼、鬼と化した母から逃げて、逃げて、辿り着いた森の湖。

そこで夕が見たのは、夥しい数の死体だった。

そこは戦の跡だったが、幼い夕はそこを地獄だと思った。

かつて、父が言っていた鬼が無数に倒れているのだと思った。

夕は怖くなつて逃げ出そうとした時、足に何かが引っかかった。

それも、鬼だった。

「痛っ。誰だよ。人を蹴りやがって！ ったく、おちおち死んでも  
いられない。あゝあ、全く、まゝた生き返ってしまったぜ」

鬼は、長い溜息を吐くと自分の腹に刺さった槍を力一杯引っこ抜  
いて顔を歪めた。

「これだけ、滅多差しにされれば、死ぬると思っただけだ。甘か  
った」

鬼は、自分を蹴ったヤツを振り返った。視線の先には目をパチク  
リさせた夕がいる。

「誰だ？ おまえ」

「…ゆ、ゆう」

「ゆゆう？ 面白い名だなあ」

不思議そうに自分を眺める鬼は、怖くない。

「夕だよ！ おじちゃんはオニなの？」

「オニ？ うーん。…みたいなモンかな」

「オニさんは、名前はあるの？」

「オレの名？ オレは…、忘れた。夕ちゃんが、付けてよ。オニの名  
前」

鬼は、ニツコリと夕に微笑みかけた。

夕はすごく嬉しくなった。

「…お、おトウちゃん！」

鬼は、暫く驚いたように夕を見つめ、そして、優しく笑った。

「おトウちゃんか。いい名だ」

夕もニッコリ笑った。

湖面は、キラキラと輝いていて…

それは、暖かい味のする記憶だった。

## 第4話 空

何にもない。空だ。

青い青い空。

どこまで行けば、その空に触れられるんだろう。

どこまで行けば、青い海は空と繋がるんだろう。

はあ。はあ。はあ。

走った。

日差しは、どこまでも熱く。肌を焼き続ける。蝉の鳴き声は、鼓膜を叩きたいだけ叩き続ける。

「待て！このっ！くそ餓鬼があ！」

男に後ろから襟を掴まれ、ウロは地面に叩きつけられた。そして、男はウロが盗んだ干魚を取りあげた。男は漁師だ。逞しい拳を何度もウロの頬に叩きつける。

口の中に鉄の味が広がる。もう、慣れた味だ。男はウロの腹に蹴りを入れ、唾を吐きかけた。

「売女の餓鬼がっ」

蹲っているウロの腹に留めの一発を入れ、気が済んだのか、男はようやく去っていった。ウロは男が去るのを見届けてから呟いた。

「てめえも買ったじゃねえかつ。その売女をよおお」

口の中の唾を吐き出した。赤い唾が地面に落ちた。体中がギシギシ痛む。目の粗い粗末な麻の着物が血と泥で更に汚れた。

足を引きずり、松林の日陰を見つけると浜辺にごろりと横になった。

ウロは七つになる。

二年前の壬申の乱はウロから父親を奪い。頼れる親類もなく、元々貧しい平民の母親は奴婢になることを恐れ、この浜辺の漁村に逃げてきたのだ。だが、土地のない母親に出来る事は、娼婦だけだっ

た。ウロには昔の記憶はない。ただ、物覚えついた頃から、ウロは常に餓え、母親は娼婦だった。

しかし、その母親は気前のいい男が出来たと思ったら、ウロの前から突然消えた。ウロにとってはどうでもいいことだった。母親から食べ物を与えられる事はとうの昔に無くなり、ただ、暴力を振るわれていただけだったのだから。

松葉の隙間から日差しがキラキラと輝いた。

「腹減った…」

ウロは立ち上がりゆっくりと海へと近づいた。小波が生まれては消え、消えては生まれる。生ぬるい海水がウロの足元まで追いついては離される。海水が引いた瞬間に砂の中に小さな口が空く。

ウロはそこに手を突っ込む。貝が取れるのだ。

両手一杯に貝が取れた時、ウロの目に大きな魚の尾が見えた。岩場の陰になり正確な大きさはわからないが、かなりの大物に間違いはなかった。ウロは両手一杯の貝を放り投げて岩場に走った。

尾はピシャリピシャリと弱々しくはあるが確かに動いている。

しかし、岩場を伝いながら何とかウロがそこまで行くと、そこに魚はなかった。あつたのは女だった。女は苦しげに息をしていた。上半身裸の女が岩を掴んだまま倒れこんでいる。下半身は海に浸かっていた。

ウロは気味が悪くなり逃げ出そうとした。

「坊や。お願い…」

喋った？

女が濡れた瞳をウロに向けた。女は綺麗だったが、ウロには気持ち悪かった。

「な、に…？」

「坊や…」

女は腕をウロに伸ばす。ウロは恐る恐る近づいた。

「オバちゃん。人魚？」

足元に鱗があるからだ。

女は妖艶な微笑をウロに投げかける。ウロが差し出された手に届きかけたとき。

「ダメ!!!」

若い少女の声。瞬間、何かが弾けた。

人魚の女は海の中へ弾き飛ばされ、ウロもそのショックで岩場に尻餅をついた。

「痛っ」

「大丈夫？」

顔を上げると、ウロよりも僅かに年上の少女が立っている。大きな瞳はキラキラと太陽に輝き、肌は白く艶やかだった。豊かな髪が潮風に揺れた。

「どうなってるんだ？」

ウロの問いに女は微笑んだ。

「アレは人魚。知らないの？人魚は人を喰らって生きるのよ。あなたは食べられるところだったんだから。私はイオナ。あなたは？」  
そう言って、差し出された手を無視してウロは一人で立ち上がった。

「さっきのアレ何？」

イオナは首を傾げた。

「アレ？」

「弾き飛ばされた」

「あゝ、アレね」

納得したようにイオナは頷く。そして、得意げに話す。

「私は人魚の守り人。まだ、半人前だけど。人魚から人を守り、人から人魚を守る。…って婆様に教えられてるの…」

「アンタは人間じゃないのか？」

ウロの言葉がわからないという風にイオナはキョトンとした。胡散臭げにウロは少女を見遣る。

少女の身形はウロと同じような汚い目の粗い麻の着物だった。膝下から覗く細い足は、確かに人間のものだ。

「さあ…、婆様がいうには、…そうだ。婆様に会えばわかるわ」  
少女は勝手に決めると、ウロの手を取って走り出した。

「ちよつと待つて…」

ウロの言葉も待たずに、連れて来られたのは、小さなあばら屋だった。

「婆様！」

藁で出来た日よけを豪快に撥ね付け、イオナは中に跳び込んだ。

狭く暗いあばら屋の中にちよこんと蓬色した布の塊があった。イオナはその前に座り込む。布が動いた。それは、よく見ると人である。しかし、ウロから見えるのは、布の隙間から覗く細い目だけだった。

「婆様。友達よ」

またしても、イオナは勝手に決めた。

「ほお…。珍しいね」

その声は、ウロの脳に直接響いた。それは気のせいかもしれないが、少なくともウロにはそう感じた。

「あのね。聞いて。婆様。彼は湖なの」

イオナは興奮したように話す。

「湖？」

聞き返したのは、ウロだった。

「そこにお座り。ウロ」

言われるがままにウロは座った。名前は名乗っていない。居心地が悪く、ウロは目を伏せた。

「湖…」

脳にそう響いた瞬間、ウロの目の前に湖が広がった。静かで穏やかな湖だ。葦の原に囲まれ、穏やかな風が頬を撫でる。

知っている。

自分は毎日毎日この湖を見ていた。湖面を覗き込むと、微笑みを見せる母親と、そして、父親。暖かな生ぬるい感情がウロの中に入り込む前に突然鼓動が激しくなった。



ウロは耐え切れず胸を掴んだ。

『おっと…』

湖が消えた。薄暗いあばら屋があるだけだ。

何だ？今のは…

知らない。オレは知らない。

『余計なものを見せてしまったようだね』

「綺麗…」

隣に座るイオナは目を瞑ったまま、未だに幻想の中に佇んでいるようだ。

「誰だ？あんた等は？」

ウロは心の奥底を覗き込まれた錯覚に陥った。不愉快で気持ちが悪い。

『…人々は、昔、神と共存しておったのじゃよ。じゃが、今、神は目に見えなくなった。我々一族は、海神様と人間の間の子の子孫…。言ったところで、ウロは信じていないようだね。それもよいことよ。何を信じるも人の心の勝手。仏教…異国の神も日本の神も元は同じ』

「オレは、何も信じない」

『…神が見えなくなるのも、我々が…、人間の血を持つ我々でさえ消えるのも、直じやろう…』

「オレは、自分しか信じない」

『忘れるがよい。目の前で繰り広げられた戦を忘れたように…我々の事を』

「婆様！」

イオナは大きな黒い瞳に涙を溜めた。しかし、ウロは筵を捲り上げると、日差しの中に消えた。

「ウロ！」

大きな黒い瞳にはただ筵の隙間から漏れる光だけを反射した。

『イオナ。お前は、我が一族最後の子。生まれ出でるものは、足の代わりに魚の尾を持った女や、亀のような甲羅を背負った半端物ばかりじゃ。彼らもいずれ消えるだろうが、それまでは、お前が守っ

てゆかねばならん』

「でも…」

『あの少年の心は湖底に沈んでおる。近江国大津が消えたと同時に少年の平和が消えた。もう、どうにもならんだらう…』

「瞳にあんなに穏やかな小波を持っているのに…」

『あの瞳には、荒れ狂う海の荒波しか残っておらんよ』

五年後

ウロは柄に手をかけ、引き抜いた。

ピシヤッ

ウロの頬に鮮血が散る。手でソレを拭くと後ろから声が聞える。

「ウゝロオゝ」

ウロより三つ年上の男が死体を見下ろした。

「何度も言っただる。女は犯して殺す。あゝあ。勿体ねえなあゝ」

「カヤはこんな女が好みか？こんな醜女犯す価値ねえよ。さっさと金目のもの盗ろうぜ」

ウロは面倒そうに殺した女とその父親らしき人間の荷物を解き始める。カヤは舌打ちし、死体を足で蹴り、仰向けにした。口から舌がだらしなくぶら下る。

「チツ。ろくなもんねえな。スルメだけだ」

商いの前だったらしく、金目の物はなかった。殺された男の懐から全く役に立たなかった子刀を見つけ、ウロは自分の懐に入れた。コレぐらいだ。

五年前、ウロは山に入った。そして、必然的に山賊となり、たまたま気が合ったカヤと行動を共にしている。町の屋形を襲うときは他の山賊と徒党を組むが、突発的に襲うときはいつもカヤだけが一緒だった。

スルメを噛みながら、カヤは言った。

「そろそろ、山狩りかもな」

豪商に金を積まれ嫌とは言えない役人達が、不定期に山賊狩りをするのだ。しかし、山狩りで殺されるのは間抜けな山賊のみだ。

「カヤ。オレさ、もう飽きた」

「はあ〜〜？飽きたあ〜？」

カヤの口からスルメが落ちた。

「もっと、面白くて簡単に飯喰いたい」

「ウ〜〜口オ〜〜。これ以上に簡単な方法ってあるう？」

「わかんねえけど。都に行く」

「おい。ウロ。ホンキ？」

「悪いな。カヤにはずっと世話になったから。お前も一緒に行くか？」

スルメの足を引きちぎってカヤは言った。

「オレはこの山で充分だ。欲をかくとろくなことにならん」

「そ。わかった。じゃあな」

「へ？じゃあなって。ここで」

目をぱちくりさせているカヤを置いて、ウロは山を降りていった。振り向くことなく。

さらに、四年後。

「宇呂。いる？」

女の声でウロは目が覚めた。頬に女の髪が懸かり、くすぐりたい。女はクスクスと笑っている。細い指でウロの額から頬にかけてなぞる。女は上等な麻の着物を着ている。

「まだ、夜中だ」

また、寝ようとするウロを起こすように女は唇を奪う。

「ご馳走様。はい。お代金」

唇の自由を取り戻したウロの目にお代金が入る。意匠の凝った刀だ。

「もつといたいけど、旦那に見つかるやばいから、帰るね」  
「うん」

ウロは女を見送ると刀に目を向ける。笑いが口から漏れる。この刀があれば、少なくとも半年は飯が食える。

「バカな女」

山賊をやめたウロはおいしい仕事を見つけた。女を騙す事だ。女に優しくすれば、女は喜んで自分に貢物を持ってくる。これ以上に楽な仕事はなかった。身分の高い女が外に出る事はないが、通い婚が主流な為、家に忍び込む事は簡単に出来る。夫は家にいないのだ。狙うのは二人目三人目の妻を持った夫があり、子供のいない正妻。滅多に出来ない夫を待つ女のところだ。

それ以外にも豪商や豪農の娘。

刀を持って来たのは豪農の娘だったのだ。まだ、十代だが四十代の官位を持った役人に三番目の妻として嫁がされたのだ。まだ遊び足りない娘はスリルを楽しむ為に家を抜け出す。見つければ、ただではすまないだろう。ウロもこの家を引き払わねばならないだろうが、見つかることはないだろう。

「が、そろそろ潮時だな…」

ウロは母親を思い出す。母親は体を売りながらも貧乏で喰っていきのがやっとなかった。今、ウロは母親が生きているのか死んでいるのかも知らなかったが、どうでもいい事だった。

朝日が板の隙間から糸のように漏れてきた。ウロは眠れず、釣りに行く事に決めた。竿を持ち、川沿いをゆっくり歩いていくと、汚れた麻の膝丈までの着物を着た一人の娘がウロに向かって歩いてくる。

貧しい娘だ。

ウロはどんなに美しい娘でもお金が無ければ興味が無かった。だから、ウロは通り過ぎようとした。しかし、女は呼び止めた。

「あの…」

女は大きな目でウロを見上げた。女は綺麗だった。艶やかな髪を後ろで縛ってある。手には籠を持っている。これから農作業にでも行くのだろう。ウロは興味がなさそうに先を行こうとした。

「あ、あの、待って！ウロ」

一瞬、湖と海が交互に広がり、そして、消えた。失われていた記憶が蘇ると共に不愉快な想いがぐつと喉元までこみ上げて来た。

ウロは苛立ち気に言った。

「オレはアンタには会った事がない。オレはピンボー人がデエ嫌いなんだよ」

女の黒い大きな瞳から、大きな涙がポタポタと落ちてきた。ウロは益々苛立って走り去った。

何故、忘れていたんだろう。

九年前の些細な記憶。だが、その記憶と共に思い出した。その老女に見せられた湖の記憶。暖かい思いと共にある吐き気がするほどの不快さ。

そして、波の音が耳に残った。

深い緑の中、ウロは歩いてきた。朝の日差しがチラチラと葉の隙間からウロの顔を照らした。葛城に行った帰りだ。

女の一人が古くから続く名家葛城氏の館で侍女として賀茂媛に仕えているのだ。賀茂姫は、中臣鎌足の息子である藤原不比等と婚姻し、娘を儲けている。

ウロは女の言っていた事を思い出していた。賀茂姫の娘である宮子が病気だと、それもかなり深刻であり、あらゆる祈祷も薬師も見放したと言う事を。

そして、女が最後に言った言葉。

人魚の肉。

それを最後の切り札として探していると言っていた。不老不死の妙薬としての噂は聞いたことはあるが、実際に不老不死の人間は見ただことはない。だが、人魚なら…

恐らく、誰もが見放した宮子が元気になれば、かなりの見返りが期待できる。

ウロの口元が弧を描く。

使える物は、何だっ使用さ。

そして、翌日。

女は、再び、ウロの前に現れた。

今度はウロから話し掛けた。

「イオナ。この前はごめんね」

優しく囁くように言った。それだけで、女の顔が明るくなった。

「よかった。思い出してくれて。ずっと、ウロを見たくて、探していたの…。婆様はもう会うなって言ったけど、ウロの湖が忘れられなくて…」

一瞬、ウロは息を止める。

「婆様は最近神経質なの。何だか海が騒がしいって…。何かが起こるといつて…逃げてきたの。もう、浜辺で生きていくのがイヤだったの。だから、その…」

ウロは大きく息をした。もう、不快感は通り過ぎた。後は、目の前のバカな女を引掛けるだけだ。今日のこの日に目の前に現れたのは、好都合としか言えない。

常に運と女は向こうから近づいてくる。

「そうなんだ。イオナには普通の女として幸せになる権利があるのに、可哀想に」

黒い瞳が潤んだ。ウロには才能があった。女の欲しい言葉を与える才能。九年前、この女に初めて会ったときは、そんなものはなかった。心が読めるわけではない。女の方から顔に出すのだ。

優しい微笑で今では自分より背の低いイオナの赤く染まった頬に手を添えた。

「僕もね。本当はずっと忘れられなかったんだ…。君のこと」

イオナはウロの目を真っ直ぐに見返す。その大きな黒い瞳で。

夜の海だ。静かな夜の海のような黒くて切ない。

女の小さな声がそっとウロの耳に入った。

「好き…。アナタの、その湖のような瞳が」

その言葉と共にウロはイオナを抱き締めた。僅かに潮の香りがあった。

「イオナ…。でも、僕たちは一緒にはなれないんだ。実は、…いや。止めておこう。こんなことを話しても辛くなるだけだ」

嘘。嘘を固める。自分の嘘で女が動くとき、ウロは快感を感じる。山賊をしていたときに獲物を追い詰めるときに感じた同じ種の快感を。

「お願い。話して。私、ウロの為に何でもするから。その為に、海を捨てたの」

真摯な表情をイオナに与える。

「でも…」

「お願い！」

「…実は、僕の友人に葛城の山で薬師をやっているものがあるんだ。それで、僕は彼を手伝っているんだけど、最近、近くのお屋形の姫君がご病気になるれたんだよ。あらゆる手を尽くしたんだが、悪くなるばかりで」

ウロは悲痛な顔をする。

「…悪くなったのは、薬のせいだって言われ始めたんだ。それどころか、僕たちが毒を盛ったと嫌疑を掛けられている。姫君が助からなければ、恐らく僕たちの命はないだろう…」

「そんな！薬のせいじゃないの？」

「勿論だよ。病気が重すぎるんだ。その病気を治すには、人魚の肉しかないんだ」

黒い瞳に怯えが走った。

「ごめん。いいんだ。聞かなかったことにしてくれ。君は人魚の守り人。その君に人魚の肉の話をすべきじゃなかったね」

そう言って、ウロは見を翻そうとした。

「待つて！そのお姫様が助からなきゃ、ウロは殺されるのね」

「…ああ、そうなるだろうね。逃げても無駄だろうし…相手が相手だからね…」

そして、長い沈黙の後。

「何とかするわ…」

そして、二日後。深夜、イオナはウロの元にやって来た。人魚の肉を持って。

「これが、…人魚の肉」

月明りの強い夜だった。イオナは頷く。

「顔色悪いね…」

「月明りのせいよ」

イオナは苦しげだ。肩で息をしている。そして、ウロはイオナの右腕の包帯に気付いた。

「怪我したの？大丈夫？」

そう言つてその腕に触れようとした。

「ダメ！」

怯えたように、イオナは腕を引っ込める。

「ごめん…」

「何でもないの…」

暗い表情だった。当たり前だとウロは思った。守るべき人魚を自分の手で殺したのだから。しかし、ウロは同情しない。

バカな女だ。心の中で嘲笑した。

「私の事、好き？」

突然、はつきりとイオナは訊いた。あまりにも突然で、まるで切羽詰つたように。

「え？ああ、勿論」

黒い大きな瞳をウロに向ける。夜の海。静かな、嵐の前の静かさのような夜の海。

「好きよ。ウロの湖」



ウロは思い出せなかった。何故、自分に湖の記憶があるのか、暖かな記憶と背中合わせにある恐怖。大津の都。壬申の乱。遷都。事実を繋ぎ合わせれば、予測は出来た。自分が大津で暮らし、父が戦に巻き込まれ殺され、母が自分を連れて逃げた。

だが、それが何だと言うのだ。過去など何の意味もない。生まれてからずっと見ていた筈の湖すらも自分の中に記憶として残っていない。ただ、老婆が不思議な術を使い自分に見せた湖だけが、脳裏に残っているだけだ。

「もう、会えないわ…」

黒い瞳から涙が零れた。

「え？」

自分とずっといたいから、人魚を殺したのではないか？ウロは素直に驚いた。

「さよなら」

ウロの前から、イオナは消えた。

だが、それすらも、ウロには都合がよかった。一人の女が自分に付きまとうのは、鬱陶しかったからだ。

急いでウロは葛城に行った。侍女に会う為だ。

「これ…人魚の肉？」

女の手には笹に包まれた人魚の肉がある。恐る恐る女は包を開いた。中には桃色の肉が不気味に光った。細い血管が僅かに残っている。今にも鼓動し始めそうに生々しい。

「でも、…信じるかしら？私だってそんなの信じられないのに」

女は決して若くない。夫が無くなり、葛城氏の館に侍女として働き始めたのだ。子も無く、若くない女は、簡単にウロに引っかけたが、若くない分、用心深い。

「…犬にでも食らわして、大丈夫なら、試すって言うのは？」

「…やってみるけど。私ね、宮子様にお会いした事ないのよ」

「同じ館なのに？しかも、賀茂姫の侍女をしているのに？」

「厳しいのよ。まあ、病気がちつて事もあるけど、だから…でも、やってみる」

女は包を持ったまま、屋形へと帰った。

「越智。どこに行つておつた」

廊下から声が聞え、越智は畏まった。声の主は越智が仕える賀茂姫のものだ。

「少し、風に当たつて参りました」

越智は顔を伏せたまま答える。

「もうすぐ、粟田殿がいらっしゃる。用意するよつに」

「畏まりました」

粟田真人。藤原不比等の側近だ。最近、宮子の様子を頻繁に見に来る。

馬の鳴き声が聞えたかとおもつと数名の舎人を従え粟田がやつて来た。

人魚の肉の話をしていたのは、この粟田様だ。話を通すだけ、通してみようか…

「これが、人魚の肉だと。まさか…」

越智は顔を伏せたまま、黙っていた。

「人をやつて海を探させておつたが、その陰すらも見当たらなかつた。だから、諦めたのだが…、これをどこで手に入れた？」

「懇意にしている者がおりまして、宮子様を心配されて…」

「本物か？」

「…わかりません」

越智は正直に答えた。

「その者は、確かな筋の者か？」

「…えつと、あの…小角様の縁の者です」

越智は咄嗟に嘘を付いてしまった。役の小角といえば、葛城の山に棲む呪術師との噂の傍ら薬師としても有名だったからだつた。

「あの、その者は、不思議な力を持っていて、宮子様の病気を

解され、私に人魚の肉を渡されました」

「その者が宮子様の病気が何であるかわかっておると?」

「はい。そう申しております」

厳しい顔で睨まれ、越智はどうしていいかわからなくなった。

「越智は、それがどんな病気が聞いたのか?」

「…いえ。私は聞いたところでわかりませんから、聞いておりません」

「…そうか。では、食ってみる」

「は?」

驚いて顔を上げると、真人は懐から小刀を取り出し、肉を切り取った。

「ほれ」

肉を目の前に差し出され、越智は恐る恐るそれを手に取った。越智は山で見つけた狸で既に試してある。狸は美味しそうに食べ、元気に走り去っていった。死ぬ事は無い。

それに、ここで食べなければ、怪しいものを差し出したとして、自分の首が危うい。

思い切り越智はそれを飲み込んだ。

なんともない。それどころか、急に体中に力が漲る不思議な感じがした。体というより、心が軽くなった。

「大丈夫です。すごく美味しいですし、ああ、何だか、若返ったみたい」

真人には目の前の侍女が若返ったとは思えなかったが、毒ではない。

宮子の、あの病気が治るなら試すのも悪くないだろう。

日の光が川面に反射しキラキラと輝いた。ウロは越智からの連絡を待っていた。あれから、すでに三日。

釣りをしながら、ウロは逃げる事も考えた。万が一、肉を食べさせた後にでも、その娘が死んだら、越智はただではすまない。当然、

自分のことも話してしまうかもしれない。あの女は、そんなに賢くは無い。

竿がピクリと引っかかる。ウロが竿を引っ張ると一匹の魚が釣れた。

ウロは首を捻る。それは、川魚ではなかったからだ。それは、海でしか取れないはずの魚だった。浜辺で暫く暮らしていたウロにはそれが、わかった。

「迷い込んできたか」

ウロは早速火を焚き、それまでに釣れた川魚と共に火に焼べた。

海の魚は驚くほど美味かった。

「こんな魚は初めてだ」

「フッフッフツ…」

突然、脳に響いた笑い声にウロは固まった。辺りを見回すと、九年前と同じ蓬色の布を全身に纏った老婆がいた。

「喰ったんじやろう？あの子を」

何を言われているのかウロには理解出来ない。老婆は布の隙間から嵐のような激しい瞳でウロを睨みつけ、不気味に笑いつづける。そして、笑いながら続ける。

「美味かったかい？」

嵐を瞳に持った老婆は更にウロに静かに、けれど叩きつけるように言葉を紡ぎ続けた。

「貴様は鬼になった。永遠にこの世を彷徨い続け、人の生き血を啜り、人肉を喰らい続ける鬼になったんじやよ。それが、貴様に与えられた罰じゃ！」

罰？鬼？自分が？

人の生き血を啜り、人肉を喰らい続ける鬼？しかし、自分の体には何の異変も現れてはいない。

理解出来ないまま、ウロは嵐に飲み込まれそうになる。女の目は赤く染まっていく。

『今、貴様が喰らった魚が、あの子よ』

自分が女を喰っただと？

吐き気がした。

酸の臭いが口中に充滿している。

吐き気は止まらないが、胃からは何もでない。

「何を言っている？」

深い嵐がウロを飲み込む。辺りは暗くなり、何一つ周りにはない。『あの子は人魚を殺した。そして、愚かな人間の中でもさらに愚かなお主に、その肉をやったんじゃ。我らは海神と人間の子の末裔。人魚も我らの一族。海神様がそれを怒り、あの子を魚の姿に変えたんじゃよ』

「ばかな…」

ウロはイオナに巻かれた包帯を思い浮かべた。包帯の隙間から僅かに蒼い皮膚が覗いていた。そして、青白い顔。

『あの子は人間の形をして生まれた最後の子。それをお前は騙し、大罪を犯させた。我らの正統な血は完全に途絶えた。じゃが、愚かなお前に惚れたあの子は己のした事に何一つ後悔してない。それどころか、魚にされ、人間としても記憶を一切失った魚になってもお前の元にやって来た。イオナはお前に食われても、それすらも許してしまっただろう。じゃが、僕は許さん。だからこそ、お前が、あの子の肉を喰らうのを待っておったんじゃよ』

老婆は笑った。笑った拍子に顔を隠していた布が逸れた。青い鱗が老婆の顔を覆っていた。

『あの子は人魚の肉の事を何にもわかつたらん！人魚の肉は滋養強壯の薬だ。だが、それだけでは不老不死にはならんのじゃよ。一つだけ、条件がある。そして、お主の喰らった肉だけが、その条件を満たす。そして、お主がこれから歩む人生は、その条件ゆえに決して満たされる事はないだろう』

「…わかんねえな。何故、不老不死の人魚の肉を食わせることが復讐になるんだ？だいたいその条件でなんだ？」

「その内わかるさ。：人魚の：お前に滅ぼされた我が一族の怨念じや」

ザアツツツツ

深い海に鱗の肌を持つ老婆が引き込まれ、ウロも溺れた。波が幾重にも重なり、渦のように引き込まれる。

グワ〜ン

瞳を開いた。

ウロの瞳に藁で重ねた天井が見える。蜘蛛が獲物との間合いを詰めている。自分の小屋だった。

「夢か……………」

しかし、口の中に潮の臭いが残っている。

「バカな」

西から大嵐の臭いが流れてきた。

静かで暗い闇夜だった。

ダン。ダン。ダン。ダン。

ウロの板戸が激しく叩かれた。ウロが開くと女がウロに抱きついた。越智だった。

「逃げて！宇呂！早く！！！！」

「越智？どうしたんだ？人魚の肉はどうなったんだ？姫は死んだのか？」

「生きてるわ」

「じゃあ、何故？」

「わからないの。わからないけど、栗田様が貴方を殺すように命じているのを聞いてしまったの！」

「うっ……」

越智が固まり、ウロに倒れこんだ。後ろに男が立っていた。後ろから越智は刺されたのだ。

「ほお。君が小角の縁のある者か。思ったより若いな」

小角？ウロにはわからない。

「あんたは誰だ」

「宮子様は元気になられたよ。お礼に名ぐらい名乗ってもいいだろう。私の名は粟太真人。だが、これから、死んでしまう男には用の無い名だね」

「宮子様の病気を当て、治してしまうとは素晴らしいが、生かしておくわけにはいかない。宮子様は国母となられる方。まさか、帝の母親が白痴だった過去を持っていると知っている者がいるなんて許されないんだよ」

「なんだって？」

ウロはゴクリと唾を飲んだ。その様子を見た真人が少しだけ驚いたように言った。

「知らなかったのか？…だが、遅いな。今、知ってしまった」

真人は刀をウロの前に翳す。が、ウロは咄嗟に越智に刺さった剣を抜き出し、真人に飛び掛った。三年間、山賊をしていた。剣の扱いは慣れていいる。しかし、相手はするりと身かわし、ウロの左腕を切った。致命傷ではない。しかも、入り口に立っていた真人が身かわすために横に退いたことにより退路が開いた。ウロは一目散に逃げた。

刺客と思われる人間がウロを追う。山の中に入った。月明りで何とか襲い掛かる刺客を倒しながら山中を走る。しかし、刺客は訓練されており、思うように撒けない。

流水の音が耳に入った。

滝だ。

岩場に追い込まれた。刺客は二人に減っていた。同時に襲ってきた。一人はかわしたが、もう一人の剣がウロの腹に突き刺さった。

ウロは仰け反るように、岩場から足を滑らせ、深い滝壺に落ちて

いった。

水の中へと引きずり込まれた。  
深く。深く。沈んでいった。

「…っ痛」

東から日の光がウロの瞼を焦がす。

「…はぁ」

腹が燃えるようだった。恐る恐る手で腹を弄ると腸が飛び出してきた。ウロはまた気を失った。

深く暗い海がユラユラと瞼の奥で揺れている。

「ウウ〜口オ〜」

どこか聞きなれた懐かしい声がする。

「お〜い〜い〜い〜」

目を開いた。

「起きたかあ〜」

「カヤ？」

「おう。覚えてたか？」

ゆっくりと上半身を起こした。腹は…

「痛くない…」

手で腹を弄るが、何とも無い。カヤが湯気のたったお椀を差し出しながら溜息を吐いた。

「全く、血みどろで倒れていたと思ったら、全然怪我していないんだもんな〜。で、お前は何をしたんだ？」

「何って…大した事は無い。ただ、刺客に追われてただけだ」

「刺客う〜？全く、何したんだよ！でも、それで、お前よく無事だったな」

無事ではなかった、筈だった。腹を刺された。岩場からも落下した。普通では生きて入られない。

「お前こそ、何故ここにいるんだ？」



「オレ？ここに住んでる」

「…ここ、どこだ？」

「はあ？どこって近江だよ。お前、湖の辺で倒れていたんだ」  
「流されたのか？」

「まだ、その刺客に追われているのか？」

「いや。もう大丈夫だ」

「恐らく死んだと思っただろう。実際、死んでいたのかもしれない。  
生き返ったのか？」

「老婆は罰と言ったが、逆ではなからうか。」

「不老不死か……」

「自分の体で体験したようなものだったが、ウロには実感が持てな  
かった。」

「いずれにしても都には戻れないな」

「だったら、ここに住めばいい」

「ここに？ここで山賊するのか？湖だから山賊じゃないな」

「カヤは笑った。」

「山賊は止めた。妻を貰った」

「マジ？女は犯して殺すが口癖のカヤが妻だった？」

「カヤはまた笑った。」

「ああ、ちなみに、もっと驚くぞ。娘がいる」

「娘エ」

「目を丸く開けたウロをカヤは面白そうに眺めて、また笑った。」

「なんで？」

「何でって。ウロがオレを見捨てた後もオレは山賊していたんだが、  
たまたま、サトを…妻の名前だが、連れた一団を襲ったんだ。で、  
サトは綺麗だったから生かしたんだ。サトは貧しい奴婢の出で人買  
いに売られていく途中だったんだ。まあ、それで、何となく生かし  
ておいたら、子供が出来て、女の子でサ。まあ、山賊やっている場  
合じゃないなって。思ったわけさ。んで、親切な坊さんに土地を借  
りて、今はお百姓さんサマサマって所さ」

「百姓オ？」

益々、カヤに似合わない言葉にウロは戸惑うばかりだった。

「やってみると意外にいいもんだぜ。自分で土地を耕して飯を食うなんて。まあ、楽も贅沢も出来ないが、一家三人つつましく暮らしてるの」

「で、その妻と娘は？」

「外にいる。湖だ。野良仕事が終わってから、夕日を眺めるのが日課になってるよ」

「…湖」

「見るか？綺麗だぞ」

「ああ…」

赤い夕焼けが静かに湖底に沈んでいく。橙色の小波がゆっくりと流れる。小さな子が母親に手を引かれ、夕日をバツクに美しいシルエットが織り成されていく。カヤが二人に近づき、優しく声を掛けている。三人の影がウロには眩しかった。遠い記憶が小波のように流れてくる。

湖に写る母と父、そして、幼い自分。

そして、その記憶の結末は、夕日よりも赤い血の色。

多くの血が流れた。

なのに、夕日はあの頃と何一つ変わることなく、ただただ美しい。

そして、十年後。

眩しい太陽がウロに燦々と差し掛かる。額に玉のような汗が拭いても、拭いても落ちてくる。反面、耕す大地はすぐ乾く。しかし、収穫は近い。

「久しぶりじゃの。ウロ」

年老いた声にウロは顔を上げた。

「ああ、じいさんか。久しぶりじゃねえか」

老人は僧侶であつた。本当かどうかはわからないが、遠い国から渡ってきたらしい。薄汚れた衣を纏う僧侶は深い皺を顔中に刻み、湖面を見つめた。それから、ポンっとウロの肩を叩き、どこかに行つてしまつた。

あれから十年。ウロはこの僧侶の寺が所有する畑を耕していた。ほんの少し身を隠すつもりだつた。だが、この湖の傍で汗を流し、土を耕すことが、いつの間にか当たり前となつた。ウロ自身、不思議だつた。今は、汗を流し、僅かな収穫で過ごす毎日が、楽だとさえ思えた。そして、こうして来る日も来る日もただ土を耕すことで、少しずつ昔の出来事が風化されていくのを感じた。

緩やかな湖面のがいつもウロのそばにあつた。

日が沈む頃、カヤが尋ねてきた。

「ホントにウロは相変わらず、冷たいよな。オレから来ない限り、会わないもんなあ。たまにはオレの可愛い妻子に会つたらどうだ」  
小石を拾い、カヤはポチャリと湖に放り込んだ。隣でウロが笑つた。

「ノロケ話と娘自慢しかしないからだよ」

「つていつか、お前こそどこかに女はいないのかよ。全然、そんな話聞かないけど」

「朝から晩まで働いて、そんな元氣ない」

「なあゝに、年寄り臭い事、言つてるんだよ。そんな子供みたい顔して」

そう言つと、カヤはまじまじとウロの顔を見遣る。そうして、ほんの少し首を傾げる。

「お前つて、本当に昔と全然変わらないよな。少しは成長しろよ」  
「年食えつて事がよ。やだね」

ウロは笑つた。カヤも笑つた。湖は変わらずそこにあつた。

それから、数日後の事だつた。

朝日が静かに昇る頃、ウロはいつものように畑へと向かおうと自分の小さなあばら屋を出たところだった。遠くから一人少女が走ってきた。目に一杯涙を溜め、ウロに向かって走ってくる。

「ウロ！」

少女はそう呼んだが、ウロには誰だかわからなかった。ようやく肩で息をした少女がウロの前に立った。ウロを見て更に涙を浮かべた。

「父ちゃんと母ちゃんが死んだ」

ウロはようやく誰か見当がついた。小系だ。カヤの自慢の一人娘だった。

「カヤが死んだ？」

「母ちゃんも……」

上擦った声でそう言うと、ウロの胸に顔を埋めて、また、泣いた。流行り病でカヤが死ぬと、二日と空けずにその妻のサトも同じ病で後を追うように死んだという。小系は一人取り残された形となったのだ。頼る者もなく、ただ、父の古くの友人であるウロを訪ねて来たのだ。カヤはよくウロに会いに来ていたが、小系に会うのは実に五年ぶりぐらいだった。歩いて一刻もかからぬ場所に住んでいたが、ウロはカヤの家にはほとんど行った事がなかったのだ。

「そうか……」

ウロにはただ小系の頭を撫でてやるしか出来なかった。五年ぶりに会った小系は、もう子供ではなかった。傍目には二人はほとんど同じ年に見えた。

「一人はやだよ……」

小系は小さく呟き、潤んだ瞳でじっとウロを見つめた。

二人は一緒に暮らし始めた。

緩やかに夏は真夏へと移行する。

ウロは小系には手を触れなかった。

カヤの娘だと自分に言い聞かせたが、実際、そうであるような気

もするし、そうでないような気もした。

眩しさを増す太陽。

食欲に支配された中枢神経。

食欲で満たされない中枢神経。

目も眩む太陽に眩暈を覚え、微細の針となって太陽光線が肌を焼く。

餓えていた。

毎日、食べ物的事ばかり考えている。

違う。

食べても満たされない。量がないから。

違う。

違う。

小糸を想う。

だから、ウロは飢えた。

小糸は日増しに熱さを増す瞳でウロを捕らえる。その都度、目を逸らす。細い腕がウロを追う度に、避け続けた。

小糸の瞳をウロは恐れた。

底知れぬ正体不明の飢餓がウロを襲うからだ。

小糸の細い体をウロは恐れた。

目に見えぬ衝動以上の何かが自身の奥底で悲鳴をあげるからだ。二人の間に流れる極限に近い緊張の糸を切ったのは小糸だった。

「ウロは、小糸が嫌いか？カヤの娘だったからか？小糸はウロの嫁になりたい」

「小糸は両親を失ったばかりで寂しいだけだ」

カツと瞳が開いた。真っ赤な目。

「違う！」

小さな小糸。可愛い小糸。真っ赤な目をした小糸。大きな粒が兎

の目から流れ出る。

ボロボロボロボロボロボ...

……触りたい。

その手に。その頬に。その体に。その瞳に。

それは計算とか理性とか関係なくて、心が頭と切り離される。頭で否定している。心が小糸を欲しがっている。

これは、飢えなのか？それとも、これが人を愛するということなのか？

ボワ~~~~~ン

海が見えた。

深い深い深い深い深い深い海が見えた。

もう忘れたはずの女が笑っている。

恋して、愛して、飢えた。

呪いの始まり。

永遠と続く飢え。何億何万何千何百何十何日目の喰欲。眩しすぎる太陽。喰欲に支配された中枢神経。求める。彷徨う。喰らう。求める。彷徨う。喰らう。求める。何億何万何千何百何十何回と繰り返される。

永遠に満ちる事などない。

震えるウロの指が小糸の頬に触れた。指が小糸の涙で濡れた。そして、小糸の小さな顔を両手で包み込んだ。

接吻<sup>キス</sup>した。

深く深く深く深く深く深く接吻<sup>キス</sup>した。

小糸の唇から溢れ出てくるウロへの想い。熱くて甘い想いがウロ

の唇に入り込み、喉を通り体中に駆け巡る。

これが人を愛するということなのか？

満たされる心。

それとも、飢えなのか？

満たされる食欲。

ボワ~~~~ン

海が見えた。

深い深い深い深い深い海が見えた。

もう忘れたはずの女が笑っている。

恋して、愛して、飢えた。

小糸が両手でウロの胸を突き飛ばす。

小糸の兎の目がウロを見ている。

キョトンとした兎の目。

小さな可愛い口が開く。

「誰？あなたは誰？」

深い深い深い……

もう忘れたはずの……

恋して……、愛して……、飢えた……

呪いの始まりの、結末。

「誰？あなたは誰？」

一瞬、ウロは何を言われたかわからなかった。ただ、唇から甘い味がした。

満たされてしまった食欲。

だから、ウロは涙を流した。

静かに流した。

全てを理解した。

愛の記憶を喰らってしまった。

生まれてから人を愛した事がなかった。

「だから、知らなかった。…この苦しみを知らなかった」

小系のキョトンとした丸い目がウロの為に哀れんだ。

「どうして泣いているの？何か悲しい事があったの？」

「小系は、またオレを愛してくれるのか？」

そして、また忘れるのか？

愛して忘れて永遠に生き続ける意味もわからぬまま、また愛して

忘れられるのか？

耐えられない。

老婆は言った。

永遠にこの世を彷徨い続け、人の生き血を啜り、人肉を喰らい続ける鬼になったと。

オレはいずれ鬼になるのか。血に飢えた鬼を止められることなど

出来るのか？

小系を殺す事なんて出来ない。

「ねえ。教えて。アナタは誰？私はどうしてここにいるの？ねえ。

どうして、あなたは泣いているの？」

「お別れだからだよ。小系。さよなら」

男には人間にはない本能が備わった。

それは、人を求め喰らう本能だ。

それも、ただの人ではない。

自分に思いを寄せる人間の血肉を喰らわねば、その飢えを止めることが出来ない。

思いは、何でもよかった。

愛でも、恋でも、友情でも、哀れみでも、ほんの少し味が違うだ



け。

しかし、男は飢えても死なない。

男は不老不死の体で永遠に飢え続ける。

飢えが永遠に男を苦しめる。

人魚の呪い。それは、

今後、男が他の女を愛する事が出来ぬように…

他の女が男を愛さないように…

そして、何も残らない。

空は空っぽだ。

そこは、とても静かだった。  
時間は果てしなくゆっくりと流れ、湖面に輝く光だけがゆらゆらと忙しなく揺らめいていた。

ウロは眼下に広がる湖面を眩しそうに見下ろした。  
真夏の太陽はウロの瞳を焼き尽かさっぱりに光を放つ。  
窓ガラス越しにはその熱も届くことなく、熱いというイメージだけが脳内に留まった。

「ただいま」

その声と共に、ボタンと勢いよくドアが解き放たれる音が響いた。  
その後、バタバタと小気味よい足音が続く。

いつもの、どのくらい続いたであろう日常の一幕。

「ウロ！」

目一杯の笑顔でコイトがウロに飛びついた。

二人は勢いあまって、その後ろのベッドに倒む。

「おかえり。コイト。それより、もっとゆっくり走れないの？コイトは」

コイトの重みを感じながら、ウロは溜息交じりに言った。

ウロに乗ったまま、大きな瞳でコイトはウロを見上げる。

「ゆっくり走るの、歩くというのではないか？そうたる？ウロ」  
キョトンとした混じりけのない瞳は、とても綺麗だった。

その瞳に自分を見つけ、ウロは微笑んだ。

「家の中では、歩こう。これでいいかな？」

「いいよ。家の中では走らない」

「ありがとう。コイト。今日のお散歩は楽しかった？」

「うん。いっぱい、太陽の光を浴びたよ」  
はらりとコイトの黒い髪がウロの頬にかかる。  
ウロの指がコイトの頬に触れ、そのままコイトの顔を自分の顔へと寄せた。

コイトの唇がウロの唇に触れる。

永遠ではない短い時間。

ウロはゆっくりと瞼を開く。

コイトは大きな瞳でウロを見つめていた。

そして、微笑んだ。

「今日は、コイトがご飯をつくるよ」

すると、ウロは難しい顔をして、起きあがった。

「うん。コイトは、料理が下手だからな。僕がちゃんと教えてあげるから。それから、だね」

コイトは拗ねたように立ちあがる。

立ち上がった頃には笑顔だった。

「タラコスパゲッティーがいいな」

「それは、無理だよ。ほうれん草のソテーでいいかな？」

「うん。わかった。コイトも手伝うよ」

そう言うと、コイトはドレッサーを思い切り開いた。

そして、黒い薄手の上着を手に取ると、そのままウロに放り投げた。

ウロは上着を着ると、テーブルに置かれた軍手をつけた。

その頃には、コイトは既に玄関で麦藁帽子を持って待機している。

「ウロ！早く！」

ウロは手渡された麦藁帽子を被り、上着を着て、軍手をはめる。

二人はマンション屋上にある菜園に向かった。

屋上の菜園には、二人で植えた野菜が並んでいる。

「ホウレンソウ…、ホウレンソウ…」

コイトがいくつかの野菜からほうれん草を探している。

麦藁帽子の隙間から、太陽の光がチリチリとウロの肌を焼いた。

喉が渴く…

コイトのＴシャツの袖からは、華奢で白い腕が伸びている。

コイトの黒くて長い髪はサラサラと風に揺れている。

コイトの黒くて多くな瞳はキョロキョロと目当ての物を探しだそうとしてる。

小さな菜園はおままごとだった。

そんな菜園は限界を迎えようとしていた。

永遠と続く飢え。

「ウロ！」

突然、立ちくらみがウロを襲った。

座り込んだ自分にコイトが心配げな顔で寄ってくる。

「大丈夫か？ウロ…」

黒い黒い瞳は、自分を映している。

その奥の回路も限界を迎えようとしている。

何億何万何千何百何十何日目へとさらに続く食欲。

食欲に支配された中枢神経には逆らえない。求め、彷徨い、喰らい、

そして、また、求めて、彷徨って、喰らって、求め続ける。

何億何万何千何百何十何回と繰り返される愛の囁きと別れの言葉。

永遠の終わりを待ち焦がれる。

終わりは来たはずだ。

人はどこにもいない。

人は、人が描いた最悪のシナリオ通りに進んだ。

太陽光線も水も空気も何もかも人が生きる限界を超えた。

人は少しずつ少しずつ消滅し、ウロを残し消えた。

残された生命も少しずつ枯れている。

ウロは、人が残した遺産の中で生活をしていた。  
太陽光で動く人類の文化の中で。  
もしかしたら、どこかで人は生きているのかもしれない。  
何度となく思っては、諦めた。  
人を見なくなつて、あまりにも時間が過ぎた。

自分は飢えても死なない。

そして、コイトも…

機械仕掛けのコイト。

太陽の光で動き続けるコイト。

自分を機械と知らないコイト。

いつもいつも自分のことを見つめるコイト。

そうプログラミングされたコイト。

消耗品のコイト。

いつか壊れて動かなくなるコイト。

少しずつコイトの動きが狂っているのを感じていた。

学習能力の低下が著しい。

まるで子供だ。

「ウロ…」

「大丈夫だよ。コイト」

「よかった。アイシテル。ウロ」

少しずつコイトの回路が狂っている。

「僕もだよ。コイト。大好きだよ」

コイトの唇からは何の味もしない。

喉が渴く…

永遠と続く飢え。

何億何万何千何百何十何日目へとさらに続く食欲。

食欲に支配された中枢神経には逆らえない。求め、彷徨い、喰らい、  
そして、また、求めて、彷徨って、喰らって、求め続ける。

何億何万何千何百何十何回と繰り返される愛の囁きと別れの言葉。  
永遠の終わりを待ち焦がれる。

この満たされることのない日常すら終わりに向かう。

呪いは未だに続いているのか？

人が存在しないこの世界にも神は存在するのか？

「タダイマ」

いつものようにコイトが走ってくるが、動きがぎこちない。

思考回路だけでなく、コイトの体中が悲鳴を上げているようだ。

だが、コイトはそれに気付くことなく、ウロに飛びかかりベッドに倒れこむ。

そして、いつものように黒い瞳でウロを見つめる。

「ウロ。アタシ。ユウエンチに行きたい」

突然、壊れかけたコイトの回路が、とんでもないことを言い出した。

「遊園地？」

「遊園地だ。この前、行っただろう？」

この前とは、いつのことだかわからない。

コイトを拾ったのは、もうそんな時代ではなかった。

だが、コイトのメモリには『遊園地』が刻まれているのだろうか？

「いいよ。行こう」

「うん」

断る理由などない。

なぜ機械が突然こんなことを言い出したのかはわからない。

単なる回路のショートかもしれない。

なんでもいい。コイトが行きたいなら、どこまでも行こう。

自分は死なない。

でも、コイトは遠くはない将来、動かなくなる。

動く間に、一緒に壊れた世界を見るのもいいのかもしれない。

ひさしぶりに外で出た。

砂ぼこりに埋もれた廃墟の中を二人でとぼとぼと歩く。  
遊園地の場所など分らない。

ただ、二人で歩いた。

「ユウエンチには、カンランシヤがあるよ。ジェットコースターもある。えっと、それから、メリーゴーランドもあるね」「  
なんだか嬉しそうにはしゃいでいる。

コイトの製造番号から、介護系アンドロイドだと推測した。  
精神病患者用の介護ロボットだ。  
まるで家族のように世話をしてくれる機械だ。

二人はどこまでもどこまでも歩いた。

砂ぼこりの中。いくつもの夜が来て、朝が来た。

昼の眩しい太陽の中歩いた。

「メリーゴーランドはきっと楽しいよ」  
どこまでも…

夜の凍てつく寒さの中歩いた。

「ジェットコースターはきっと怖いよ」  
どこまでも…

どこまでも…  
どこまでも…

「ウロ…、疲れた」

機械にも限界が来たようだ。

機械が言う「疲れた」は故障の合図。

それも、レベル高の故障である。

「休もうか？」

ウロは廃墟の一つに入った。

割れたガラス窓の隙間から入るとレストランのようだった。

コイトを壁に寄りかからせるように座らせ、自分もその隣に座った。

「ウロ。私たちはどこに行くの？」

「…遊園地だよ」

「ユウエンチって何？」

「遊園地には、観覧車があるよ。ジェットコースターもある。それから、メリーゴーラウンドもあるね」

「楽しそうだね。行きたいな」

「そうだね。行こう」

「ねえ。ウロ。ユウエンチには、湖はあるの？」

「遊園地に湖はないよ」

「ねえ。ウロ。コイトは湖が見たいよ」

「湖…」

一瞬、ウロの目の前に湖が広がり消えた。

「綺麗だね」

うつとりと、コイトが言った。

まるで、ウロと同じ光景を見たかのように…

あの湖は、いつも見ていた湖であって、そうでない湖だった。

遠い遠い昔、見たはずの光景。

廃墟に囲まれた湖ではなく、鬱蒼とした深い緑に囲まれた湖。

キラキラと光を弾く湖面。

緩やかな波。

どこまでも静かで…

「戻ろうか…。コイト」

隣に座るコイトにそう言って笑いかけた。

コイトは静かに眠っていた。

「コイト？」

返事はない。

ウロはコイトを担いで一人で歩いた。



来た道を戻った。

砂ぼこりの中。いくつもの夜が来て、朝が来た。  
昼の眩しい太陽の中歩いた。

「コイト。メリーゴーラウンドはきつと楽しいよ」  
どこまでも…

夜の凍てつく寒さの中歩いた。

「コイト。ジェットコースターはきつと怖いよ」  
どこまでも…  
どこまでも…  
どこまでも…

「コイト。湖は、もうすぐそこだよ…」

そこは、とても静かだった。

時間は果てしなくゆっくりと流れ、湖面に輝く光だけがゆらゆらと忙しなく揺らめいていた。

湖の見える小さな丘にウロは辿り着いた。

ウロは疲れ切り座り込み、動かなくなったコイトを静かに下ろした。  
そして、コイトを抱きかかえた。

「一人はいやだよ。コイト…」

震えるウロの指がコイトの頬に触れた。  
指が自分の涙で濡れた。

そして、コイトの小さな顔を両手で包み込んだ。

キスをした。

深く深く深く深く深くキスした。

ウロはコイトを愛していた。

深く深く深く深く深く愛していた。

ウロの唇から溢れ出てくるコイトへの想い。

熱くて甘い想いがウロの唇から吐き出される。  
そして、その想いはコイトに入り込み、喉を通り体中に駆け巡る。  
人を愛するとはこういうことなのか？  
溢れ出る想い。  
与えたい。  
満たしたい。

ボワ~~~~~ン

海が見えた。  
深い深い深い深い深い海が見えた。  
もう忘れたはずの女が笑っている。  
恋して、愛して、飢えた。

コイトが黒い黒い瞳を開いた。  
キョトンとした黒い瞳。  
その瞳は充血していて、まるで兎の様だ。  
そして、小さな可愛い口が開く。

「ウロ…、愛している」

深い深い深い……  
もう忘れたはずの……  
恋して…、愛して…、飢えた…。  
呪いの終わり…

「ウロ…、愛している」

一瞬、ウロは何を言われたかわからなかった。ただ、唇から甘い味がした。  
満たした想い。

だから、ウロは涙を流した。  
静かに流した。

そこに、小糸がいたから。  
あの小糸がいたのだから…

「小糸…」

湖は鬱蒼とした緑に囲まれ太陽の光を忙しく反射している。

長い道のりの終わりを感じた。

そして、短い道のりの始まりもまた感じる事ができた。

小糸を強く強く抱きしめた。

「ウロ…」

小糸から想いが伝わる。

消えることのない想いがウロの体中を駆け巡る。

「一緒に、ずっとずっと二人で生きていこう」

有限の生を二人で生きていこう。

その後、ゆつくりと少しだけ時は流れた。

赤い夕焼けが静かに湖底に沈んでいく。

橙色の小波がゆつくりと流れる。

小さな子が母親に手を引かれ、夕日をバックに美しいシルエットが  
織り成されていく。

ウロは二人に近づき、ふと呟いた。

「…ユウエンチか」

小さな子が不思議そうにウロを見上げた。

「お父ちゃん。ユウエンチって何？」

「ユウエンチには、カンランシャがある。ジェットコースターもある。それから、メリーゴーラウンドがあるんだよ。カンランシャは大きくて丸くて人を乗せてクルクル回るんだ。それから、ジェット

コースターは、人を乗せて馬よりもずっと早く走るんだ」

「素敵なお伽噺ね」

うっとりとした赤い湖を見つめ、小糸が呟いた。

ウロは小さな子供の頭を撫でて、さらに眼尻に皺を刻んだ。

「それから、メリーゴーラウンドはたくさんのお馬さんが子供達を乗せるんだよ」

「ボク、ユウエンチに行きたい」

「そうだね。三人でいつか行こう」

そこは、とても静かだった。

時間は果てしなくゆっくりと流れ、湖面に輝く光だけがゆらゆらと忙しなく揺らめいていた。

湖は、あの頃と何一つ変わることなく、ただただ美しい。

最終話

The tastic love from the edge of

最後までお読みいただきありがとうございましたm┐┐(m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5904e/>

---

tastic love

2011年9月18日03時30分発行